

秦泉寺廃寺（第6次調査）

— 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2004.12

高知市教育委員会



巻頭カラー 1 北方から秦泉寺鹿寺を望む。



巻頭カラー 2 秦泉寺鹿寺軒瓦



巻頭カラー 3 讃岐系軒瓦

序

高知市秦地区は、北山の南麓に位置し、水や緑に恵まれた地勢にあります。近年、高速道路や高知北部環状線の開通等に伴い、大型商業施設の建築や宅地開発が進み、大きな環境の変化を遂げました。こうした都市化の一方で、当地には、ともすれば忘れられがちな貴重な文化遺産が数多く残っております。その一つが、高知の歴史を語る上では欠かせない県内でも最古級の古代寺院跡、秦泉寺跡です。

高知市では、これまでも地元の方々や（財）高知県埋蔵文化財センターをはじめとする皆様の協力をいただきながら、5次にわたる発掘調査を実施し、徐々に寺院の姿の一端が明らかになってきました。ただ、各調査の範囲が限られており、広大な寺院跡は未だ全貌を現わすまでには到っておりません。

平成12年に実施した今回の調査区域は、寺院の中心部に近いと推定される場所であり、多量の土器や瓦が出土しました。その中からは、創建時の白鳳時代のものに加え、初めて香川県善通寺の遺物と同じ文様型で造られた瓦も見つかり、古代の土佐と讃岐の文化交流を示す新たな資料の発見という、貴重な成果を得ることができました。

この報告書が、高知市の歴史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

例言

1. 本報告書は高知県高知市秦に所在する「秦泉寺廃寺」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は高知市教育委員会が主体として、2000年9月29日から12月28日まで行った。調査面積は約1,300平米である。また、重機掘削については共運工業株式会社、測量基準点設置については四国航測株式会社、上空からの写真撮影については株式会社アイシー、遺構等の実測については大旺建設株式会社の協力を得た。
3. 現地調査の体制は以下の通りである。

調査員 田上 浩、西森重夫(高知市教育委員会)

測量補助員 竹内 誠(高知市教育委員会)

松田重治、田所希代江(大旺建設株式会社遺跡調査室)

4. 発掘調査においては旧日本測地系による公共座標(第IV系)を使用した。本報告書内における座標の数値は全て旧日本測地系による。なお、調査対象地中心付近における世界測地系の数値との対応は下記のとおりである(数値変換には国土地理院の計算式を使用した)。ただし、巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。

		旧日本測地系	世界測地系
地理座標	緯度	33°34'38"N	33°34'50"N
	経度	133°32'20"E	133°32'11"E
平面直角座標(第IV系)	X座標	+64,000m	+64,379.457m
	Y座標	+3,630m	+3,388.207m

5. 整理作業は現場終了後2004年11月まで行った。遺物及び諸記録は高知市教育委員会で保管している(遺物の注記はJT-00とした)。また、瓦の胎土分析については四国上建株式会社及びバリノ・サーヴェイ株式会社、遺物実測・拓本については大旺建設株式会社の協力を得た。
6. 上記以外に、現地調査及び整理作業において下記の方々のご協力を得た。(順不同・敬称略)
 現地調査 大八木邦子、岡林福三郎、亀井清恵、亀井利治、坂本多津子、坂本基猪、坂本洋子、佐田笑子、澤村豊彦、烏津忠利、高木 努、田上かおり、西森千枝、野村満子、浜田肇子、榎本 實、三原文夫、森田和美、森本美穂子、山本栄子
 整理作業 櫻尾洋子、佐田笑子、竹内 誠、田上かおり、松本安紀彦
7. 本書の編集は田上が行った。執筆は、第1章3節から5節を梶原瑞司が、それ以外を田上が分担した。また、編集に際して岩崎佐枝、大賀幸子、西村謙二の協力を得た。また、遺物写真

撮影は梶原、遺物観察表の作成は田上・梶原が共同で行った。

8. 本書中の瓦の図版配置は次表の通りである。

	鍍瓦	男瓦	字瓦	女瓦	鴟尾他
図版	瓦当拓影 横断面	凸面拓影 縦断面 凹面拓影 横断面	凹面拓影 縦断面 凸面拓影 瓦当拓影	凹面拓影 縦断面 凸面拓影 横断面	凹面拓影 縦断面 凸面拓影 横断面
写真図版	瓦当のみ	凸面 凹面	凹面 瓦当 凸面	凹面 凸面	凹面 凸面

9. 本書の出版に際して、軒瓦の型式について大旺建設株式会社遺跡調査室の松田重治氏から、瓦の原料胎土の産地について四国土建株式会社文化遺産調査室の武吉眞浩氏から、胎土の自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社から、それぞれ玉稿をいただいた。記して感謝したい。
10. 発掘調査及び報告書作成にあたり、高知県教育委員会及び高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から多くの助言、教示を賜った。記して感謝したい。

本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過	
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査の方法	
(1)	試掘調査	1
(2)	本発掘調査	2
第3節	遺跡の地理的環境	2
第4節	遺跡の歴史的環境	4
第5節	これまでの秦泉寺廃寺の調査について	5
第2章	調査の成果	
第1節	基本層序	9
第2節	検出遺構と出土遺物	
(1)	欄列	9
(2)	掘立柱建物跡	9
(3)	ピット及び土坑	18
(4)	溝跡	21
(5)	自然流路	36
(6)	地築跡	38
第3節	包含層出土遺物	
(1)	瓦集中部	38
(2)	その他出土状況を図示した遺物	42
(3)	その他の遺物(SD2・3より西側で出土)	45
(4)	その他の遺物(SD2・3より東側で出土)	52
(5)	試掘調査出土遺物	53
第3章	まとめ	
第1節	遺構	
(1)	溝跡	69
(2)	掘立柱建物跡及び欄列	69
(3)	時代的な位置づけ	70
第2節	遺物	
(1)	全般	71
(2)	瓦	71
(3)	須恵器	72
(4)	土師器	73
第3節	終わりに	73
付 編		
付編目次		77
付編1	秦泉寺廃寺出土の軒瓦～様式の共有に見る同族意識～	79
付編2	秦泉寺廃寺跡出土瓦類の原料土種と採掘地層の同定に関する調査Ⅰ	101
付編3	秦泉寺廃寺跡出土瓦類の原料土種と採掘地層の同定に関する調査Ⅱ	115

図版目次

第1図	本調査時調査区配置図	2
第2図	周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図	3
第3図	検出遺構全体図	7
第4図	調査区北壁土層断面図	10
第5図	調査区東壁土層断面図	11
第6図	SA1・SB1・SB2平面図・断面図	13
第7図	SB3・SB4・SB5平面図・断面図	14
第8図	SB6・SB7平面図・断面図	15
第9図	SB8・SB9・SB10平面図・断面図	16
第10図	SB11平面図・断面図	17
第11図	SK1平面図・断面図	18
第12図	SK1遺物出土状況図	19
第13図	横列・孤立柱建物跡・ピット・土坑出土遺物及び拓影	20
第14図	SD1遺物出土状況図1	21
第15図	SD1遺物出土状況図2	22
第16図	SD1平面図・断面図	23
第17図	SD1出土遺物実測図及び拓影1	24
第18図	SD1出土遺物実測図及び拓影2	25
第19図	SD2出土遺物実測図及び拓影	26
第20図	SD2平面図・断面図	27
第21図	SD3平面図・断面図	28
第22図	SD3遺物出土状況図1・北半部	29
第23図	SD3遺物出土状況図2・南半部	30
第24図	SD3出土遺物実測図及び拓影1	31
第25図	SD3出土遺物実測図及び拓影2	32
第26図	SD3出土遺物実測図及び拓影3	33
第27図	SD3出土遺物実測図及び拓影4	34
第28図	SD3出土遺物実測図及び拓影5	35
第29図	SR1平面図・断面図	37
第30図	瓦集中部1・2・3遺物出土状況図	39
第31図	瓦集中部出土遺物実測図及び拓影1	40
第32図	瓦集中部出土遺物実測図及び拓影2及び状況図遺物実測図及び拓影	41
第33図	瓦集中部4・5遺物出土状況図	43
第34図	瓦集中部6・7遺物出土状況及びその他遺物出土状況図1・2	44
第35図	包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影1	46
第36図	包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影2	47
第37図	包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影3	49
第38図	包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影4	50
第39図	包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影5	51
第40図	包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影6	52
第41図	包含層出土遺物(SD2・3東)実測図及び拓影	53
第42図	試掘調査出土遺物実測図及び拓影	54

表目次

須恵器・土器観察表1(1~7、10~15、30~35)	55
須恵器・土器観察表2(36、39~56)	56
須恵器・土器観察表3(57~71、106、112、115~119)	57
須恵器・土器観察表4(120~139)	58
須恵器・土器観察表5(140~159)	59
須恵器・土器観察表6(160~178)	60
須恵器・土器観察表7(179~199)	61
須恵器・土器観察表8(200~216)	62
須恵器・土器観察表9(217~218、252~261、266~272)	63
瓦観察表1(8~9、16~29、38、72~77)	64
瓦観察表2(78~95、97~100)	65
瓦観察表3(102~105、107~109、110~111、113、225~235)	66
瓦観察表4(236~251、262~265)	67
瓦観察表5(274~280)	68
鎧瓦観察表	68

写真図版目次

巻頭カラー	1. 北方から秦泉寺廃寺を望む。2. 秦泉寺廃寺軒瓦、3. 讃岐系軒瓦
写真図版1	1. 調査区北壁(西半部)、2. 調査区北壁(東半部)、3. 調査区東壁
写真図版2	4. 調査区西半部完掘状況(上層)、5. 調査区西半部完掘状況(中層) 6. 調査区西半部完掘状況(下層)
写真図版3	7. 調査区東半部完掘状況、8. SD1 遺物出土状況(東から)
写真図版4	9. SD2 完掘状況及びSD3 検出状況(南から)、10. SD3 完掘状況(北から)
写真図版5	11. SD3 北部遺物出土状況(南から)、12. SD3 中央部遺物出土状況(南から) 13. SD3 南部遺物出土状況(南から)
写真図版6	14. SK1 及びSB6 完掘状況及び遺物出土状況 15. 瓦集中部1 遺物出土状況(西から)
写真図版7	16. 瓦集中部2 遺物出土状況(西から)、17. 瓦集中部3 遺物出土状況(東から) 18. 瓦集中部4 遺物出土状況(南から)
写真図版8	19. 瓦集中部5 上層遺物出土状況(南から) 20. 瓦集中部5 下層遺物出土状況(南から) 21. 瓦集中部6 遺物出土状況(東から)
写真図版9	22. 瓦集中部7 遺物出土状況(西から)、23. 出土状況図2 遺物出土状況(北東から) 24. 試掘坑壁面の地層跡
写真図版10	出土土器1(1~7、10~15、30~36、39~40) SB4・5・11、PI・2・3、SD1・2・3
写真図版11	出土土器2(41~64) SD3
写真図版12	出土土器3(65~71、106、112、115~129) SD3、瓦集中部4、出土状況図1 SD西包含層
写真図版13	出土土器4(130~152) SD西包含層
写真図版14	出土土器5(153~170、172~173) SD西包含層

写真図版15	出土土器6(171~193) SD西包含層	139
写真図版16	出土土器7(194~214) SD西包含層	140
写真図版17	出土土器8(215~218、252~261、266~272) SD西・SD東包含層、試掘調査	141
写真図版18	出土瓦(鐘瓦以外)1(8~9、16~22) SK1、SD1	142
写真図版19	出土瓦(鐘瓦以外)2(23~29) SD1	143
写真図版20	出土瓦(鐘瓦以外)3(38、72~80) SD2、SD3	144
写真図版21	出土瓦(鐘瓦以外)4(81~87) SD3	145
写真図版22	出土瓦(鐘瓦以外)5(88~95) SD3	146
写真図版23	出土瓦(鐘瓦以外)6(97~100、102~103) 瓦集中部2・3	147
写真図版24	出土瓦(鐘瓦以外)7(104~105、107~111、113) 瓦集中部3・4・6・7、出土状況図1	148
写真図版25	出土瓦(鐘瓦以外)8(225~234) SD西包含層	149
写真図版26	出土瓦(鐘瓦以外)9(235~243) SD西包含層	150
写真図版27	出土瓦(鐘瓦以外)10(244~250) SD西包含層	151
写真図版28	出土瓦(鐘瓦以外)11(251、262~265) SD西・東包含層	152
写真図版29	出土瓦(鐘瓦以外)12(274~280) 試掘調査	153
写真図版30	出土鐘瓦	154

秦泉寺廃寺 (第6次調査)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経過

秦泉寺廃寺は高知市秦地区に所在する古代寺院跡で、創建時期は白鳳期に遡ると想定される県内最古級の寺院跡として知られている。

2000(平成12)年5月、秦泉寺廃寺の推定区域内において「埋蔵文化財の所在の有無」についての照会が、続いて7月に「埋蔵文化財発掘の届出」が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対して提出された。これを受けて市教育委員会では8月3日～11日にかけて試掘調査を行った。その結果、設定した5箇所の試掘坑全てにおいて瓦・土器をはじめとする遺物が出土するとともに遺構も確認され、特に対象地の東半部に多く分布していた。

試掘調査の結果を受けて事業者・県教育委員会・市教育委員会の三者で協議が行われ、当該地は1975(昭和50)年に行われた第1次調査、及び1977(昭和52)年に行われた第2次調査の対象地に隣接しており、寺院の中心部分であることも予想されるため、遺構の破壊される建物予定地及び浄化槽予定地については緊急発掘調査を行い、また、遺構は破壊されないが駐車場が予定されている部分のうち、試掘調査によって遺物・遺構の多く確認された対象地の東半分についても、同時に学術調査として可能な限り調査を行うということで意見の一致をみた。発掘調査は以下の体制で行われた。

調査主体 高知市教育委員会
事務全般 岡崎由桂(高知市教育委員会社会教育課主事)
現地調査 田上浩・西森重夫(同課指導主事)
現地調査期間 2000(平成12)年9月29日～12月28日

第2節 調査の方法

今回の調査対象地は、県道高知本山線から西側へ約40m程度西側に入った位置の水田であり、第1次・第2次調査の調査区のすぐ北側に隣接している。第1次調査において北方に設定されたレンチを除けば、これまででもっとも北に位置する調査区である。

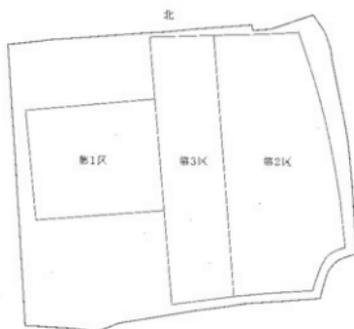
(1) 試掘調査

調査対象地の形状が正方形に近かったため、試掘調査においては5m×5mの試掘坑を対象地の四隅と中央部付近の合計5箇所に設定して調査を行った。調査においては主に機械力を用いて掘削を行い、遺構を検出したところで人力に切り替えた。ただし、遺構の検出された時点で試掘調査実施中に事業主との調整を行い、本調査実施についての理解が得られた。従って、試掘調査による遺跡の撹乱を極力少なくするために、それ以降に検出された遺構については確認のため一部を

半裁するにとどめ、遺物についても、それまでに露出した部分を取り上げるにとどめている。この試掘調査出土遺物については、調査後の概要報告書において簡単に触れたのみであり、実測図等も完全ではなかったため、本報告書の第2章の最後に改めて報告する。

(2) 本発掘調査

本調査については、開発工事のうち対象地の周囲の擁壁工事が調査と併行して行われた関係で、対象地の中央付近の調査が最後になったため、調査順に対象地の西側部分を第1区、東側部分を第2区、中央部分を第3区として順次調査を行った。調査の前半においては第1・第2区を併行して調査し、第1区を埋め戻した後の後半においては第2・第3区を併行して調査した。以上述べたように、現地においては3つの調査区を設定したが、各調査区は繋がっており調査面積もさほど広くないことから、本報告書では遺構・遺物について、現地調査時の各調査区別に分割するということを行わず、包含層出土遺物についてはまとめて記述し、また遺構番号についても通してつけている。

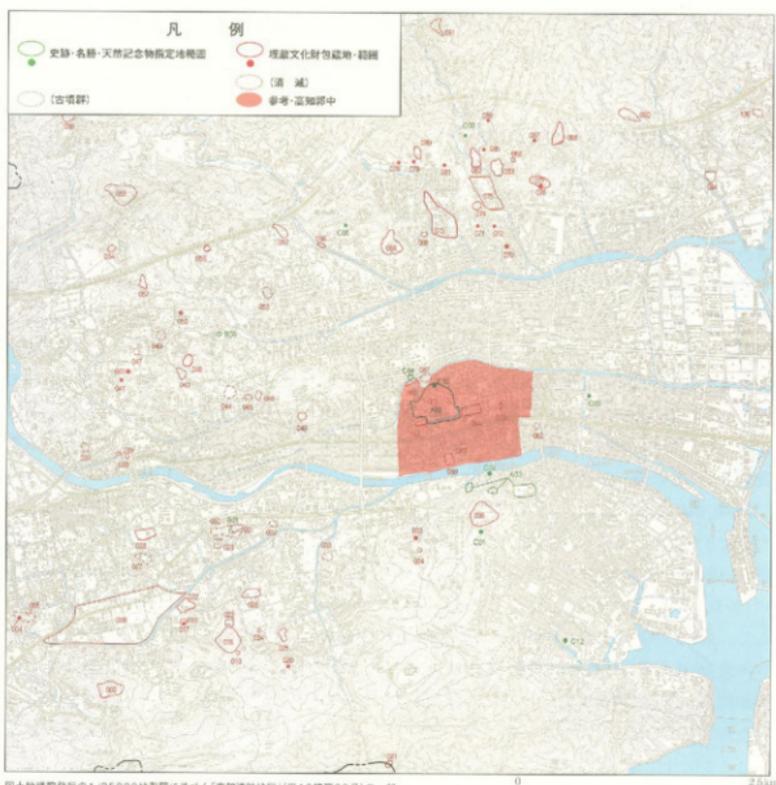


第1図 本調査時調査区配置図(S=1/800)

本調査の手順については、基本的には遺構検出面までは機械力を利用して掘削したが、検出面より上部に何ヶ所か瓦集中部が存在していたため、その部分については出土状況を記録した後、遺物の取り上げを行った。掘削の深さについては、建物の予定地では上部の遺構検出面において調査・記録を行った後、更に下層で検出を行い合計三回遺構の検出を行った。しかしながら、駐車場予定地部分においては可能な限り調査を行ったが、大部分で遺構検出回数が2回以内となっている。そのため、その部分については、より古い時期の遺構が下層に存在している可能性がある。

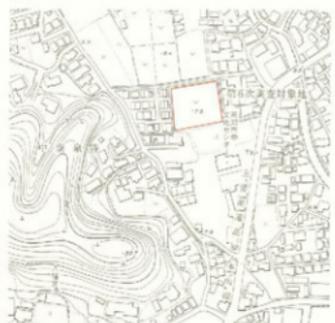
第3節 遺跡の地理的環境

秦泉寺廃寺の立地する高知市は、太平洋に南面する高知県のはほぼ中央部に位置し、北部を高度300～400mの東西に連なる山地、南部は300m級の帯状の山脈、西方はなだらかな丘陵部と三方を囲まれた盆地状の平野部にあり、南東方向から入り込んだ浦戸湾に面している。現在の高知市街地は、市内を東流する鏡川流域にできた三角州上に広がっているが、低湿地であり開発の進んだのは主に近世以降である。秦泉寺廃寺は、この高知市中心部より、北方に約2.5km離れた、秦(はだ)地区に所在する。古代において当地は、浦戸湾が渚線を望めるほどに迫り、水上交通には至便で、現在とは全く異なる景観を呈していたものと思われる。そして北部山地に源を發し、久万川に流入



国土地理院発行の1/25000地形図に基づく「高知遺跡地区」(平13建第82号)の一部を1/50000の縮尺に複製。(使用地形図 一の(高知11号-2)こうち(高知7号-4))

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
A02	高知城跡	城跡跡	近世	079	宇津野1号墳	古墳	古墳
C02	吉富古墳	古墳	古墳	080	平浜野遺跡	整布地	縄文
070	愛宕不動堂前古墳	古墳	古墳	081	豊原寺遺跡古墳	古墳	(前説)
071	幸小学校校庭古墳	古墳	(前説)	082	吉弘遺跡	整布地	古代
072	愛宕神社裏古墳	古墳	古墳	083	笠巻野遺跡	整布地	古・中世
073	西奈倉寺遺跡	整布地	古墳・中世	085	日の前古墳	古墳	(前説)
074	豊泉寺別院跡	城跡跡	中世	086	北堂集寺遺跡	整布地	源平
075	豊泉寺願寺	寺院跡	古代	087	基谷古墳	古墳	(前説)
076	土居の飯古墳	古墳	(前説)	088	豊泉寺城跡	城跡跡	中世
077	前里城跡	城跡跡	中世	089	桑原(栗田)神社古墳	古墳	古墳
078	宇津野2号墳	古墳	古墳	090	桐野城跡	城跡跡	中世



高知市発行の高知市城都市地図(1/2500)を1/5000に縮小

第2図 周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図

する名切川・金谷川・東谷川によって扇状地が形成されており、高知市域では比較的早い時期から、人々の生活の痕跡を確かめることができる。

第4節 遺跡の歴史的環境

現時点では、秦泉寺廃寺周辺での旧石器時代の遺跡は未発見であるが、約700m西北には、縄文時代の磨製石斧・敲石の出土した宇津野遺跡がある。また弥生時代では有柄式石剣の出土した北秦泉寺遺跡がある。これらを含め古代における人々の定住した集落跡についての遺構は未確認である。しかし、古墳時代後期になると、横穴式石室を有する古墳が数多く出現する。北部丘陵山麓の宇津野1・2号墳、中秦泉寺の新屋敷古墳、北秦泉寺の吉弘古墳・日の岡古墳・仁井田神社裏古墳・淋谷古墳、東秦泉寺の土居の前古墳、南方には愛宕不動堂前古墳・秦小學校校庭古墳・愛宕神社裏古墳・愛宕山古墳と、確認できるだけで12か所を数え、古墳の少ない高知市にあっては比較的集中した地域となっている。これら古墳群の被葬者や築造にあたった集団が、当秦泉寺廃寺の造営に関わった集団と何らかのつながりを有している可能性は十分にあるが、今のところそれを確認できる傍証は得られていない。

「秦泉寺廃寺」の名称は、現地名「秦泉寺」によっているが、古代寺院の名称として用いられていたかどうかは不明である。文献史料においては『阿波国徴古雜抄』収録の乾元2(1303)年「那賀郡木頭村伊瀬権現夢想日記」に「土州秦泉寺」とあるのが初見で、次いで永禄3(1560)年の本山茂辰判物の「於秦泉寺高名無比類候」、そして天正16(1588)年「長宗我部地検帳」には、「秦泉寺郷地検帳」として、土地の詳細が記されている。この地検帳には「寺内」の地名があり、現在の小字名にも「カネツキ堂」が遺る。これまでの発掘調査の結果、古代寺院とはまったく異なる規格の建物跡や中世の瓦が同じ区域から検出されており、寺の名称がそれを遡る可能性は、文字瓦等の新資料の発見を待たねばならない。

ここで注目したいのは「秦泉寺」にも用いられ、現在も遺っている「秦(はだ)」の地名である。「秦」はいうまでもなく古代の波来系氏族・秦氏を連想する。史料的な制約から、当地における秦氏の具体的な活動を示すものは現存しない。しかし、土佐に関する記録が古代においては僅かであることを考えると、以下のような秦氏の名が史料に見られる事は注目される。一つは正倉院に伝わる土佐から貢納された調布に書かれた文字で「土左国吾川郡桑原郷戸主日奉部夜恵調」について「天平勝宝七歳十月主当国司史生大初位上田邊史祖父郡司擬少領先位秦勝国方」の名が遺っている。つまり隣接する吾川郡には、郡司級の在地豪族に秦勝のいた事実があり、またこの地には現在も「八田(はた)」の地名が遺っている。遡って『日本書紀』には、天武天皇朱鳥元(686)年八月辛巳に「秦忌寸石勝を遣わして幣を土左大神に奉る」の記事があり、秦泉寺廃寺と同じ土佐郡内にあった高賀茂神社(土佐神社)に中央から秦氏関係者が派遣されていることも興味深いことである。秦氏は広く西日本一帯に分布しており、土佐国にもいくつかの拠点を有していたことを想定してもよいのではなかろうか。なお、秦泉寺廃寺の問題は、今後共さらに発掘資料等の新知見を含めた検討を深めていく必要があり、双方の関連は一旦留保し、考えていくべきであろう。

第5節 これまでの秦泉寺廃寺の調査について

秦泉寺地区においては、明治時代に編集された資料集『菅山集』にも、古瓦の散布が記録されており、寺院跡であることが知られていた。発掘については、昭和15(1940)年に長岡元康・山本淳両氏を中心に地元住民らによる調査が行われ、重弧文字瓦や蓮華文鍍瓦などの発見が報告されている(資料は戦災で焼失)。その後、当該地は水田や畑地として耕作がおこなわれていたが、高知市街地の近郊に位置することから、昭和四十年代頃から宅地開発の波が押し寄せ、度々緊急の発掘調査が実施されることとなった。以下第1次から第5次にわたる従来の調査の概略を記す。

- ・第1次調査 秦泉寺廃寺発掘調査団、1975.10.28～11.1、約100㎡
 - 検出遺構 栗石や瓦片の敷かれた建築物基礎及び単廊状遺構、雨落ち溝等
 - 出土遺物 三重弧文字瓦、須恵器高坏、他須恵器、瓦片等
- ・第2次調査 秦泉寺廃寺発掘調査団、1977.1.25～28、約250㎡
 - 検出遺構 建築物基礎及び廻廊状遺構、雨落ち溝等
 - 出土遺物 三重弧文字瓦、素弁蓮華文鍍瓦、平瓦、須恵器坏、鉢、他須恵器、瓦片等
- ・第3次調査 秦泉寺廃寺跡発掘調査団、1983.3.12～4.21、約840㎡
 - 検出遺構 掘立柱建物跡、溝、櫛列、土坑等
 - 出土遺物 三重弧文字瓦、鍍瓦(素弁・単弁・複弁(後に忍冬文と判明)蓮華文)、男瓦、女瓦、鬼瓦(後に鴟尾と判明)、須恵器高坏、土師器甕、他土器、瓦片等
 - 遺物や検出遺構の変遷について、白鳳～奈良時代中頃のⅠ～Ⅱ期(寺院の創建～整備期)とⅢ～Ⅴ期(寺院の衰退と別の施設の設置期)に段階を区分。
- ・第4次調査 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、1991.8.6～23、
1992.1.10～3.25、1992.6.23～7.13、1993.4.19～9.30、約80㎡
 - 検出遺構 掘立柱建物跡、溝、櫛列、土坑等
 - 出土遺物 四重弧文字瓦、女瓦、須恵器、土師器、瓦片等

第3次調査で、第1・2次調査時の遺構検出層より下層から、遺構が検出されたことに併せ、さらにこれらの遺構が磁北より10°～18°西偏する主軸をもつのに対し、今時、磁北から東偏4°～9°の真北に近い主軸の建物群が検出されたことにより、これがⅠ～Ⅲ期の古代寺院の存続期の主軸に規制された可能性を指摘。第1次・第2次調査での検出遺構がⅤ期以降の中世寺院のものではないかとの問題提起がなされる。
- ・第5次調査 高知市教育委員会、1998.6.1～8.5、約350㎡
 - 検出遺構 掘立柱建物跡、土坑等
 - 出土遺物 三重弧文字瓦、男瓦、女瓦、須恵器坏(身・蓋)、凹石、須恵器、土師器、瓦片等
- ・第6次調査 高知市教育委員会、2000.9.29～12.28、約1,300㎡(今回調査)



第3図 検出遺構 全体図(S=1/250)

第2章 調査の成果

第1節 基本層序

今回の対象地付近は浦戸湾にそそぐ久万川の支流である金谷川の扇状地であり、亜円礫が多く混じり比較的良好な土層が主体をなしている。遺物包含層は、最上層の水田耕作土及び床土層がおわったすぐ下の層から始まっている箇所が多く、その時点で検出した遺構もいくつか存在している。遺物包含層は灰褐色シルト（砂質シルト・粘質シルトを含む）を主体とし、亜円礫を多く含む。土色は、瓦の多い部分では褐色に傾き、山土の多い部分では黄色に傾いている。

最下層には、洪水礫層と見られる砂礫層若しくは、粘質土の混じった砂礫層が存在しており、場所によっては比較的浅い段階からみられた。なお、後述の地震跡をみると、地割れ部分のみが残存しており、最上部の噴砂部分が古代の遺物包含層によって切られているため、その部分の土層に不連続面が存在することが見て取れる。

第2節 検出遺構と出土遺物

(1) 櫛列

— SA1 —

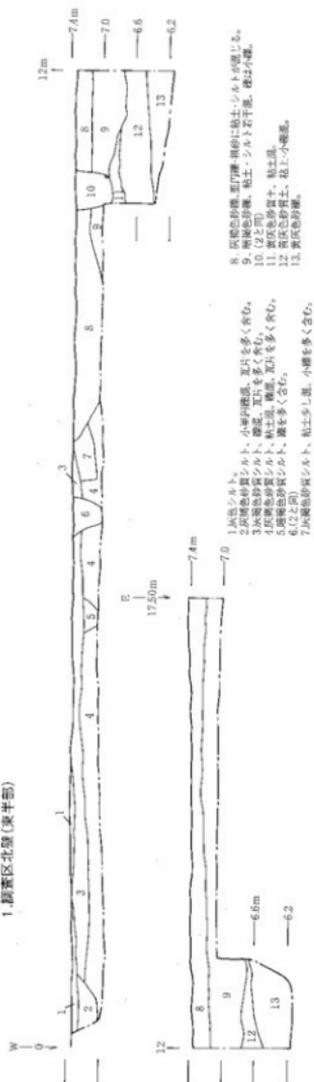
調査対象地の西端付近で検出された櫛列である。検出された柱穴は計8個で、平均の柱間寸法は1.7mを測る。軸線方向の偏角は $N83^{\circ}E$ である。P3のみ軸線から約0.3m南にずれるが、同一の遺構として扱った。約1m南側に検出されたSD1とはほぼ平行に並んでおり、関連のある遺構と考えられる。出土遺物に図化できるものはなかった。

(2) 掘立柱建物跡

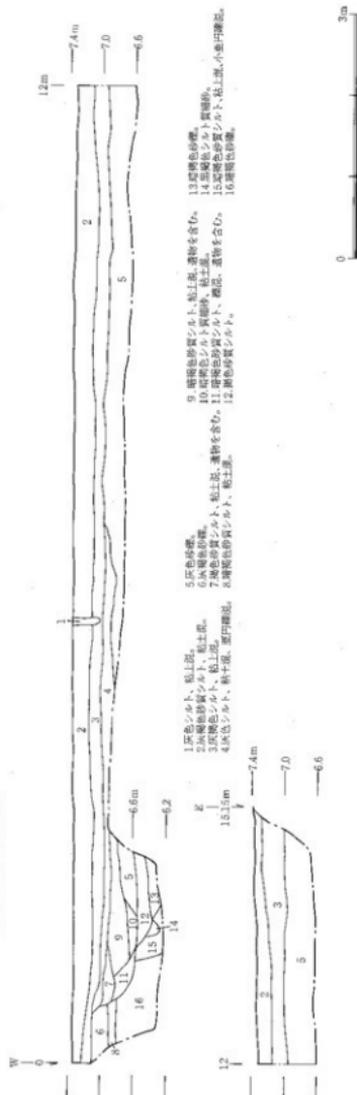
— SB1 —

調査対象地の中央やや西側の北端で検出した梁間2間(3.6m)・桁行1間(2.1m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.8m、桁行2.1mを測る。建物の桁行方向の偏角は $N7^{\circ}W$ である。出土遺物に図化できるものはなかった。

1. 調査区北壁(東半部)



2. 調査区北壁(西半部)



第4図 調査区北壁土層断面図(S=1/60)

— SB2 —

SB1の東側で検出した梁間2間(5.4m)・桁行2間(5.8m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間2.7m、桁行2.9mを測る。建物の桁行方向の偏角はN1°Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

— SB3 —

調査対象地の中央やや西側で検出した梁間2間(5.0m)・桁行2間(5.8m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間2.5m、桁行2.9mを測る。建物の桁行方向の偏角はN1°Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

— SB4 —

調査対象地のほぼ中央で検出した梁間2間(3.1m)・桁行1間(3.4m)の東西棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.55m、桁行1.7mを測る。建物の桁行方向の偏角はN87°Eである。図化できた遺物はP6から出土した底部ヘラ切りの土師器坏(1)のみである。

— SB5 —

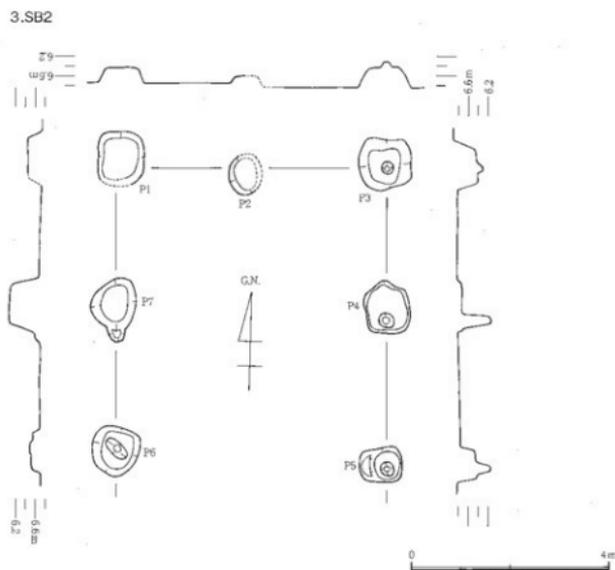
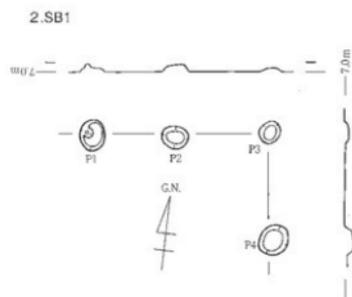
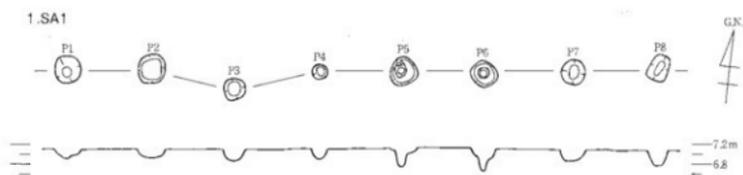
調査対象地の中央やや北よりで検出した梁間2間(2.2m)の建物である。平均の柱間寸法は1.1mを測る。梁間方向と思われる柱穴3箇所のみを検出であったが、ここでは小規模の掘立柱建物として扱う。建物の桁行方向の偏角はN89°Eである。図化できた遺物はP1から出土の須恵器鉄鉢(2)のみである。全体的に横方向にナデて、外面の口縁端部付近に微かな稜があり、口唇は面取りする。

— SB6 —

SB4の東側で検出した梁間2間(3.3m)・桁行3間(4.9m)の東西棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.65m、桁行1.63mを測る。建物の桁行方向の偏角はN73°Eである。図化できた遺物はP4から出土の土師器甕(3)の口縁部のみである。内外面ともナデて仕上げ、端部は軽く面取りしている。

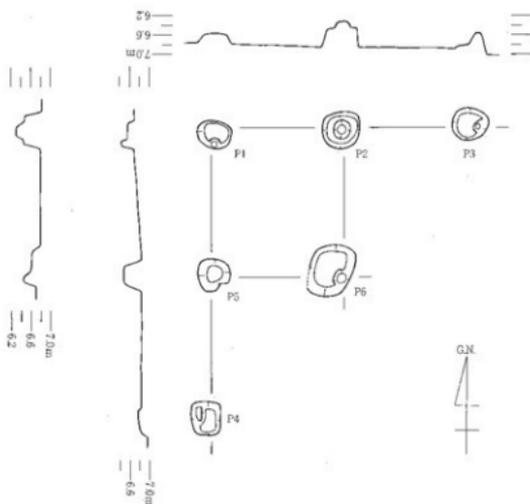
— SB7 —

SB6の南側で検出した梁間2間(3.6m)・桁行2間(3.7m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.8m、桁行1.85mを測る。建物の桁行方向の偏角はN4°Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

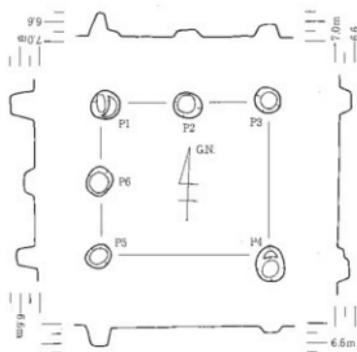


第6图 SA1·SB1·SB2平面图·断面图(S=1/100)

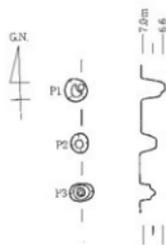
1.SB3



2.SB4

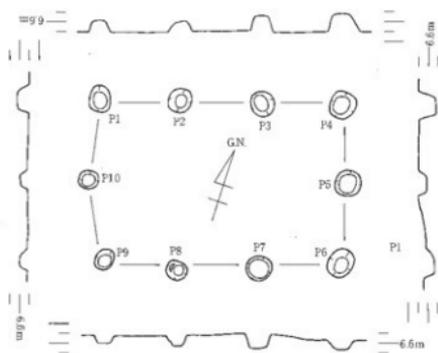


3.SB5

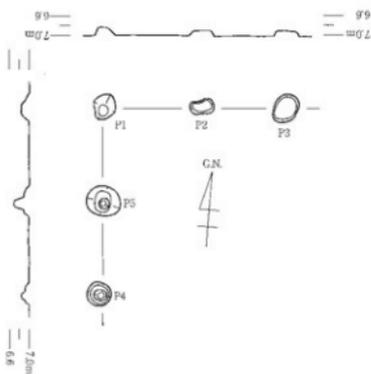


第7图 SB3·SB4·SB5平面图·断面图(S=1/100)

1.SB6

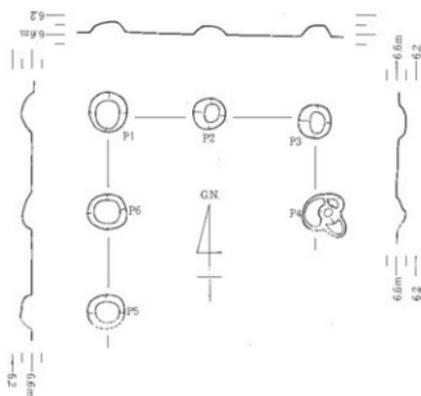


2.SB7

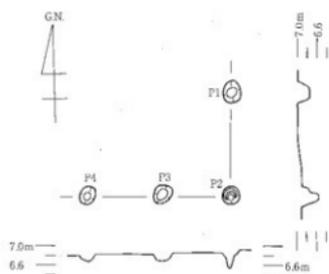


第8图 SB6·SB7平面图·断面图(S=1/100)

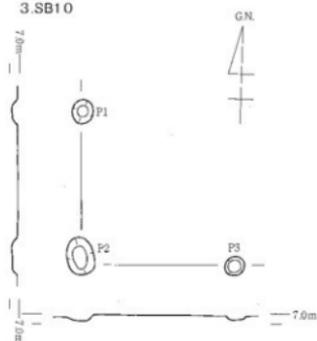
1.SB8



2.SB9



3.SB10



第9図 SB8・SB9・SB10平面図・断面図(S=1/100)

- SB8 -

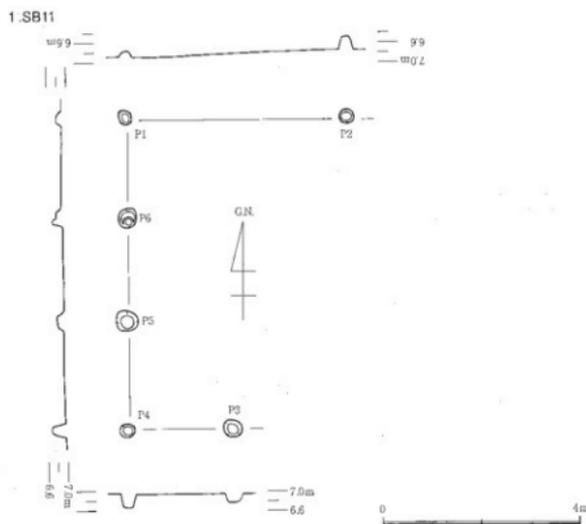
調査対象地の東側中央付近で検出した梁間2間(4.1m)・桁行2間(4.1m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間2.05m、桁行2.05mを測る。建物の桁行方向の偏角は $N0^{\circ}E$ である。出土遺物に図化できるものはなかった。

- SB9 -

SB8の南側で検出した梁間2間(2.9m)・桁行1間(2.1m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.45m、桁行2.1mを測る。建物の桁行方向の偏角は $N2^{\circ}E$ である。出土遺物に図化できるものはなかった。

- SB10 -

調査対象地の東南部で検出した梁間1間(3.0m)・桁行1間(3.1m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間3.0m、桁行3.1mを測る。建物の桁行方向の偏角は $N1^{\circ}W$ である。出土遺物に図化できるものはなかった。



第10図 SB11平面図・断面図(S=1/100)

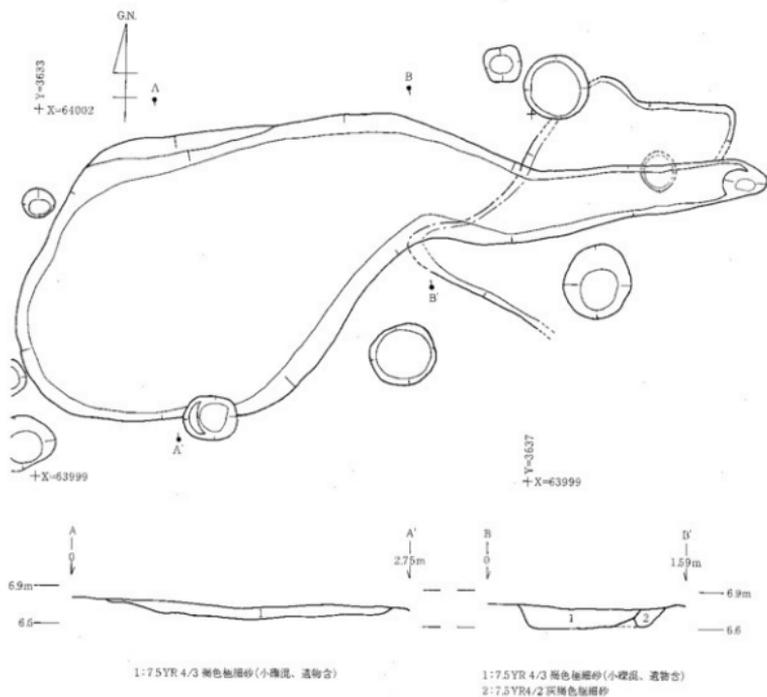
- SB11 -

調査対象地の南端付近で検出した梁間2間(4.4m)・桁行3間(6.3m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間2.2m、桁行2.1mを測る。建物の桁行方向の偏角はN1°Wである。図化できた遺物は、P2から出土の天井部が扁平で口縁端部が下方に屈曲するタイプの須恵器坏蓋(4)のみである。

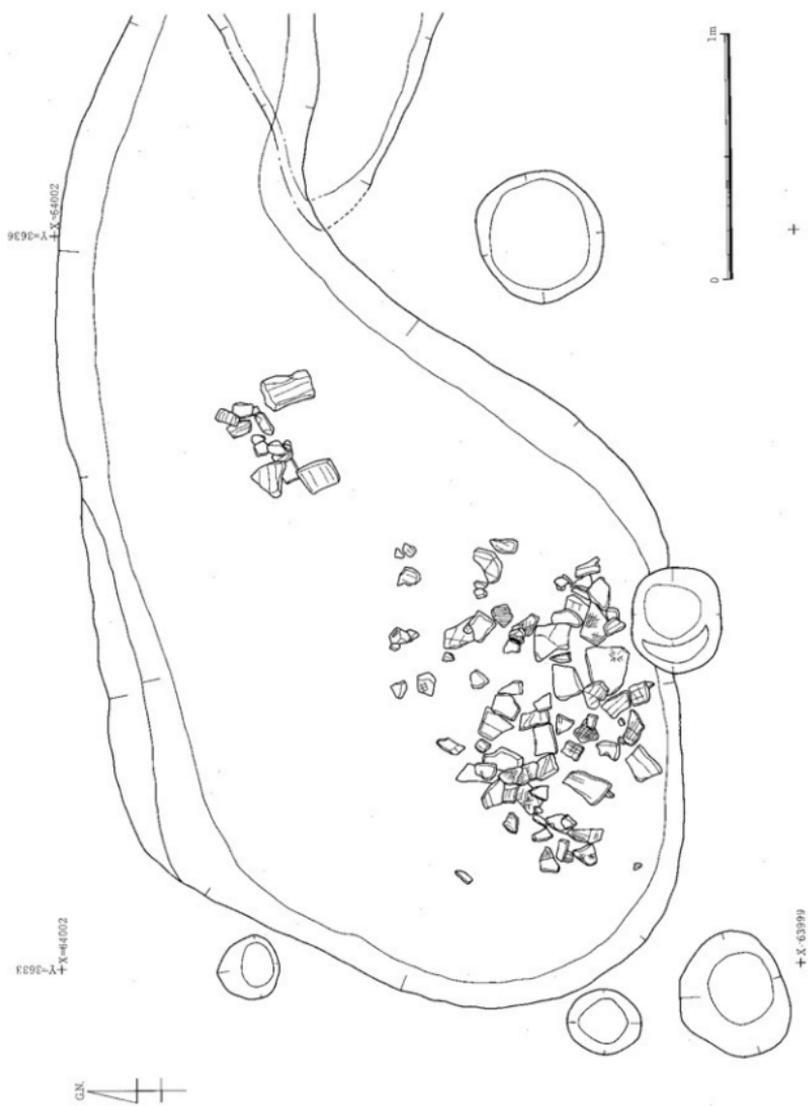
(3)ピット及び土坑

- P1 -

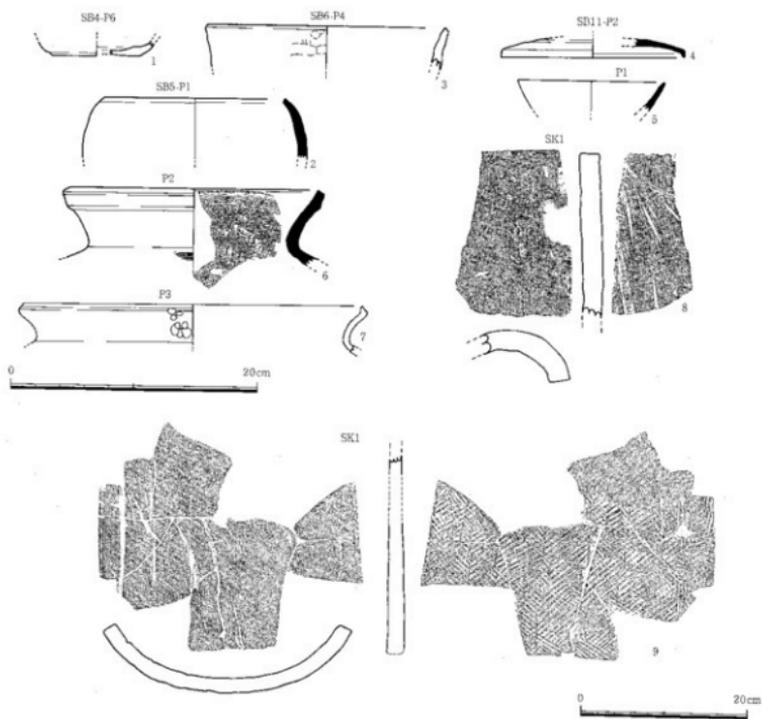
SD3のすぐ西で検出したピットで、やや小振りの須恵器坏(5)が出土した。



第11図 SK1平面図・断面図(S=1/40)



第12図 SK1遺物出土状況図(S=1/20)



第13図 柵列・掘立柱建物跡・ピット・土坑出土遺物実測図及び拓影(S=1/4、瓦1/6)

— P2 —

SK1のすぐ西で検出したピットで、口縁部を肥厚させた須恵器甕(6)が出土した。

— P3 —

P1の南で検出したピットで、口縁端部をつまみ上げた土師質焼成の甕(7)が出土した。

- SK1 -

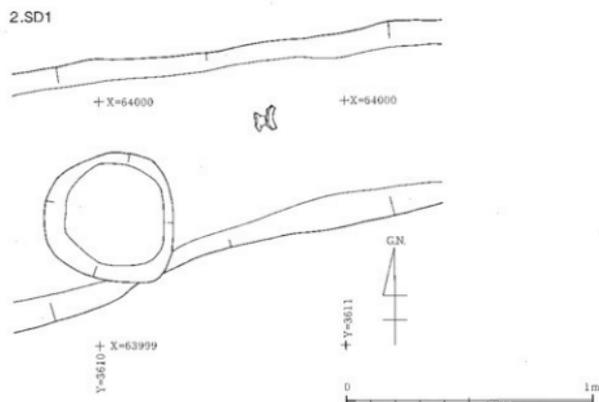
調査対象地の中央付近において、SB6と重なって検出した土坑である。東西に細長く、東側がやや狭い。東西の最大幅6.2m、南北の最大幅2.4mを測る。図化できた遺物は行基葺男瓦(8)と凸面綾杉文タタキの女瓦(9)の2点である。

(4) 溝跡

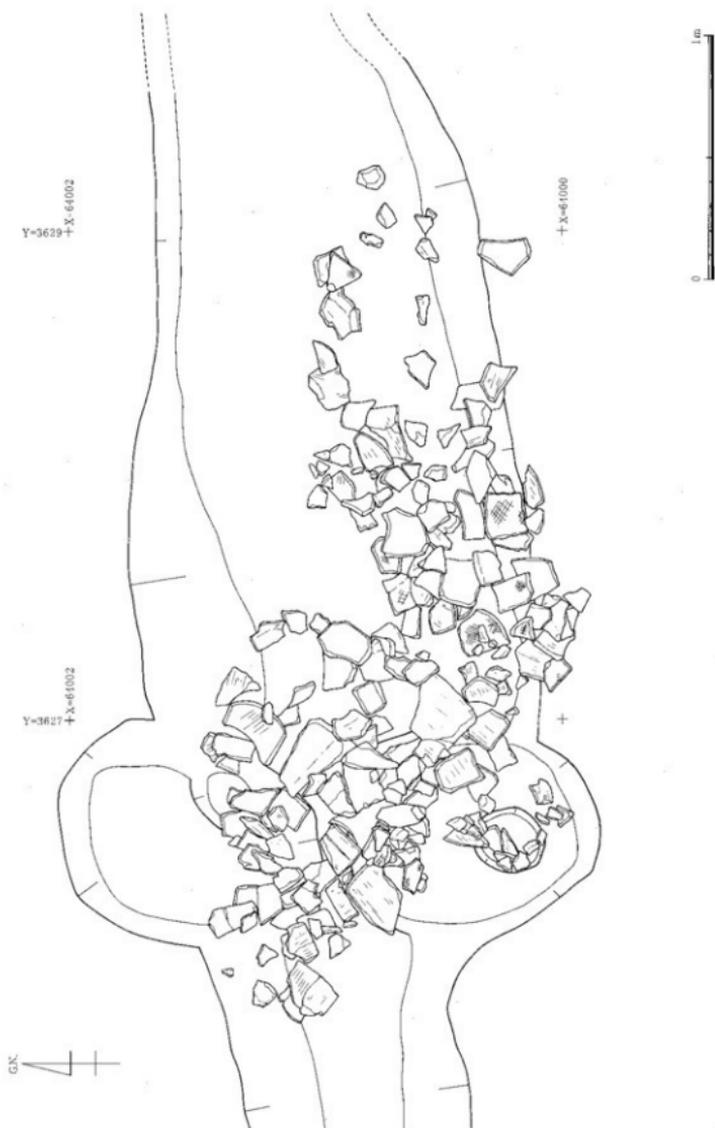
今回の調査では計3条の溝跡を検出した。いずれも直線的で、正方位とのずれが $2^{\circ}\sim 4^{\circ}$ の範囲に収まっており、寺院に関連する区画溝である可能性が高い。

- SD1 -

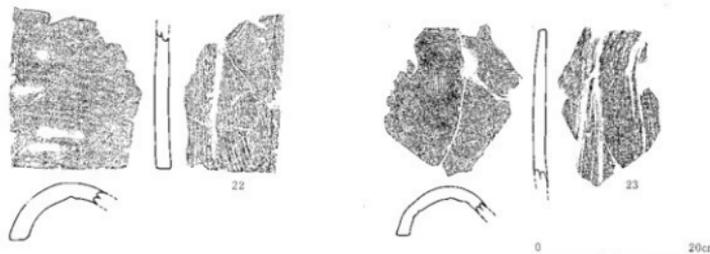
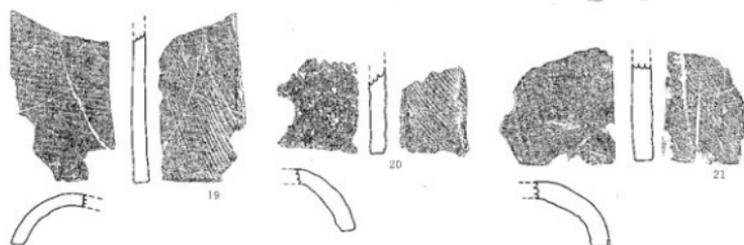
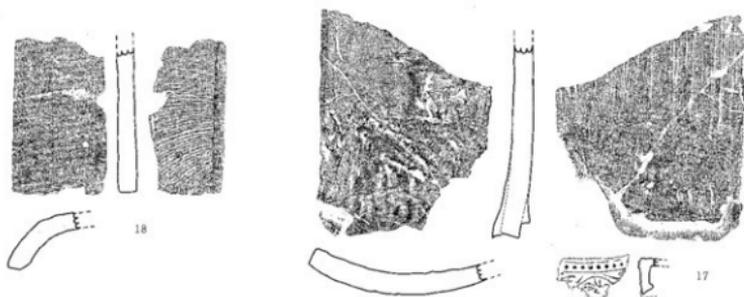
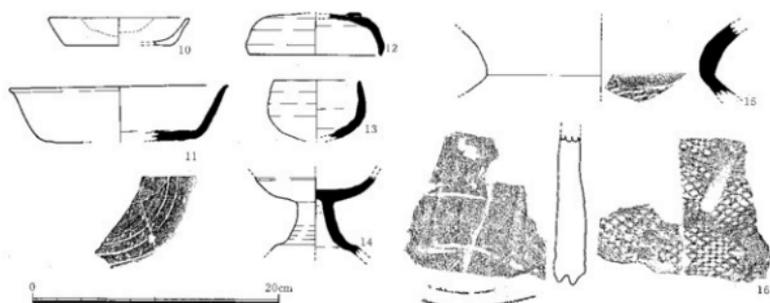
調査対象地の中央部付近から西端にかけて検出した東西方向の溝跡である。中軸線の方向は $N86^{\circ}E$ であり、確認できた長さは22.1mで、西端は対象地外へ続いていた。また、対象地中央からやや東よりの付近に瓦片の集中している部分があり、一括廃棄と考えられる。出土遺物は瓦類が多かったが、土器類も一定量出土した。



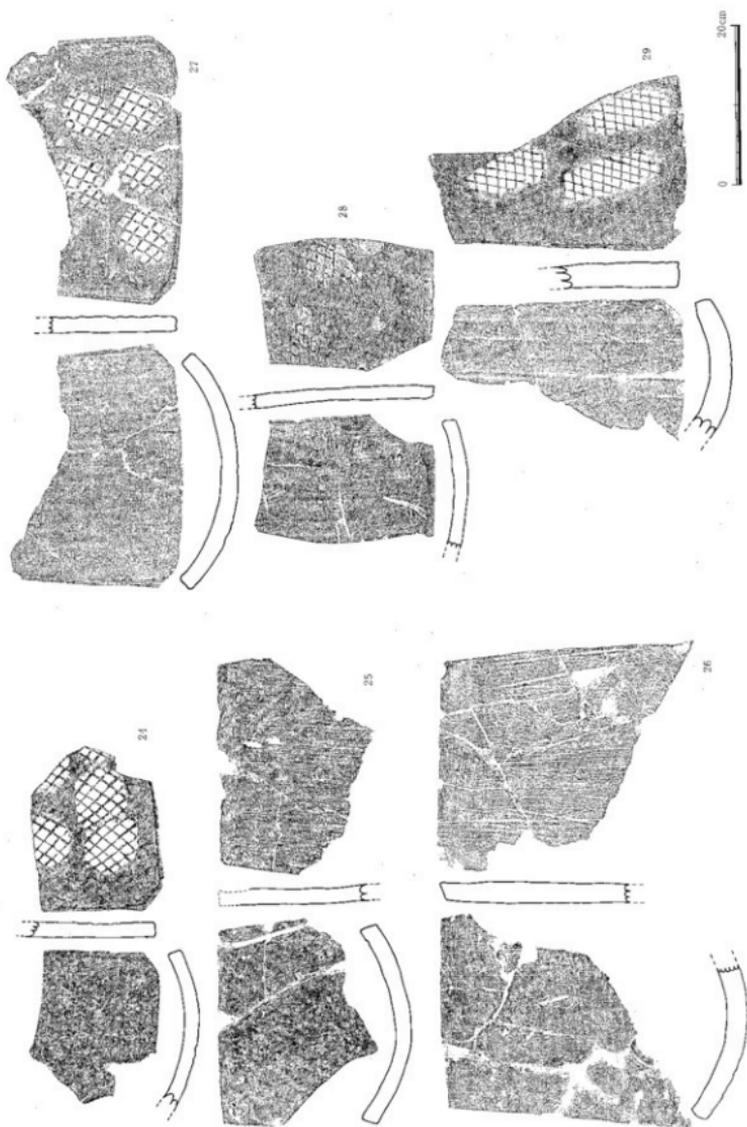
第14図 SD1遺物出土状況図1(S=1/20)



第15図 SD1遺物出土状況図2(S=1/20)



第17図 SD1出土遺物実測図及び拓影1(S=1/4、瓦1/6)



第18図 SD1出土遺物実測図及び拓影2 (S=1/6)

10, 11は坏身である。土師質焼成の10は口縁端部を丸く仕上げ、須恵質焼成の11は口縁端部を外側へつまみ出し、底部はヘラ切りである。10は内外面に煤が付着し、灯明皿に使用された可能性がある。12の坏蓋は身と蓋が逆転する直前の時期のもので口径は小型化し、端部は丸く仕上げる。13は小型鉢で側壁は内傾し、端部は丸く仕上げる。14の高坏は出土状況を図示した個体である。15は内面同心円タタキの甕である。

16, 17は宇瓦である。頸は曲線頸、16は凸面斜格子タタキで瓦当部は二重弧文である。17は瓦当部と女瓦部を分けて図示した。瓦当部の文様は讃岐地方の善通寺等において出土しているものと同形式のものであり、224の鍍瓦とセット関係になる可能性が高い。また、女瓦部と合わせてみれば、女瓦焼成の後包み込み技法によって宇瓦を制作した痕跡があり、讃岐地方の影響が看取される。

18～23は男瓦である。18は凹面の糸切り痕が横方向であり、他は左傾した縦方向である。その他、凸面は縄目タタキのちなデ、凹面には布目が残る、23は布の合わせ目が顕著にみられる。

24～29は女瓦である。前面の両側を斜めにカットした台形で、25, 26は凸面縄目タタキ、他は格子目タタキを施すが、24と27, 28, 29の3グループに分かれる。凹面には布目が残る。

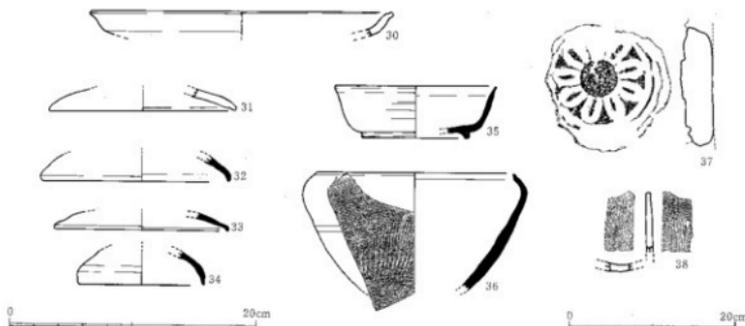
- SD2 -

調査対象地の東端中央付近から南端付近にかけて検出した南北方向の溝跡である。中軸線の方角はN2°Wであり、確認できた長さは20.9mである。出土遺物は他の溝跡に比べると少量であった。

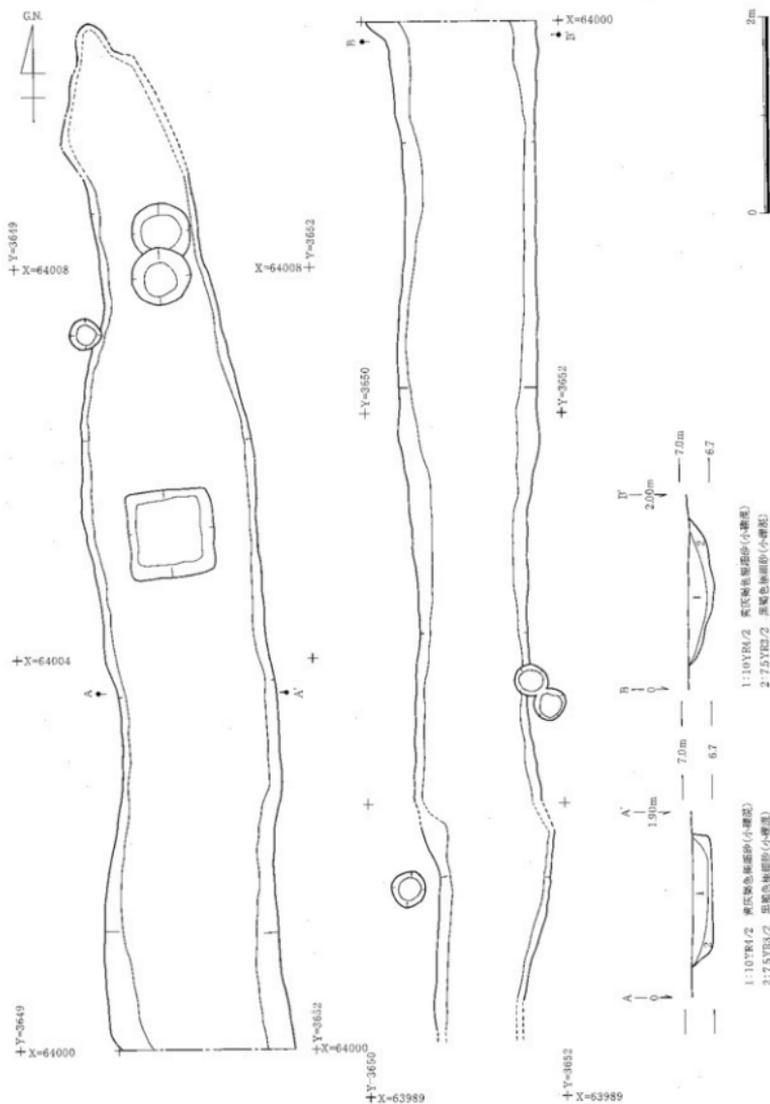
30, 31は土師器である。30の皿は軽く外反する口縁端部内面に凹線が巡る。

32～36は須恵器である。坏蓋の32, 33は蓋と身の逆転する直前のもので、34は口縁端部が下方に屈曲するタイプである。35は坏身で輪高台を貼付し、口縁が僅かに外反する。36の鉄鉢は口縁が大きく内傾し、端部を上方に軽くつまむ。胴部外面は縦方向のタタキの後、横方向にちなデを施す。

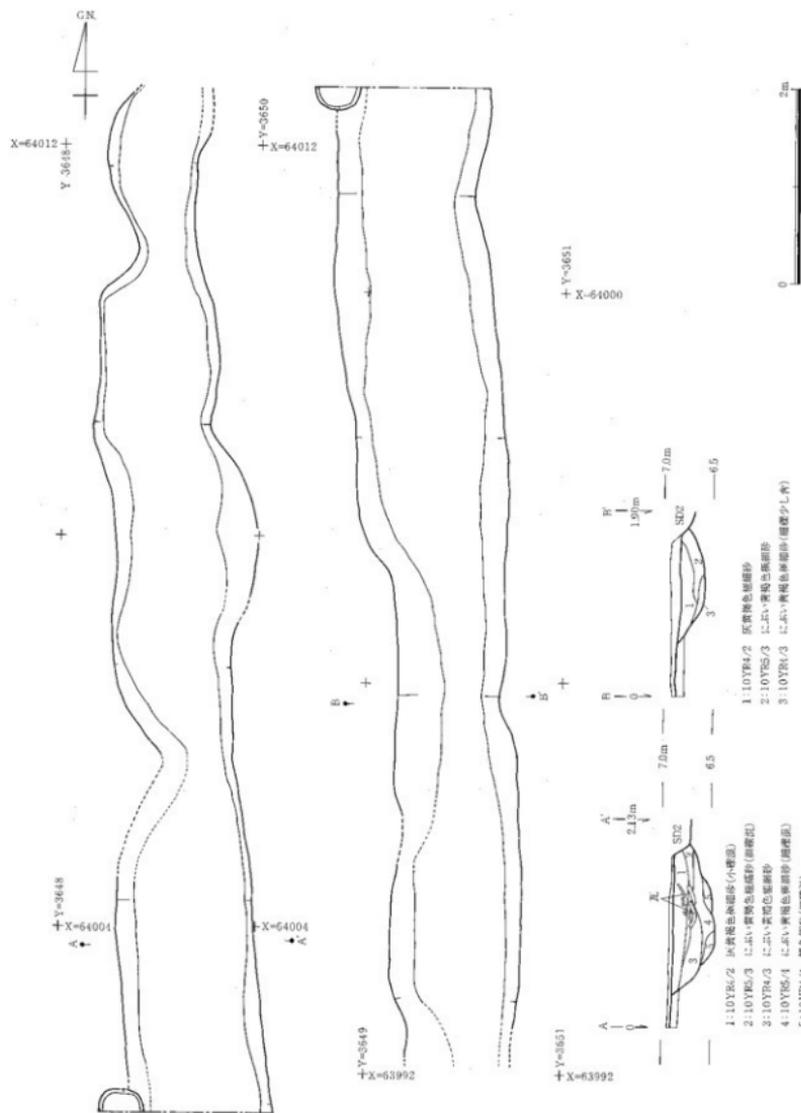
37, 38は瓦である。37の鍍瓦は創建期のものに比べてかなり退化した素弁八葉ないしは九葉のものである。また38は道具瓦小片で、縦・横のハケが残る。



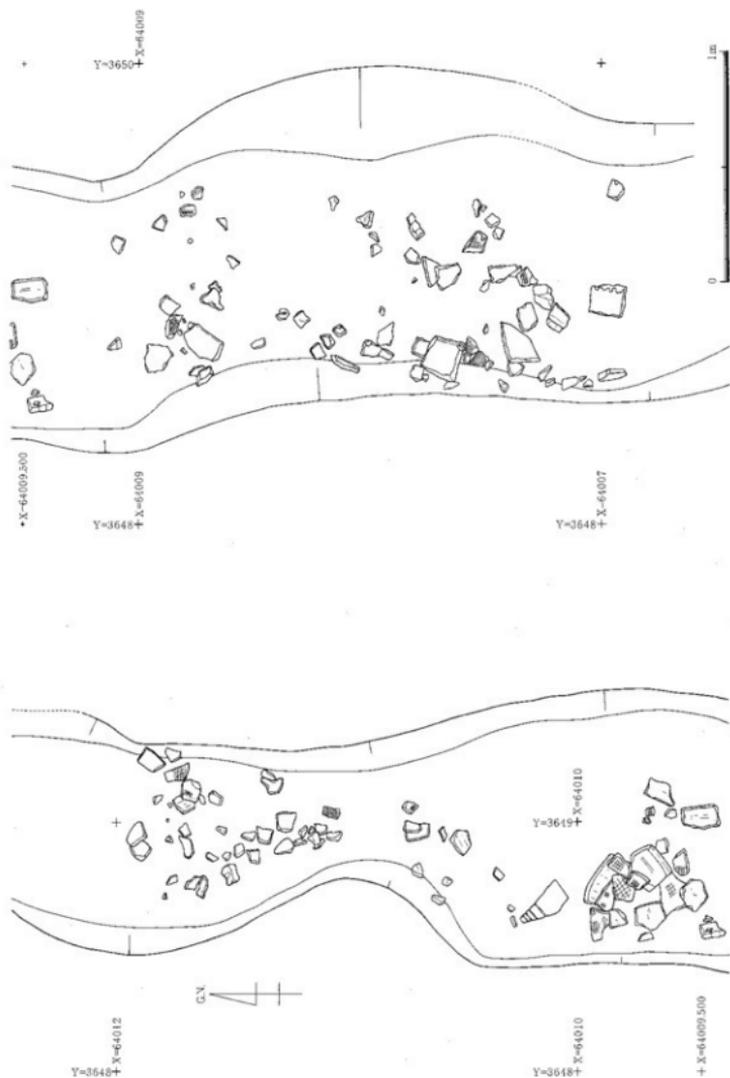
第19図 SD2出土遺物実測図及び拓影(S=1/4、瓦1/6)



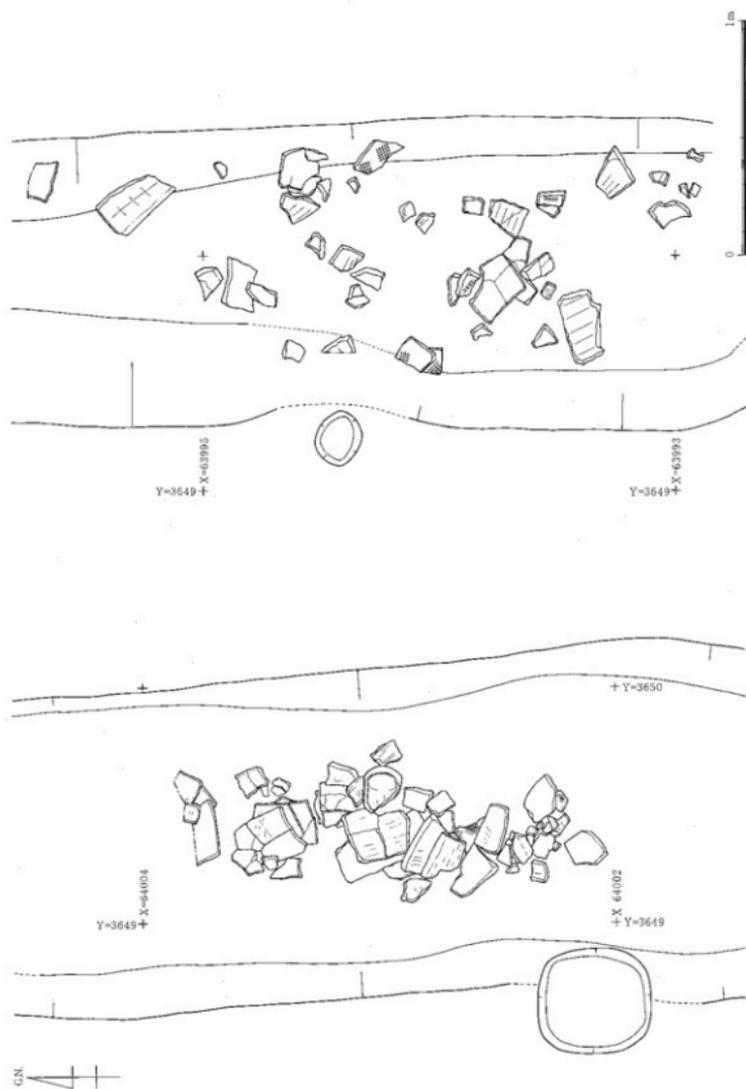
第20图 SD2平面图·断面图(S=1/50)



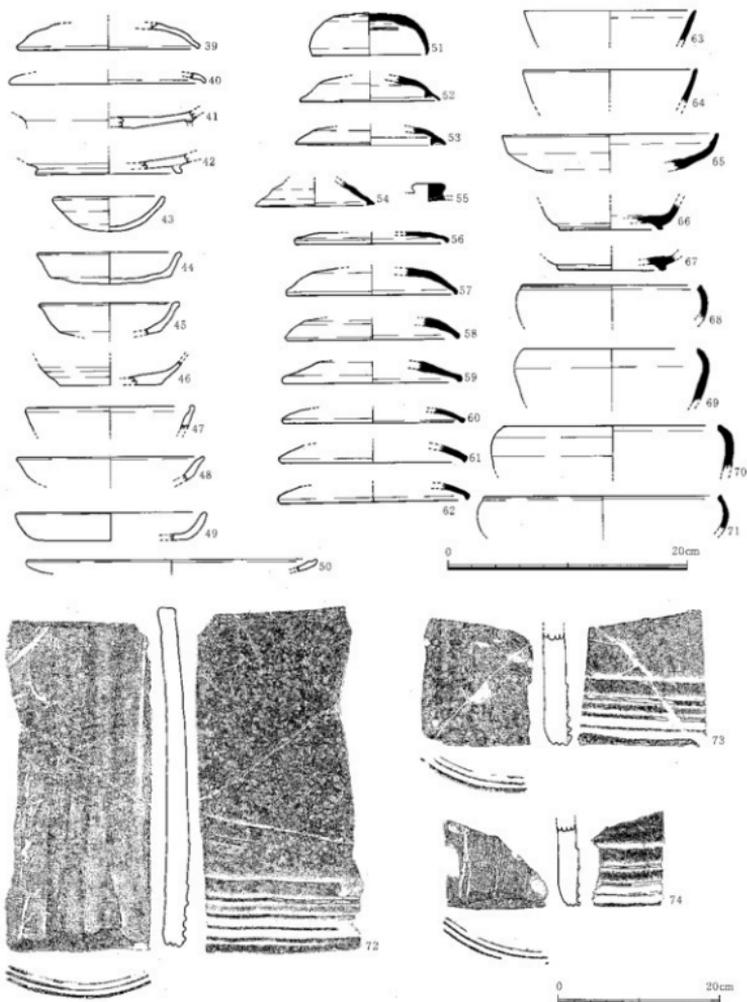
第21図 SD3平面図・断面図(S=1/50)



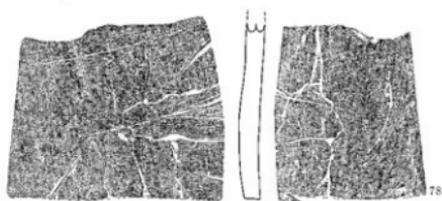
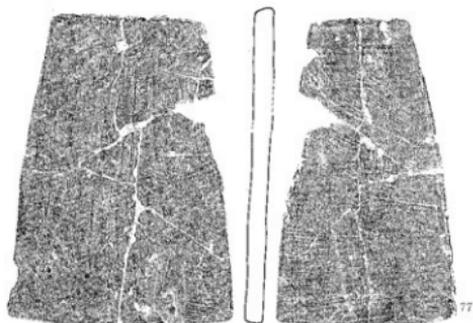
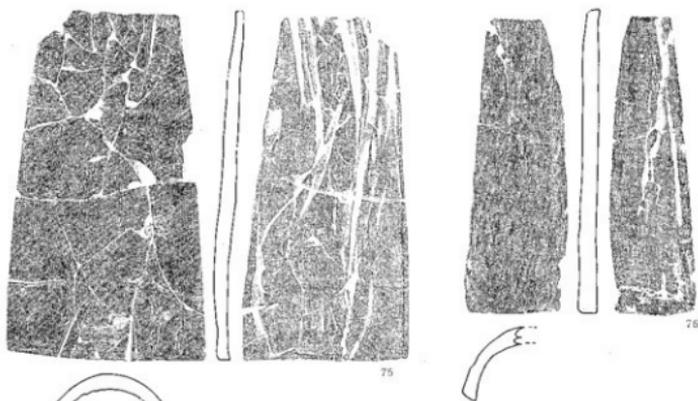
第22図 SD3遺物出土状況図1・北半部(S=1/20)



第23図 SD3遺物出土状況図2・南半部(S=1/20)

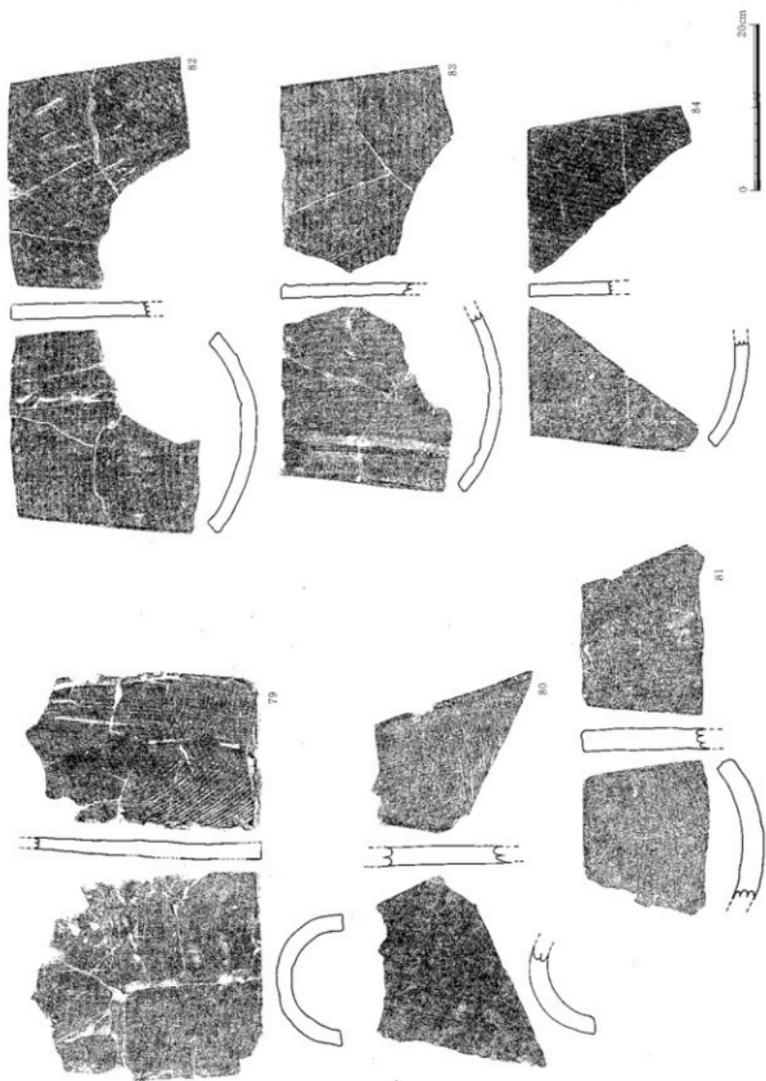


第24図 SD3出土遺物実測図及び拓影1 (S=1/4、瓦1/6)

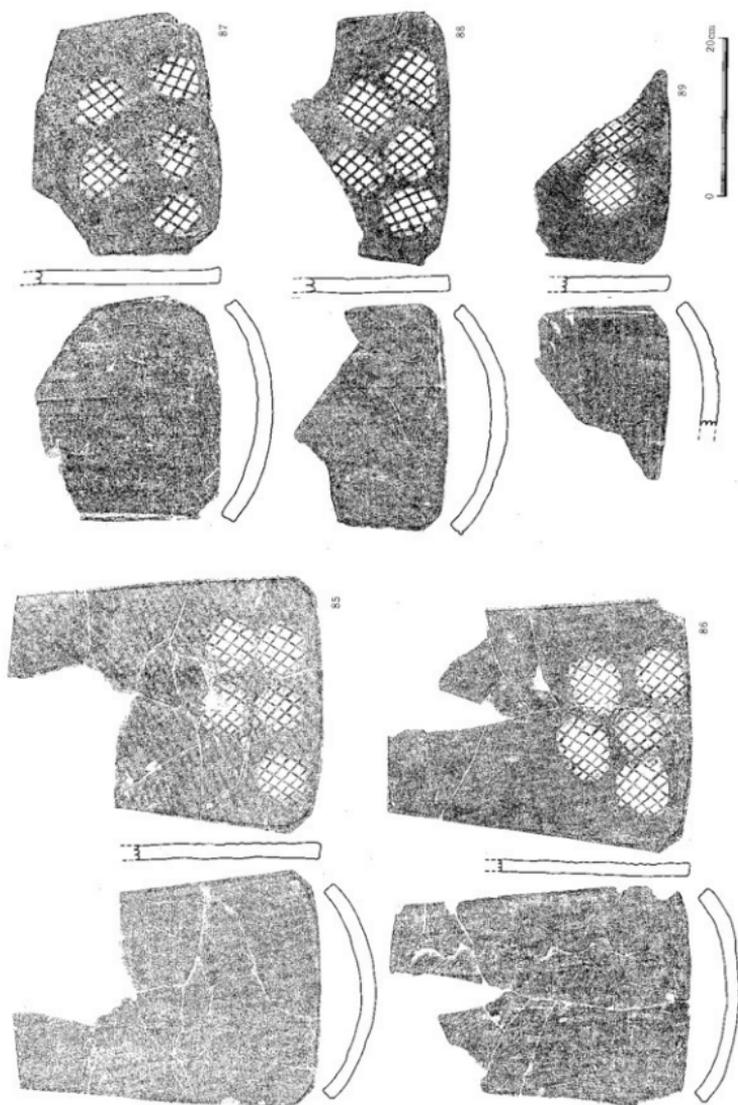


0 20cm

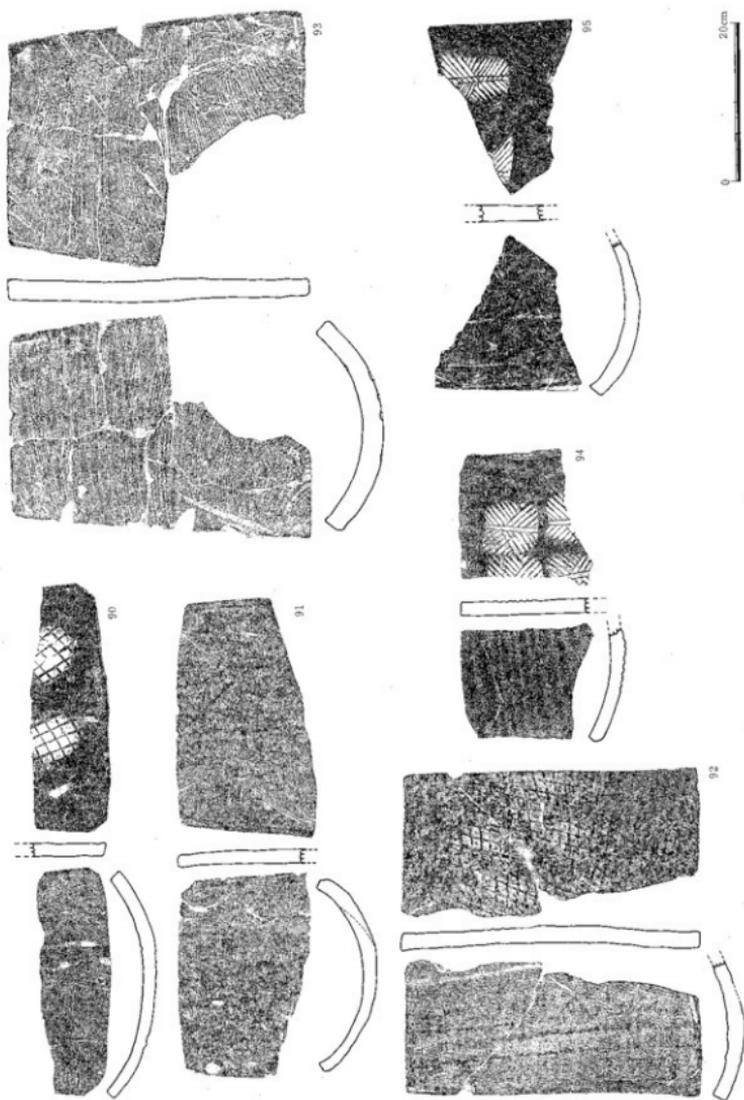
第25図 SD3出土遺物実測図及び拓影2 (S=1/6)



第26図 SD3出土遺物実測図及び拓影3(S=1/6)



第27図 SD3出土遺物実測図及び拓影4(S=1/6)



第28図 SD3出土遺物実測図及び拓影5 (S=1/6)

SD2のすぐ西側で検出した南北方向の溝跡である。中軸線の方向はN3°Wであり、確認できた長さは19.9mである。SD2とほぼ並行しており、溝の東側の肩は大部分がSD2によって切られている。また、北端はSR1によって切られており、更に北方へ続いていた可能性がある。溝底には全体的に瓦片が散布していた。

39～50は土師器である。蓋の39、40は口縁端部を下方に屈曲させ、丁寧にナデで仕上げる。40は口縁付近でやや外反する。41、42、44～47は坏である。41、42は輪高台を貼付し、41は須恵器の可能性もある。42は内面に赤色塗彩の痕跡がみえる。43の鉢は内面に赤色塗彩の痕跡がある。44、45の坏は底部から直線的に立ち上がり、口縁はやや外反、端部は丸くおさめる。44の内面及び45の内外面には煤の付着がみられる。46は平高台でロクロ痕が比較的明瞭に残る。47は口縁部内面に凹線が巡り、外面には赤色塗彩がみられる。48～50は皿である。48、50は口縁端部内面に凹線、49は丸く仕上げる。

51～71は須恵器である。51～62の坏蓋のうち、51は蓋と身が逆転する以前のもので天井部外面はヘラ、口縁端部は丸くおさめる。52～54が内面にかえりを持つタイプで、55はツمامミ、56～62が口縁端部を下方に屈曲させるタイプである。63、64の坏身は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。65の皿はやや傾いた底部から緩やかに立ち上がる。66、67は輪高台を貼付したものである。68～71は鉄鉢である。68、71は口縁端部外面に凹線が巡り口唇は面取り、69、70は端部を丸くおさめる。

73～74は三重弧文字瓦で、凸面は段顎及び3条の突帯を削り出し後ナデ、凹面は布目が残る。

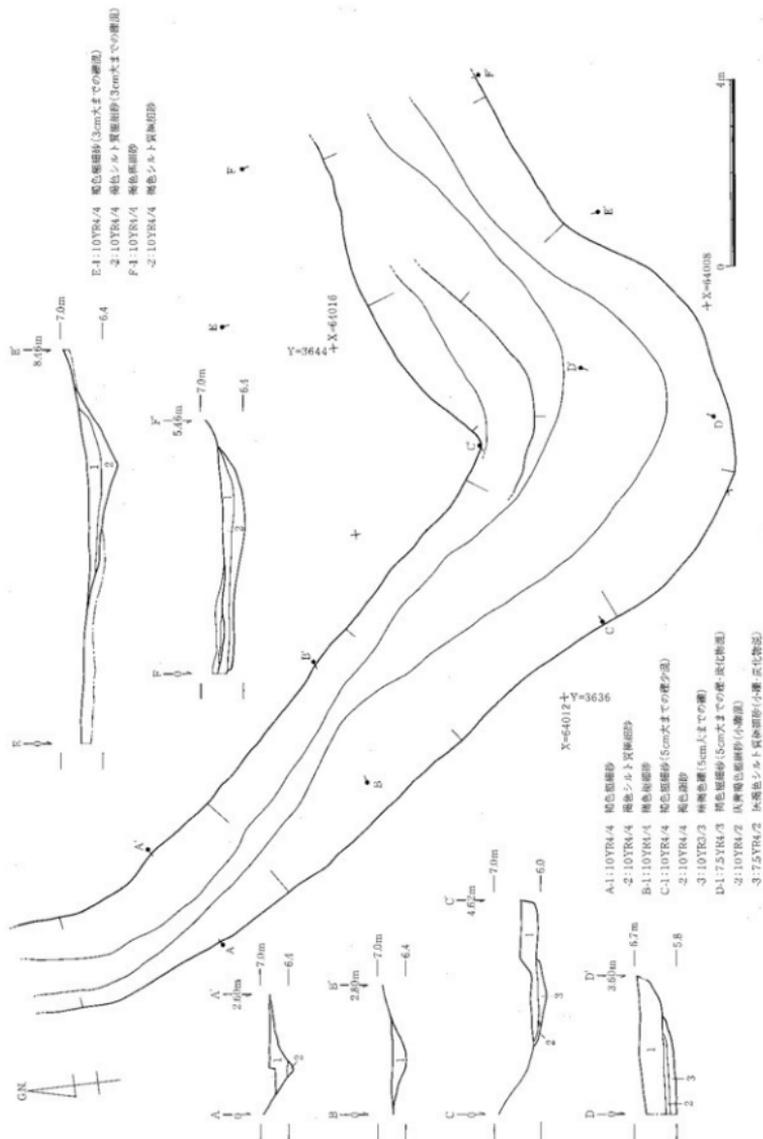
75～80は男瓦で、いずれも内面には布目痕があり、77は左上がり・79は横方向の後左上がりの糸切り痕を持つ。外面は概ね縄目タタキ後ナデを施すが、76、80のようにタタキ痕跡の残らないものもある。残存長の短いものもあるが、概ね行基葺きであろう。

81～95は女瓦である。凹面は概ね布目が残り、81、93は糸切り痕が残る。また凸面は85～89は間隔を開けて最前列に3単位、次に2単位の格子目タタキを施し、90は最前列2単位である。92の凸面は斜格子タタキ、後ナデ、81は縄目タタキ、94、95は綾杉文タタキがみられる。93は両面とも横方向のカキ目を全体に施している。概ね桶巻き作りと考えられるが、格子目タタキのものには曲率の小さいものが存在し一枚作りの可能性も否定できない。

(5) 自然流路

- SR1 -

調査対象地の北東部で検出した流路跡である。北方から対象地内に流入し、対象地内ではほぼ90°向きを変えて東方に流下し、対象地外へ抜ける。遺物の量は少なく、図化できた遺物はない。



第29図 SR1平面図・断面図(S=1/100)

(6)地震跡

時期は明らかでないが、試掘調査時の試掘坑壁面において、地震の噴砂跡を検出した。古代の包含層で上部が切られているため、それ以前のものであろうと考えられる。本書ではその土層断面図は省いたが写真図版にその部分の写真を掲載した。

第3節 包含層出土遺物

(1)瓦集中部

対象地全般にわたって、床土下部の遺物包含層には瓦片が比較的多く含まれていた。そのうちでも、遺構検出面まで掘り下げる途中で何箇所か、比較的浅い地点において瓦片の特に集中している箇所がみられた。但し、寺院廃絶時にまとめて埋められたものとは断定できず、後世農地として利用されるようになって後、耕作時に出土した瓦類をまとめて埋納したものとも考えられる。

—瓦集中部1—

調査対象地の中央部北端付近において検出した集中部である。細片が多く図化できたのは96の素弁八葉鍔瓦のみである。創建期のものと同形式のもので、同范とおもわれる瓦が遺構外出土のものに2点みられる。

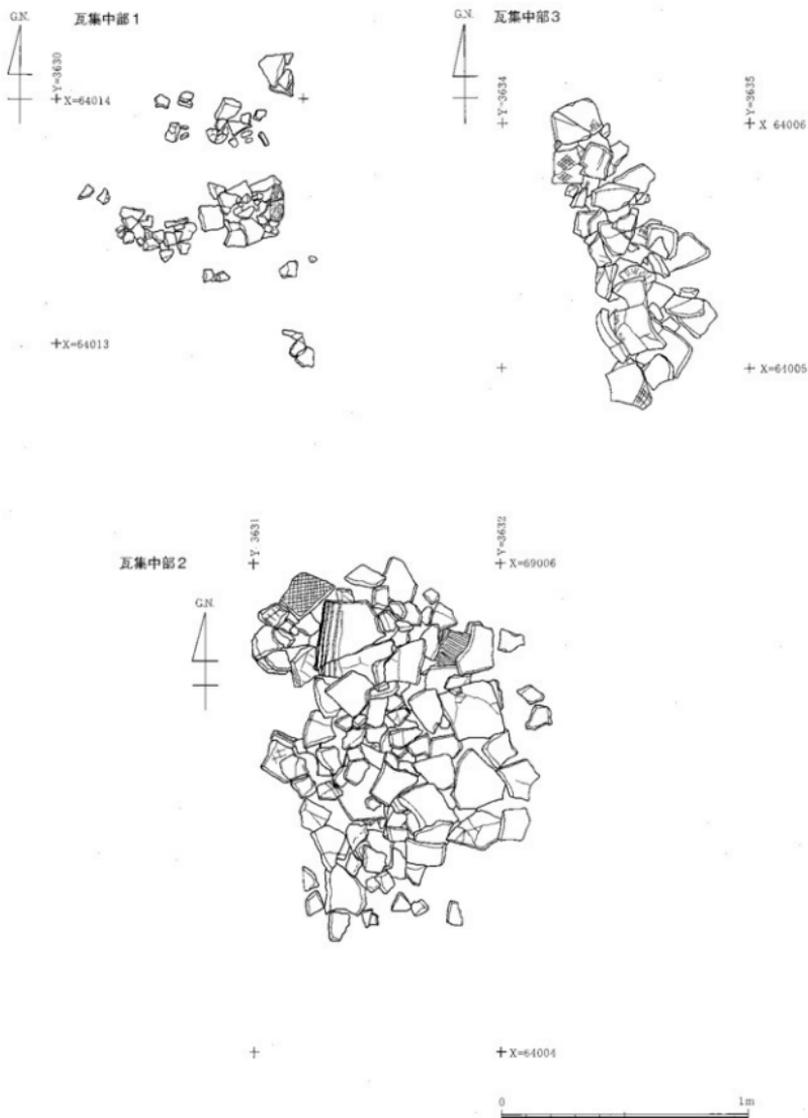
—瓦集中部2—

調査対象地の中央付近において検出した集中部である。図化した出土遺物は97～100の三重弧文字瓦4点である。98は曲線顎で凸面に斜格子タタキを施し、瓦当を肥厚させるタイプであるが、他の3点は段顎で凸面に3条の突帯を削り出すタイプである。

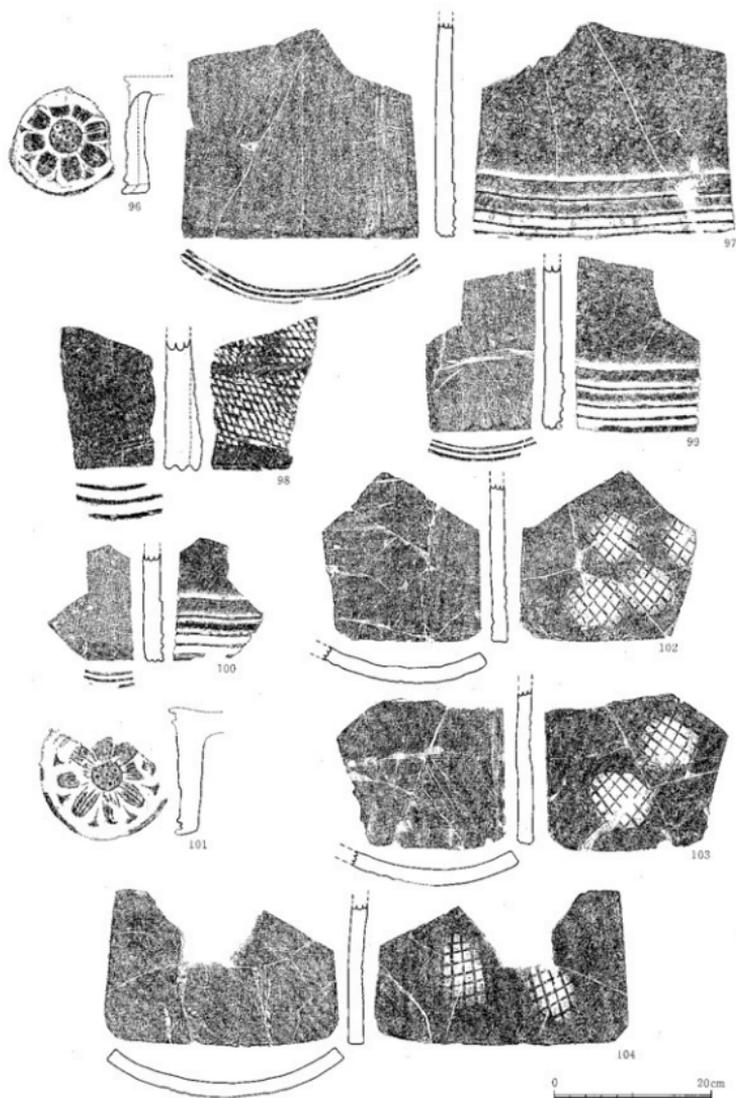
—瓦集中部3—

集中部2の3m程度東において検出した集中部である。第1・2次調査報告書において紹介されていた講堂跡に残る礎石の直下にあたる。礎石上には小祠が祀られており、出土した瓦をまとめて埋め、礎石として使用されていた石を上において祀ったものとも考えられる。

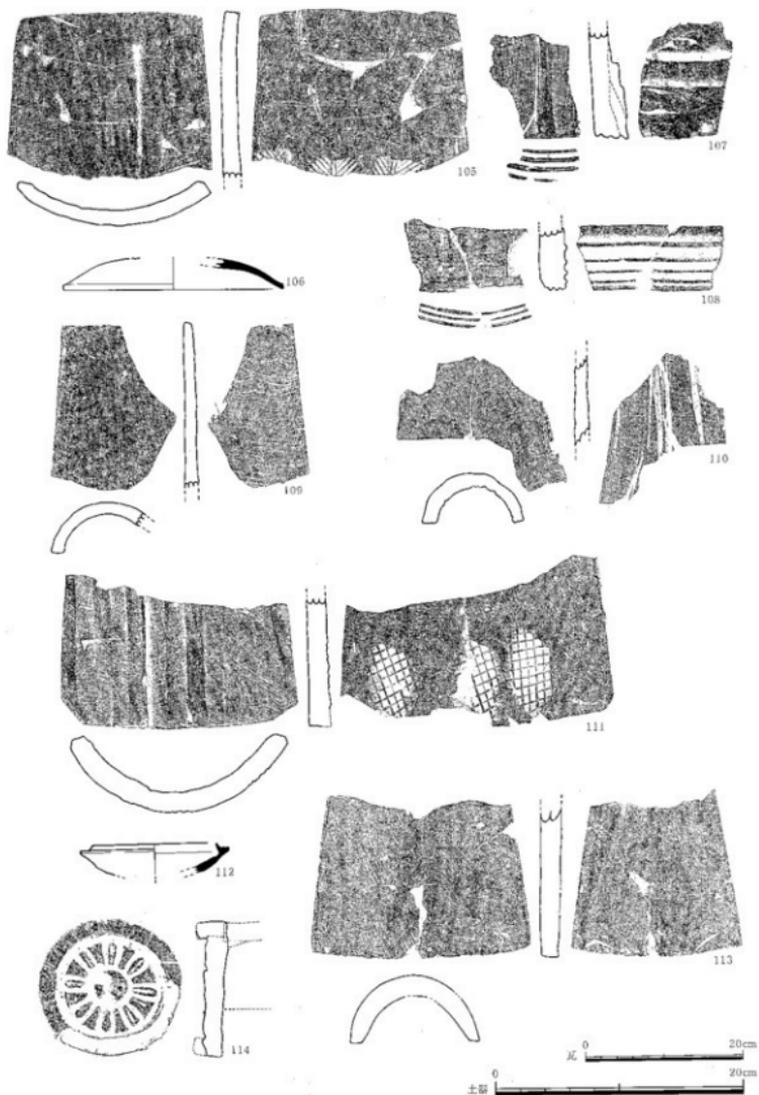
図化した出土遺物は101～105の鍔瓦及び女瓦である。101は96の退化形式である素弁八葉のもので、37との中間形式に位置づけられよう。他の4点は女瓦で102～104は凸面に間隔を開けて格子目タタキを施したものの、105は同様に綾杉文タタキを施したものである。



第30图 瓦集中部1·2·3遺物出土状況図(S=1/20)



第31図 瓦集中部出土遺物実測図及び拓影1 (S=1/6)



第32図 瓦集中部出土遺物実測図及び拓影2及び状況図遺物実測図及び拓影(S=1/4、瓦1/6)

一瓦集中部4一

SR1の屈曲部付近の南岸において検出した集中部である。図化した出土遺物は106～109である。106は須恵器蓋で、口縁に向かって僅かに内彎しながら開き、端部は垂直に面取りする。

107、108は重弧文字瓦であるが、107は四重弧文であり、凸面に突帯を持たず二重の段額を持つ。また、108は三重弧で、段額は一重であるものの凸面の突帯が4条と他より1条多い等、両方とも今回の他の出土字瓦とはやや異質である。109は男瓦で凹面に布目痕、凸面にナデ痕跡が残る。

一瓦集中部5一

集中部4のすぐ南において検出した集中部である。細片が多く、図化した遺物はない。

一瓦集中部6一

SK1のすぐ東側において検出した小規模な集中部である。図化した出土遺物は110の男瓦のみで、凹面に布の合わせ目、凸面に縄目タタキの痕跡が残る。

一瓦集中部7一

対象地の南東端で検出した集中部である。他の集中部とはやや違い、同じ高さで南北一列に並んで検出され、何らかの意図を持って並べた可能性も考えられるが、周囲や下層には特徴的な点は特にみられなかった。図化した出土遺物は111の女瓦のみである。凹面には布目や糸切り痕、凸面には間隔を開けた格子目タタキが残る。

(2) その他出土状況を図示した遺物

一状況図1一

瓦集中部6の東側で出土した112の須恵器と113の瓦である。112は坏身で、立ち上がりは折り返み、端部を鋭く仕上げる。113は男瓦で凹面は布目、凸面は縄目のちハケで仕上げる。

一状況図2一

大石の横に鍍瓦瓦当が挟まった状態で出土した。114の鍍瓦は文様の退化がかなり進んだ素弁八葉である。

瓦集中部4

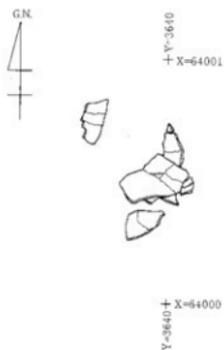


瓦集中部5



第33図 瓦集中部4・5遺物出土状況図(S=1/20)

瓦集中部6



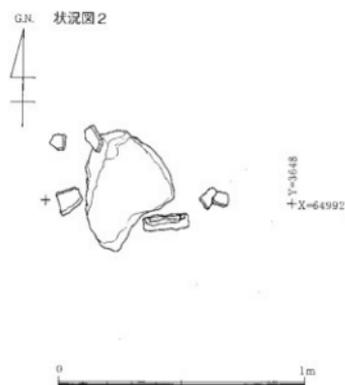
状況図1



瓦集中部7



状況図2



第34図 瓦集中部6・7遺物出土状況及びその他遺物出土状況図1・2 (S=1/20)

(3) その他の遺物 (SD2・3より西側で出土)

—須恵器—

115～131は蓋である。そのうち、115～124が蓋と身の逆転する直前の段階で、天井部と口縁部の境界には稜や凹線のみられるものはなく、口縁端部は丸く仕上げる。120、121は天井部内面に強い回転ナデの痕跡がみられ、外面はヘラ切り未調整である。125～128が内面にかえりのつくタイプで天井部の残存しているものはみられなかった。129～131が口縁端部が下方に屈曲するタイプで、129は土師質焼成、130は他に比べて扁平である。

132～154は坏身である。そのうち、132～144が蓋と身の逆転する直前の段階で、立ち上がりは小さく口縁端部は概ね丸く仕上げるが、139、142のみ鋭く仕上げる。145は高台を持たず、底部はヘラ切り未調整である。146～152が輪高台のつくタイプで、151は他より高台が内側にある。また、152は土師質焼成で、径が他に比べて大きく壺等の底部である可能性がある。153、154は側腹部分である。

155は小皿または托で口縁端部外面に稜をもち、小振りである。

156は小型の壺と思われ、外面にヘラ描き文を施す。

157～166は鉄鉢である。157、163、166は土師質焼成である。また、157は口縁端部上面に凹線を巡らす。その他の口縁は端部を丸く仕上げるものが多いが、164、165は面取りして仕上げる。

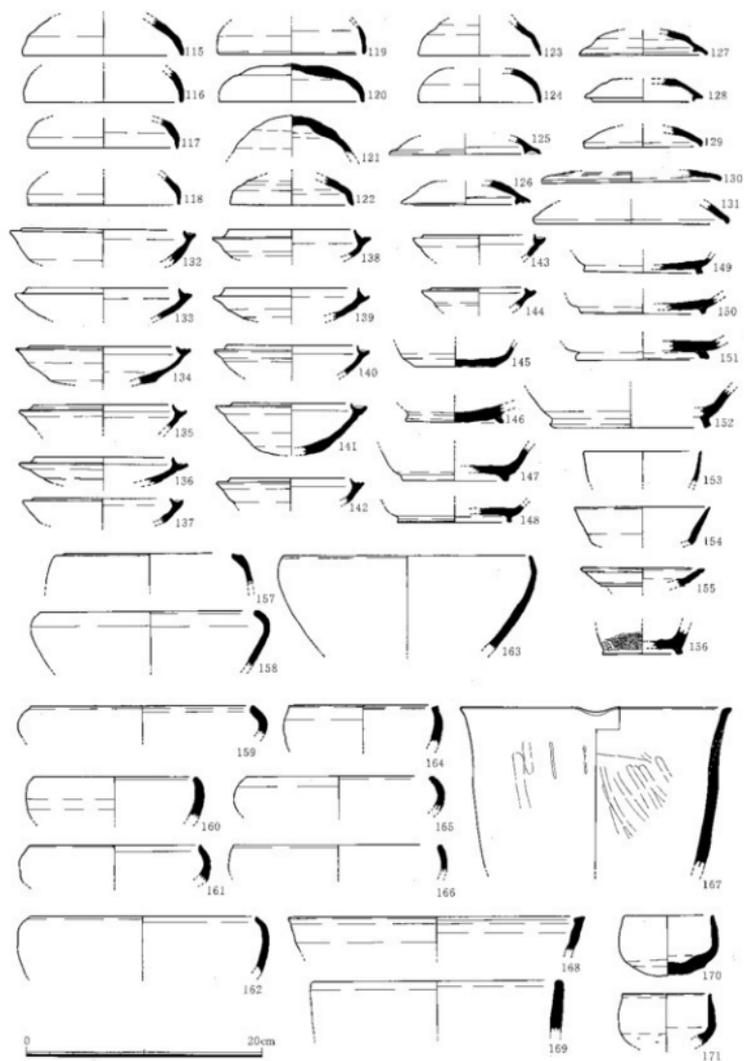
167～169は大型の鉢で、167は口縁端部を面取りして外方につまみ出し、口縁部を一箇所引き出して片口を形成する。器壁は横ナデで仕上げ、外面にヘラ描き文を施す。168はやや外傾した口縁で口唇は斜めに面取り、端部を内側につまむ。169は口縁部の傾きが垂直に近く口唇を軽く面取りして水平に仕上げる。

170、171は小型の鉢で、ほぼ垂直に立ち上がり口縁端部は丸く仕上げる。内外面とも回転ナデで仕上げるが、170の底部外面にはヘラ削り痕が残る。

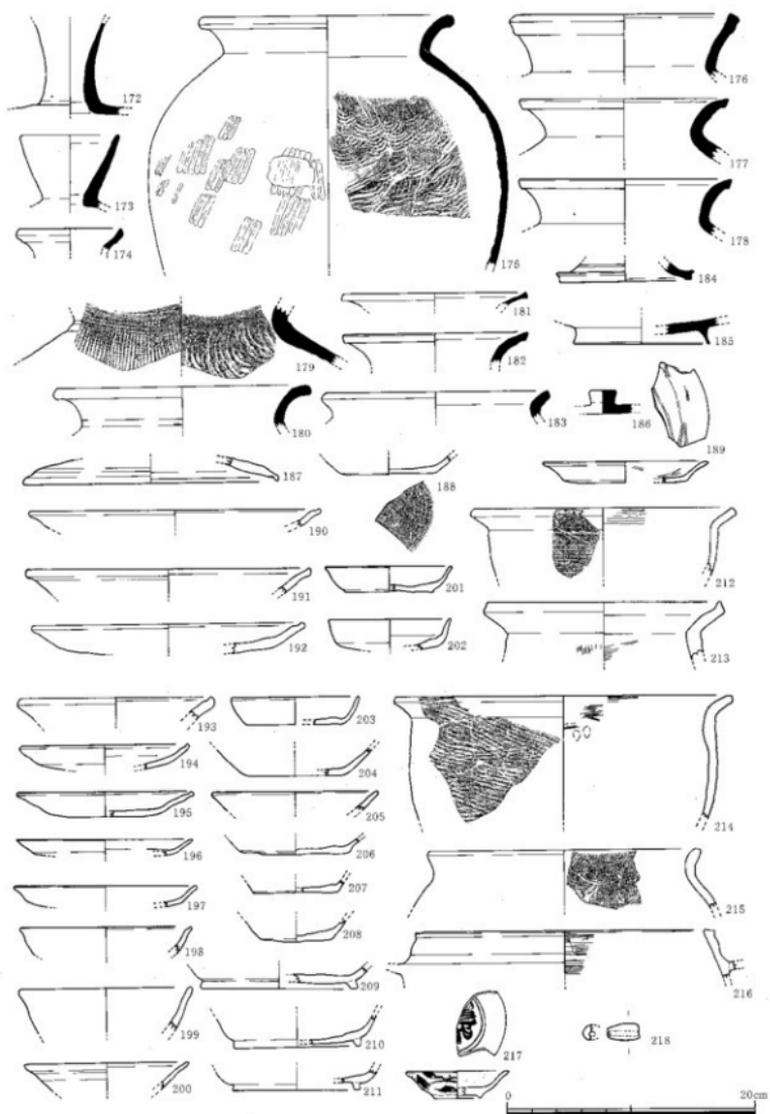
172は長頸壺の頸部、173は平瓶の口頸部、174は端部を肥厚させた壺の口縁部である。

175～183は甕である。175は土師質焼成で摩耗が激しく外面の採拓は不可能であったが、外面平行タタキ、内面同心円タタキ、口縁端部は丸くおさめる。179は外面格子目タタキ、内面同心円タタキである。176は口縁端部を肥厚させ、180は丸く、183は軽く面取り、176～178、181、182は面取りして仕上げる。

184は高坏の脚部で、端部に凹線を施す。185は甕の底部で細くて高い輪高台を持つ。186は土師質焼成で、蓋のツمامミ部分である。



第35図 包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影1(S=1/4)



第36図 包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影2(S=1/4)

—土師器—

187は蓋である。口縁部内面に凹線が巡る。

188～197は皿である。188は底部にヘラ切り痕が残る。189は器壁が薄く、底部から明瞭に境界を持って立ち上がり、口縁にかけて外反、端部は丸くまとめる。また、内面には暗文が残る。190～192は大型の皿で、口縁で若干外反し、端部内面に凹線が巡る。193～197は中型の皿で、口縁で若干外反若しくは直線的に開く。193～195は端部内面に凹線が巡り、196、197は端部を丸く仕上げ上げる。

198～211は坏である。198は口縁端部内面に凹線が巡り、199は口縁部で若干外反し端部は丸く仕上げ上げる。200、205は口縁端部内面に弱い凹線が巡る。201、207は底部にヘラ切り痕がある。203は全面に煤が付着しており、貼付高台の剥落した痕跡が見える。209～211は輪高台を貼付する。

212、213は鍋で、212は口縁部内面と胴部外面に横ハケ、口縁端部は面取りする。213は胴部外面に縦ハケ、内面に横ハケ口縁端部を上方向につまみだす。

214、215は甕で、214は口縁部内面横ハケ、外面は胴部から口縁にかけて横方向タタキ、口縁端部は面取りする。215は頸部ですぼまり、ナデ仕上げ、口縁端部は丸く仕上げ上げる。

216は通常のものに比べて鈔や器壁が薄い、羽釜に分類した。須恵器に近い焼成で非常に堅緻である。

217の青花皿は中世後期の貿易陶磁で、混入とみられる。218は小型の環状土錘である。

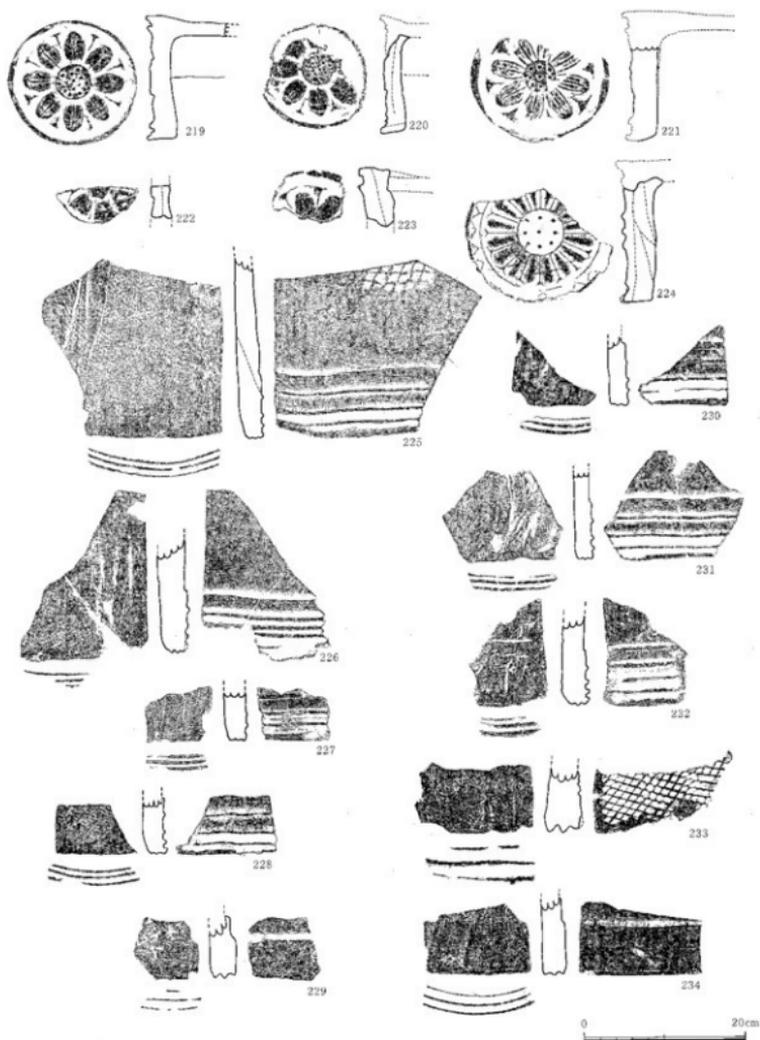
—瓦類—

219～224は鉦瓦である。219、220は96と同範、221～223はその退化形式と思われる。224は複弁八葉から変化したとみられるもので、讃岐地方の善通寺等において出土したものと同範であり、17の字瓦とセットで范型が持ち込まれた可能性が高い。

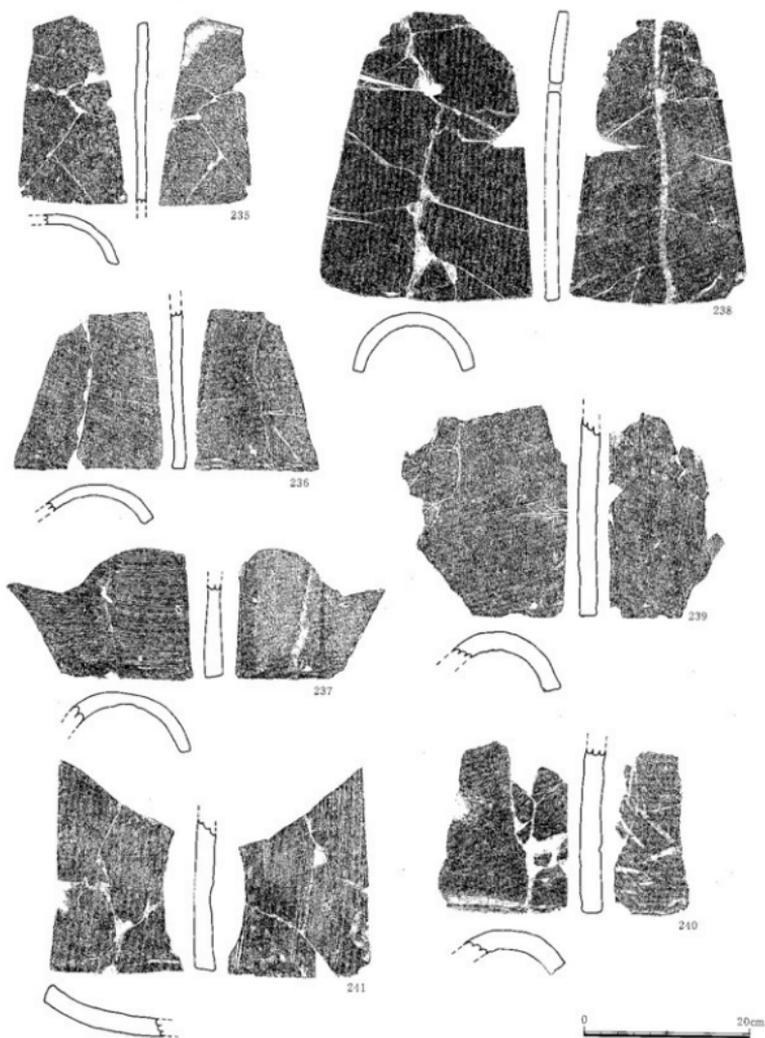
225～234は字瓦である。全て三重弧文であるが、225～228、230～232は凸面に突帯を削りだし、段縁を持つタイプ、233は凸面に斜格子タタキを施すタイプである。229、234は二重の段縁を持ち突帯のないタイプで、107の四重弧文タイプと製作技法においては近いとおもわれる。

235～240は男瓦である。全て凹面には布目が残る。235、236は他の男瓦に比べて薄い作りで特に235は約1.1cmと非常に薄く、用途の違いによる可能性もある。237は凸面全体に横ハケを施す。238は後端から約8cmの箇所を釘孔を穿孔する。239の凹面には斜め方向(右上がり)の糸切り痕が残り、凸面には縄目タタキ痕が残る。240の凸面は先端部を指頭により凹線状に押さえ、凹面には斜め方向(左上がり)の糸切り痕が残る。

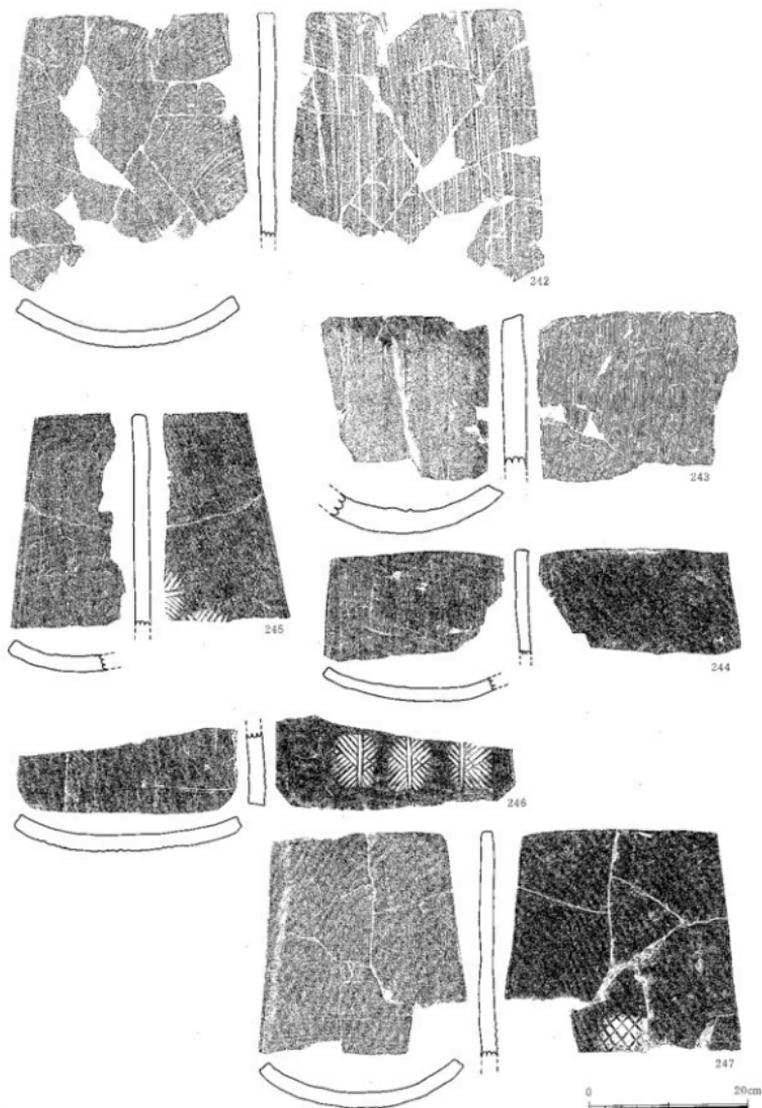
241～251は女瓦である。全て凹面には布目が残る。241、242の凸面は縄目タタキ、242の凹面には糸切り痕が残る。243の凸面は縦ハケが残る。245、246の凸面前方には綾杉文タタキ、247～251には格子目タタキが残る。



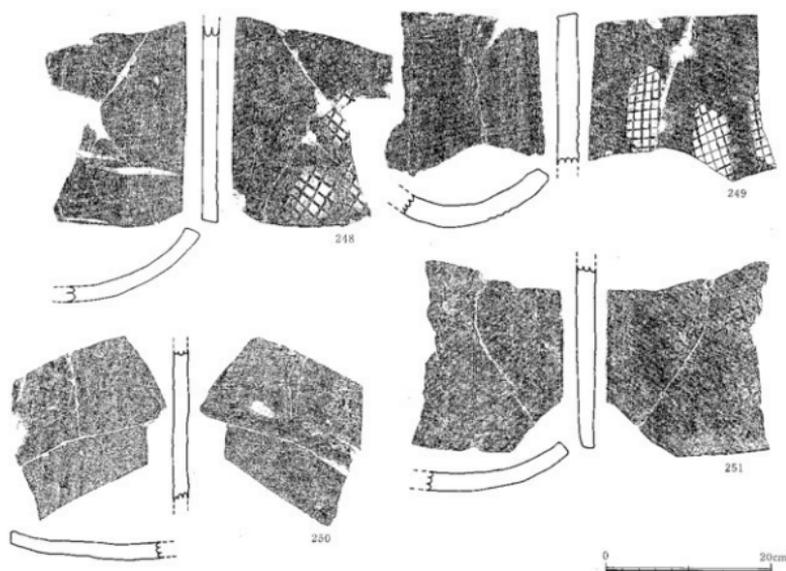
第37図 包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及びび拓影3(S=1/6)



第38図 包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影4(S=1/6)



第39図 包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影5(S=1/6)



第40図 包含層出土遺物(SD2・3西)実測図及び拓影6(S=1/6)

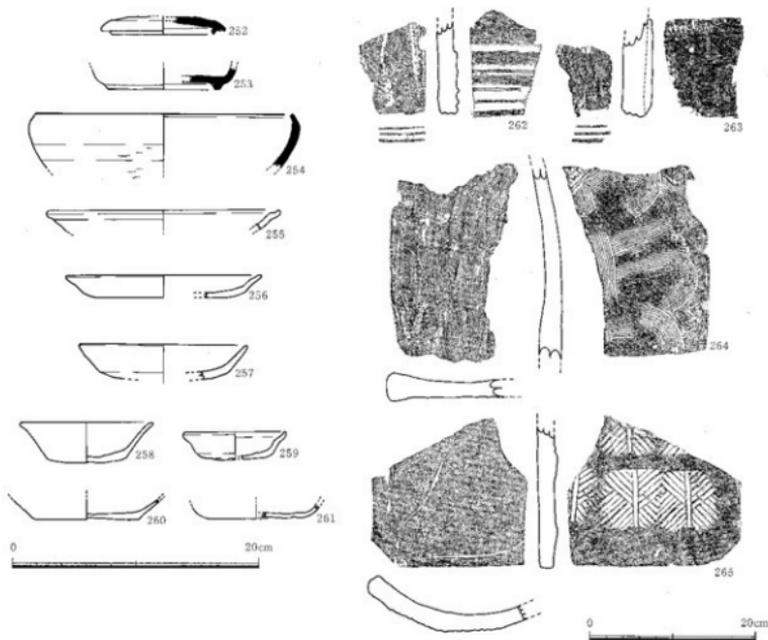
(4) その他の遺物(SD2・3より東側で出土)

SD2・3から東側では、西側比べて相対的に新しい遺物の割合が多かったため、別に図示した。

252～254は須恵器で、252は内面にかえりのついた蓋で外面に自然釉がかかる。253は坏身で断面逆台形の高台を持ち、254は鉄鉢で口縁は丸く仕上げる。

255～261は土師器で、255、256は口縁端部内面に凹線が巡る。257、260は煤が付着する。259は口縁端部を上方につまみ上げる。

262～265は瓦類である。262、263は三重弧文字瓦で、262は凸面に突帯を持ち段頭のタイプ、263は段頭で突帯のないタイプである。264は鴟尾の鰭の部分であり、拂描きにより施文している。265は綾杉文女瓦である。



第41図 包舎層出土遺物(SD2・3東)実測図及び拓影(S=1/4、瓦1/6)

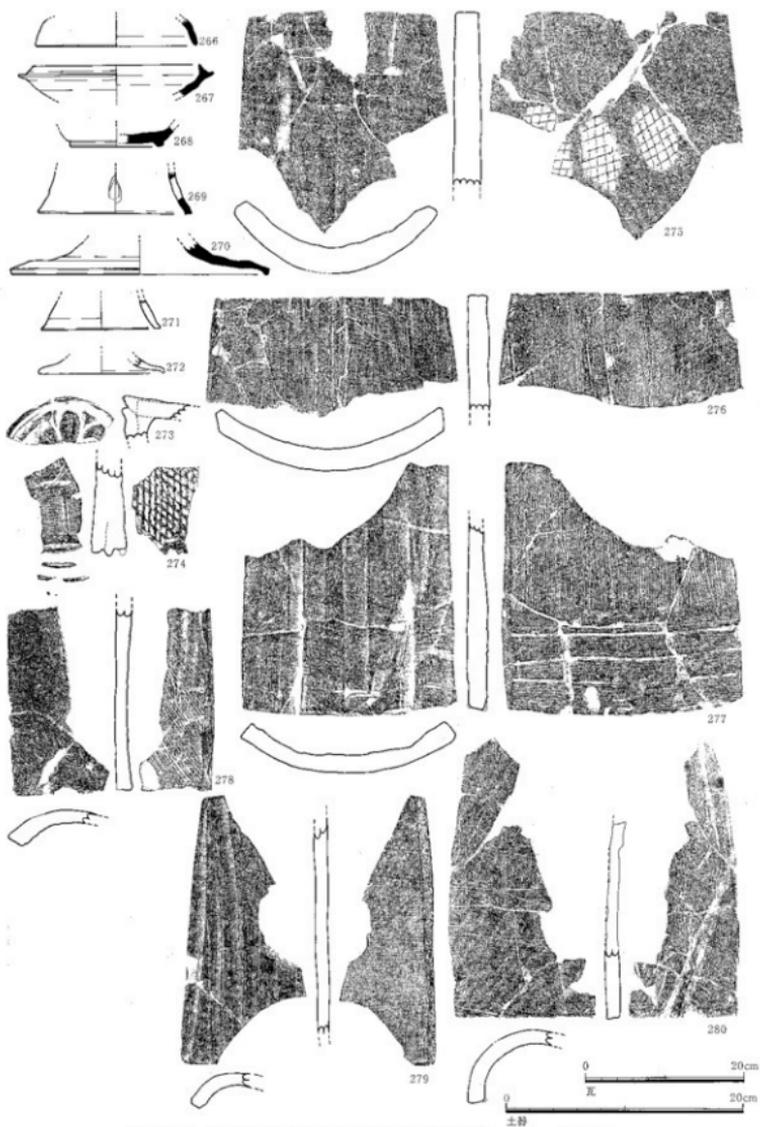
(5) 試掘調査出土遺物

本調査に先立って、8月に実施した試掘調査においても多くの遺物が出土している。

266～270は須恵器である。266～268は蓋坏で、266、267は蓋と身が逆転する前、268は輪高台を貼付したものである。269、270は脚部で、269は透かし穴を持ち、270は大きく開く。

271、272は土師器の脚部である。271は端部を外方につまみ出し、272は大きく開き、端部を下方につまむ。

273～280は瓦類である。273は素弁八葉の鍍瓦、274は凸面斜格子タタキの三重弧文字瓦である。275～277は女瓦で、275の凸面は間隔を開けた格子目タタキ、275は縄目タタキである。277の凸面は特徴的で、段顎+突帯の字瓦を意識した仕上げになっており、瓦当無文の字瓦である可能性もある。段の部分のカキ目の方向の違いで表現し(前側を横方向、後側を縦方向)、突帯の代わりに沈線を施す。278～280は男瓦で、278は凹面に糸切り痕、279は凸面にヘラナデ痕が残り、面戸瓦の可能性もある。



第42図 試掘調査出土遺物実測図及び拓影(S=1/4、瓦1/6)

須原橋・土防器標準表(1~7, 10~15, 30~35)

No.	組上 部別	名称	標準(mm)			取組・取付	取組	(内径) (内高)	出側	(内径) (内高)	取組 取付	取組 取付	備考
			口径	高さ	取付								
1	S04 P0	土防器 取付	(13)		70	取組は取組から内側して立ち上がり、端 部は広く取付を行う。	取組ナゲ 取組ナゲ	25Y07/内径 10Y04/内径		取組、取付を含む。 取付	1/4		
2	S05 P1	取組部 取付	(14)	(10)		取組は取組より内側に取付、端部 側面に取付は取付。	取組ナゲ 取組ナゲ	106/1取付 2Y06/1取付		取組、取付を少量含む。 取付	1/16		
3	S06 P4	取組部 取付	(19)	(3)		やや外側して取付、口径は取組より する。	取組ナゲ 取組ナゲ	5Y06/内径 2.5Y06/内径		取組、取付を少量含む。 取付	1/12		
4	S011 P2	取組部 取付	(14)	(1)		やや外側して、口径取組は下側に取付、内 部中央部は取付。	取組ナゲ 取組ナゲ	2.5Y7/内径 2.5Y7/内径		取組、取付を少量含む。 取付	1/8		
5	P1	取組部 取付	(11)	(2)		取組は取組、やや外側して取付は取組より上 に行く。	取組ナゲ 取組ナゲ	385/1取付 10Y04/内径		取組、取付を含む。 取付	1/20		
6	P2	取組部 取付	(10)	(6)		取組からやや外側して取付、口径 取組は取付する。口径取組は内側に取 付とする。	取組ナゲ、オキヤ 取組ナゲ	206/1取付 5Y06/内径		取組、取付を少量含む。 取付	1/8		
7	P3	取組部 取付	(2)	(3)		取組から取付して取付、口径は取組より、 取組は取付より上に行く。	取組ナゲ、オキヤ 取組ナゲ	2.5Y7/内径 2.5Y06/内径		取組、取付を少量含む。 取付	1/12		
10	S01	取組部 取付	(11)	2.3	(8)	平らな取組から取付して立ち上がり、取 付は取組より内側に取付する。	取組ナゲ 取組ナゲ	7.5Y07/内径 10Y07/内径		取組、取付を含む。 取付	1/6	取組部 取付部	
11	S01	取組部 取付	(17)	(4)		平らな取組から取付して立ち上がり、口 径取組は取付より上に行く。	取組ナゲ 取組ナゲ	2.5Y06/1取付 20Y6/1取付		取組、取付を少量含む。 取付	1/3		
12	S01	取組部 取付	(18)	(5)		口径取組と取付部の境界付近で取付、 1取組は取付より上に行く。	取組ナゲ 取組ナゲ	16Y7/内径 5Y7/内径		取組、取付を含む。 取付	1/4	取組部 取付部	
13	S01	取組部 取付	(7)	(4)	(7)	取組から取付して立ち上がり、取 付は取組より内側に取付する。	取組ナゲ 取組ナゲ	106/1取付 5Y06/1取付		取組、取付を少量含む。 取付	1/3		
14	S01	取組部 取付	(6)	(3)		取組の下部外側に取付、取付は取 組上部や取組より上に行く。	取組ナゲ 取組ナゲ	58Y7/内径 58Y7/内径		取組、取付を少量含む。 取付	1/4		
15	S01	取組部 取付	(5)			取組から取付して取付。	取組ナゲ、オキヤ 取組ナゲ、取付ナゲ	106/1取付 58Y7/内径		取組、取付を少量含む。 取付	1/6	取組部 取付部	
30	S02	取組部 取付	(14)	(1)		口径は取組、取付は取組より上に行く。 口径取組は内側に取付する。	取組ナゲ 取組ナゲ	7.5Y07/内径 7.5Y07/内径		取組、取付を少量含む。 取付	1/12		
31	S02	取組部 取付	(12)	(1)		やや外側して、口径は取組より内側に取 付する。	取組ナゲ 取組ナゲ	10Y08/内径 10Y08/内径		取組、取付を少量含む。 取付	1/6	取組部 取付部	
32	S02	取組部 取付	(11)	(2)		口径取組より内側に取付、口径は取組より 上に行く。	取組ナゲ 取組ナゲ	305/1取付 3Y06/1取付		取組、取付を少量含む。 取付	1/16		
33	S02	取組部 取付	(14)	(2)		口径取組より外側して取付、取付は取組より 上に行く。	取組ナゲ 取組ナゲ	5Y7/内径 5Y7/内径		取組、取付を含む。 取付	1/16	取組部 取付部	
34	S02	取組部 取付	(14)	(1)		取組より外側して、口径取組は取組より 上に行く。	取組ナゲ 取組ナゲ	5Y7/内径 5Y7/内径		取組、取付を含む。 取付	1/8	取組部 取付部	
35	S02	取組部 取付	(12)	4	(8)	取組は取組より外側して、口径取組は取組より 上に行く。	取組ナゲ 取組ナゲ	3Y7/内径 3Y06/内径		取組、取付を含む。 取付	1/3		

演習器・土壌器数値表2 (36, 39~56)

No.	西上 実測	器種	寸法 (cm)				形状・論文	演習 (内題) (内題)	虫溝 (内題) (内題)	防止 地蔵	観測年	備考
			口径	高さ	傾斜	重量						
36	SD	植物器 鉢	(16.2)	(9.2)			オキナ、下口タネのみ同種	3198/1青灰 3198/2白灰	ヤケ皿、 瓦鉢		1/8	
39	SD	土壌器 鉢	(15.8)	(2.2)		器壁は薄く、中央を丁寧にすずり、軽く内壁しながら土方に置き、10センチほど下方から軽く土を押しこみ、器壁内面に内縁が盛り、下方に陥没する。	植物ナメ 植物ナメ	10198/3に白・黄灰 10198/5に白・黄灰	瓦、器壁を少し含む。		1/6	
40	SD	土壌器 鉢	(16.3)	(0.9)			ナメ ナメ	5198/9黄 5198/9黄	瓦、器壁を少し含む。	植物		
41	SD	土壌器 鉢	(1.1)		(11.8)	ほぼ水平の断面に設置し三角形の筒内を陥没させる。	増設のため不明	2.513/1黄灰 2.517/1黄灰	ヤケ皿、器壁・器底を含む。		1/4	器壁部の 可能あり
42	SD	土壌器 鉢	(1.7)		(12.2)	ほぼ水平の筒内を陥没する。筒内外側の器壁に凹溝がある。	植物ナメ 植物ナメ	10197/4に白・黄灰 5197/4黄	瓦、器壁を少し含む。		1/4	内面に 陥没
43	SD	土壌器 鉢	(9.0)	2.9		器底から土層にかけて緩やかに凹み込みながら、口縁部は広く仕上げする。	植物ナメ 植物ナメ	2.5198/4黄 7.5197/4黄	瓦、器壁を少し含む。		1/2	内面に 陥没
44	SD	土壌器 鉢	(11.7)	2.7	1.0	器底と器壁の境界が明確で、器壁が器底的に立ち上がる。口縁部ははやや外反する。瓦片状とも厚が厚い。	植物ナメ 植物ナメ、器底へサテリ器ナメ	7.5197/4黄 5198/4黄	瓦、器壁を少し含む。 ヤケ皿		1/4	器壁部 のみ
45	SD	土壌器 鉢	(1.2)	2.7	(8.3)	器底と器壁の境界が明確で、器壁が器底的に立ち上がる。口縁部ははやや外反する。瓦片状とも厚が厚い。	植物ナメ 植物ナメ、器底へサテリ	10198/4に白・黄灰 7.5197/4に白・黄灰	ヤケ皿、器壁を含む。 瓦片		1/4	器壁部 のみ
46	SD	土壌器 鉢	(2.0)		(6.2)	ほぼ水平の断面からやや内凹して立ち上がる。口縁部が明確になる。	植物ナメ 植物ナメ	2.518/4白 2.518/2白	ヤケ皿、器壁・器底を含む。		1/4	
47	SD	土壌器 鉢	(1.38)	(2.0)		器壁は片側、口縁部が器壁に凹溝がある。	ナメ ナメ	10197/3に白・黄灰 10197/3に白・黄灰	ヤケ皿、器壁を含む。		1/12	内面に 陥没
48	SD	土壌器 鉢	(15.5)	(2.1)		口縁部はやや外反し、器壁内面に内縁がある。	増設のため不明	5198/9黄 5198/9黄	瓦、器壁を少し含む。 ヤケ皿		1/12	
49	SD	土壌器 鉢	(15.8)	2.4	(12.8)	ほぼ水平の断面から内凹しながら立ち上がる。外上方に傾く。口縁部は広くおさめる。	増設のため不明	5197/4黄 5198/9黄	瓦、器壁を少し含む。 瓦		1/4	
50	SD	土壌器 鉢	(24.4)	(1.0)		口縁部は大きく傾き、器壁内面に凹溝がある。	増設のため不明	5198/9黄 2198/9黄	瓦、器壁を少し含む。 瓦		1/12	
51	SD	植物器 鉢	(9.6)	3.3		小振りて、器底と土層との境界がはっきりしない。口縁部はほぼ直で、外縁部はへら型と調整。	植物ナメ 植物ナメ、ハネ	2.517/4黄灰 7.517/1白	瓦、器壁を少し含む。 瓦		1/4	
52	SD	植物器 鉢	(9.4)	(1.9)		口縁部内面に三角形のふちを陥没させる。口縁部は広くつむぎ。	植物ナメ 植物ナメ	2.5197/1白・黄灰 3198/1青灰	ヤケ皿、0.5mm以下の器壁を少し含む。 器底		1/12	
53	SD	植物器 鉢	(10.4)	(1.6)		やや小振りて、口縁部内面に器壁のふちを陥没させる。口縁部ははやや外反する。	植物ナメ 植物ナメ	5198/1青灰 5198/1青灰	ヤケ皿、器壁を少し含む。 器底	植物		
54	SD	植物器 鉢	(8.3)	(2.1)		口縁部内面のふちが非常に陥没されている。	植物ナメ 植物ナメ	10197/4黄灰 3198/1青灰	ヤケ皿、器壁を少し含む。 瓦		1/8	
55	SD	植物器 鉢	(1.5)		2.8 ツマミ	ほぼ水平の断面のみ。	増設のため不明	2.513/1黄灰 10197/4に白・黄灰	器壁、ヤケ皿	ツマミ		土壌器
56	SD	植物器 鉢	(12.8)	(1.0)		器壁で口縁部を下方に陥没させる。	植物ナメ 植物ナメ	5198/1青灰、自然体 5198/1青灰	器 壁		1/8	

演習書・土質試験集3 (57~71、106、112、115~119)

No.	土上 部目	試験 内容	試験 (cm)			観察・論文	試験 種類	(外径) (内径)	土質 (内径)	土質 (内径)	土質 地質	観測 項目	備考
			内径	径差	高さ								
57	SD3	標準砂 試験	(11.2)	(1.0)		土質試験をつまむ程度に若干下方に振盪させる。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	やや硬く少々含む。 良好	1/4		
58	SD3	標準砂 試験	(14.3)	(1.5)		やや硬手で、口縁部をつまむ程度に僅かに下方に振盪させる。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬 良好	1/4		
59	SD3	標準砂 試験	(14.7)	(1.5)		硬手は強く硬手で、土質試験をつまむ程度に僅かに下方に振盪させる。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質、白砂 5707/1標準砂	5706/1土質、白砂 5707/1標準砂	硬、第一層砂を少量含む。 良好	1/4		
60	SD3	標準砂 試験	(17.4)	(1.2)		硬手で、口縁部をつまむ程度に僅かに下方に振盪させる。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	やや硬、硬砂を少し含む。 良好	1/10		
61	SD3	標準砂 試験	(15.4)	(0.5)		やや硬手で、口縁部をつまむ程度に僅かに下方に振盪させる。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬、硬砂を少し含む。 良好	1/4		
62	SD3	標準砂 試験	(15.8)	(1.4)		硬手で、口縁部をつまむ程度に僅かに下方に振盪させる。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	やや硬、硬砂を少し含む。 良好	1/4		
63	SD3	標準砂 試験	(16.4)	(2.0)		硬手は外周して裏面に立ち上がり、口縁部は欠けり。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬 欠けり	1/20		
64	SD3	標準砂 試験	(14.8)	(2.8)		硬手は外周して裏面に立ち上がり、口縁部は欠けり。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	やや硬、硬砂を少し含む。 良好	1/16	土質試験	
65	SD3	標準砂 試験	(18.2)	(3.0)		集合の片断から、硬手に立ち上がり、口縁部は欠けり。口縁部は欠けり。	硬手のため不明	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬 硬	1/8	土質試験	
66	SD3	標準砂 試験	(18.2)	(2.2)	(18) 高さ	内面する軟弱を起す。	回転ナゲ 回転ナゲ	2507/1土質 5707/1標準砂	2507/1土質 5707/1標準砂	やや硬 良好	1/3		
67	SD3	標準砂 試験	(8.8)	(0.8)	19.2 高さ	内面する軟弱を起す。	硬手のため不明 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬 良好	1/5		
68	SD3	標準砂 試験	(15.0)	(1.1)		硬手は外周し、硬手で内面する。口縁部は欠けり。口縁部は欠けり。	回転ナゲ 回転ナゲ	2507/1土質 5707/1標準砂	2507/1土質 5707/1標準砂	やや硬 良好	1/4		
69	SD3	標準砂 試験	(4.5)	(4.5)		硬手は外周し、硬手で内面する。口縁部は欠けり。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬 良好	1/4		
70	SD3	標準砂 試験	(18.2)	(3.0)		硬手は外周し、硬手で内面する。口縁部は欠けり。	回転ナゲ、ヘラ取り 回転ナゲ	2507/1土質 5707/1標準砂	2507/1土質 5707/1標準砂	硬、硬砂を少し含む。 良好	1/4		
71	SD3	標準砂 試験	(19.8)	(3.0)		硬手は外周し、硬手で内面する。口縁部は欠けり。口縁部は欠けり。	回転ナゲ 回転ナゲ	5707/1土質 5707/1標準砂	5707/1土質 5707/1標準砂	やや硬、硬砂を少し含む。 良好	1/4		
106	互換	標準砂 試験	(23.0)	(2.5)		口縁部に向かって硬手に内面する。口縁部は欠けり。	ナゲ ナゲ	1070/1土質 5707/1標準砂	1070/1土質 5707/1標準砂	やや硬、硬砂を少し含む。 やや不潔	1/4		
112	状況 図1	標準砂 試験	(10.5)	(2.0)		立ち上がりは硬手で、内面する。口縁部は欠けり。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬 良好	1/4		
115	標準砂 試験	標準砂 試験	(12.6)	(2.8)		土質試験と土質試験の境界ははっきりしない。土質試験は硬手。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬 良好	1/4		
116	標準砂 試験	標準砂 試験	(13.2)	(2.8)		土質試験と土質試験の境界ははっきりしない。土質試験は硬手。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	やや硬、硬砂を少し含む。 良好	1/8		
117	標準砂 試験	標準砂 試験	(11.2)	(2.5)		土質試験と土質試験の境界ははっきりしない。土質試験は硬手。	回転ナゲ 回転ナゲ	1070/1土質 5707/1標準砂	1070/1土質 5707/1標準砂	硬、硬砂を少し含む。 やや不潔	1/4		
118	標準砂 試験	標準砂 試験	(12.8)	(2.5)		土質試験と土質試験の境界ははっきりしない。土質試験は硬手。	回転ナゲ 回転ナゲ	5706/1土質 5707/1標準砂	5706/1土質 5707/1標準砂	硬 良好	1/4		
119	標準砂 試験	標準砂 試験	(12.4)	(2.1)		土質試験と土質試験の境界ははっきりしない。土質試験は硬手。	回転ナゲ 回転ナゲ	1070/1土質 5707/1標準砂	1070/1土質 5707/1標準砂	硬、第一層砂を少し含む。 良好	1/4		

深溝・土師器類表4(120~139)

No.	器名	器種	口径(mm)			形制・施文	深溝 (外側) (内側)	色澤 (外側) (内側)	胎土 構成	焼成時 相	備考
			口縁	口内	口外						
120	弥生中	深溝 円蓋	(122)	(83)		文字部と口縁部の境目がはっきりせず、口縁はほぼ直交。外側縁部は多少歪み不規則、内面は黒炭の跡と灰が散らばるに散る。	内輪ナゲ 外輪ナゲ 深溝ナゲ	536/1青灰 7535/1灰	やや黄、黒砂を少量含む。 灰	1/3	
121	弥生中	深溝 円蓋	(104)	(24)		文字部と口縁部の境目がはっきりせず、口縁はほぼ直交。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	10826/1青灰 10064/1黒赤灰	やや黄、黒砂を少量含む。	1/4	
122	弥生中	深溝 円蓋	(104)	(24)		文字部と口縁部の境目がはっきりせず、口縁はほぼ直交。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	3196/1青灰 376/1青灰	やや黄、黒一層砂を多く含む。 灰	1/6	
123	弥生中	深溝 円蓋	(104)	(29)		文字部と口縁部の境目がはっきりせず、口縁はほぼ直交。口縁は直交。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	7172/2青灰 7577/1白	やや黄 黒灰	細片	全蓋に 白炭層
124	弥生中	深溝 円蓋	(104)	(29)		文字部と口縁部の境目がはっきりしない。口縁はほぼ直交。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	306/1青灰 5766/1青灰	やや黄、黒砂を少量含む。	1/8	
125	弥生中	深溝 円蓋	(103)	(15)		口縁部内面に横長三角形の小さなかえりを刻行する。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	576/1青灰 3765/1青灰	黄、黒一層砂を多く含む。 黒砂	1/4	
126	弥生中	深溝 円蓋	(84)	(20)		口縁部内面に比較的小さめのかえりを刻行する。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5767/1青灰 3767/1青灰	やや黄、黒砂を多く含む。 黒砂	1/10	
127	弥生中	深溝 円蓋	(84)	(22)		口縁部内面に比較的小さめのかえりを刻行する。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	587/1青灰 5767/1青灰	やや黄 黒灰	1/6	
128	弥生中	深溝 円蓋	(84)	(20)		口縁部内面にかえりがつく(取り込み)。口縁部は直交。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	585/1青灰 576/1青灰	やや黄、黒一層砂を多く含む。 灰	1/8	
129	弥生中	深溝 円蓋	(101)	(17)		口縁部を僅かに下方に凹ませる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	10192/6青灰 2577/1青灰	やや黄、1mm程度の黒砂を含む。 やや黄	1/12	土師器
130	弥生中	深溝 円蓋	(152)	(10)		器中で、口縁部の下方へ陥没は殆ど認められない。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5766/1青灰 5766/1青灰	やや黄 黒灰	1/8	
131	弥生中	深溝 円蓋	(166)	(13)		口縁部を下方に凹ませる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	10195/1灰 5766/1青灰	黄、黒砂を少量含む。 黒砂	1/20	
132	弥生中	深溝 円蓋	(134)	(20)		立ち上がりは大きく内傾し、縁部はよく仕上げられる。鋭い受け部は上外方に伸びる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5766/1青灰 5766/1青灰	黄、黒砂を少量含む。 黒砂	細片	
133	弥生中	深溝 円蓋	(132)	(26)		立ち上がりは内傾し、縁部はよく仕上げられる。鋭い受け部は上外方に伸びる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5764/1青灰 5766/1青灰	黄 黒砂	1/8	
134	弥生中	深溝 円蓋	(144)	(32)		立ち上がりは非常に高く、縁部はよく仕上げられる。鋭い受け部は上外方に伸びる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5766/1青灰 5766/1青灰	やや黄、黒砂を少量含む。 黒砂	1/4	
135	弥生中	深溝 円蓋	(104)	(19)		器中はよく、立ち上がりは内傾し、縁部はよく仕上げられる。鋭い受け部は上外方に伸びる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5766/1青灰 5766/1青灰	黄、黒一層砂を多く含む。 黒砂	1/4	
136	弥生中	深溝 円蓋	(118)	(23)		立ち上がりはやや内傾し、縁部はよく仕上げられる。鋭い受け部は上外方に伸びる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5766/1青灰 5766/1青灰	黄、黒砂を少量含む。 黒砂	1/6	
137	弥生中	深溝 円蓋	(116)	(22)		鋭い立ち上がりは内傾し、縁部はよく仕上げられる。鋭い受け部は上外方に伸びる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5764/1青灰 5766/1青灰	やや黄、縁部を少量含む。 黒砂	細片	
138	弥生中	深溝 円蓋	(104)	(24)		立ち上がりは内傾し、縁部はよく仕上げられる。鋭い受け部は上外方に伸びる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5767/1青灰 677/1青灰	やや黄 黒砂	1/8	正所に ならず
139	弥生中	深溝 円蓋	(114)	(24)		立ち上がりはほぼ直交し、縁部はよく仕上げられる。鋭い受け部は上外方に伸びる。	内輪ナゲ 外輪ナゲ	5766/1青灰 5766/1青灰	黄、黒砂を少量含む。 黒砂	1/8	

演習器・土器器数表5(140~159)

No	器種	器名	高さ (cm)			形製・文様	図案	(外底) (内底)	色澤	(内底)	出土 状況	坑位	備考
			口徑	器高	頸径								
140	短頸壺	短頸壺 耳	(11.2)	(2.6)		やや小さい立ち上がりは内腹し、頸部は丸く仕上げられ、短い受け部は外方に開く。	図版ナア 図版ナア	5257/1 5258/1	青灰 青灰	遺跡	1/8	内面に 自然釉	
141	短頸壺	短頸壺 耳	(13.0)	(4.4)		折り込みの立ち上がりは内腹し、頸部は丸く仕上げられ、短い受け部は外方に開く。	図版ナア 図版ナア	5256/1 5256/1	青灰 青灰	遺跡	1/4		
142	短頸壺	短頸壺 耳	(10.3)	(2.2)		やや小さい立ち上がりは内腹し、頸部は丸く仕上げられ、短い受け部は外方に開く。	図版ナア 図版ナア	5264/1 10864/1	青灰 青灰	遺跡	1/8	内面に 自然釉	
143	短頸壺	短頸壺 耳	(8.5)	(2.0)		やや小さい立ち上がりは内腹し、頸部は丸く仕上げられ、短い受け部は外方に開く。	図版ナア 図版ナア	10796/1 5257/1	青灰 青灰	遺跡	1/4	内面に 自然釉	
144	短頸壺	短頸壺 耳	(8.2)	(1.8)		やや小さい立ち上がりは内腹し、頸部は丸く仕上げられ、短い受け部は外方に開く。	図版ナア 図版ナア	5253/1 5257/1	青灰 青灰	遺跡	1/4	内面に 自然釉	
145	短頸壺	短頸壺 耳	(11.8)	(3.6)		肩下を絞込み、直壁が内凹して立ち上がる。底部へうねり状の突起。	図版ナア 図版ナア	5256/1 5256/1	青灰 青灰	遺跡	3/4		
146	短頸壺	短頸壺 耳	(11.2)	(3.4)		内腹する輪高台を施す。内面に赤色黒点の可能性がある。底跡未調査。	図版ナア 図版ナア	5257/1 10864/1	青灰 青灰	遺跡	1/8		
147	短頸壺	短頸壺 耳	(2.5)	(1.0)		高台付 高台付	図版ナア 図版ナア	5257/1 5257/1	青灰 青灰	遺跡	1/8		
148	短頸壺	短頸壺 耳	(1.6)	(0.8)		ほぼ直立する小さい輪高台を施す。底跡未調査。	図版ナア 図版ナア	5261/1 5261/1	青灰 青灰	遺跡	3/5		
149	短頸壺	短頸壺 耳	(1.4)	(0.7)		若干内腹する輪高台を施す。底跡未調査。	図版ナア 図版ナア	5261/1 5261/1	青灰 青灰	遺跡	1/4		
150	短頸壺	短頸壺 耳	(1.7)	(0.8)		内腹する小さい輪高台を施す。	遺跡のため不明	2378/1 5258/1	青灰 青灰	遺跡	1/4		
151	短頸壺	短頸壺 耳	(1.8)	(1.1)		大きく内腹する輪高台を施す。底跡未調査。高台付の蓋が大きい。	図版ナア 図版ナア	5254/1 2378/1	青灰 青灰	遺跡	3/5		
152	短頸壺	短頸壺 耳	(1.3)	(1.0)		内腹する輪高台を施す。	遺跡のため不明	2378/1 2378/1	青灰 青灰	遺跡	1/8	土師製	
153	短頸壺	短頸壺 耳	(2.0)	(2.7)		小振りで見製は外腹し、直筒で蓋部は浅い。	図版ナア 図版ナア	5256/1 5256/1	青灰 青灰	遺跡	1/4		
154	短頸壺	短頸壺 耳	(11.6)	(3.2)		頸部は外腹し、頸部は上方と深い。	図版ナア 図版ナア	5261/1 5257/1	青灰 青灰	遺跡	1/4		
155	短頸壺	短頸壺 耳	(10.6)	(1.7)		小振りで見製は外腹し、直筒で蓋部は浅い。	図版ナア 図版ナア	5257/1 5257/1	青灰 青灰	遺跡	1/8		
156	短頸壺	短頸壺 耳	(2.3)	(0.8)		高台付 高台付	図版ナア 図版ナア	5256/1 5256/1	青灰 青灰	遺跡	1/2		
157	短頸壺	短頸壺 耳	(14.5)	(2.9)		口縁は丸く内腹し、直筒で蓋部は浅い。	図版ナア 図版ナア	2378/1 2378/1	青灰 青灰	遺跡	3/12	土師製	
158	短頸壺	短頸壺 耳	(18.6)	(4.8)	(20.4)	頸部が大きく内腹し、直筒で蓋部は浅い。	図版ナア 図版ナア	5256/1 5256/1	青灰 青灰	遺跡	1/8	内面に 自然釉	
159	短頸壺	短頸壺 耳	(19.0)	(2.7)	(21.3)	頸部が大きく内腹し、直筒で蓋部は浅い。	図版ナア 図版ナア	2378/1 5256/1	青灰 青灰	遺跡	1/16	内面に 自然釉	

第3巻 土紡器観察表6 (160~178)

No.	出土 箇所	形式	高さ (cm)			形態・風文	原型	(内図) (内型)	糸質 (内糸)	紡土 状況	使用年	備考
			口径	器高	器径							
160	佐倉物	横巻器 鉄器	(13.8)	(2.6)	(12.2)	唇部から口縁にかけて内径する。口縁部は直ぐに広がる。	円筒ナブ 圓筒ナブ	385/1青灰 5706/1青灰	背 面線		鎌古	
161	佐倉物	横巻器 鉄器	(14.6)	(3.2)	(11.4)	唇部から大きく内側へ傾斜する。口縁部は直ぐに広がる。	円筒ナブ 圓筒ナブ	1014/2ナリツ灰 5782/1青灰	裏 面線		鎌古	内面に 自然輪
162	佐倉物	横巻器 鉄器	(18.6)	(3.0)	(21.6)	唇部から口縁にかけて内径する。口縁部は直ぐに広がるが、上方へ傾くつらむ。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	3220/1青灰 6196/1青灰	やや背 面線		1/6	
163	佐倉物	横巻器 鉄器	21.2	(8.1)	(22.2)	唇部から口縁にかけて内径。唇部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。外側に自然輪がある。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	578/1灰白 2578/1青灰	背、裏面を少し含む。 不具		1/4	土紡器
164	佐倉物	横巻器 鉄器	(12.8)	(2.4)	(12.8)	唇部から口縁にかけて内径。口縁部は直ぐに広がる。外側から直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	6786/1青灰 588/1青灰	やや背、裏一輪部を含む。 裏面		1/6	
165	佐倉物	横巻器 鉄器	(15.6)	(3.1)	(14.0)	唇部から口縁にかけて内径。唇部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	10073/1青灰 6786/1青灰	やや背 面線		鎌古	
166	佐倉物	横巻器 鉄器	(17.8)	(2.4)	(18.7)	唇部から口縁にかけて内径。口縁部は直ぐに広がる。外側に自然輪がある。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	578/1灰白 578/1灰白	背 面線		1/6	土紡器
167	佐倉物	横巻器 鉄器	(23.1)	(12.8)		唇部は少し内径し、口縁部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。外側に自然輪がある。口縁部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ、ナブ、腹ハ 圓筒ナブ、ナブ	10826/1青灰 5786/1青灰	やや背、2mm以下の長さ、縦一輪部を含む。 不具		1/4	透視時の中心のみが大きい。
168	佐倉物	横巻器 鉄器	(25.4)	(3.0)		口縁部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	578/1青灰 5786/1青灰	背、裏面を少し含む。 裏面		鎌古	
169	佐倉物	横巻器 鉄器	(21.4)	(4.5)		口縁部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	578/1青灰 578/1青灰	背、裏面を少し含む。 裏面		1/6	
170	佐倉物	横巻器 鉄器	(15.5)	(5.2)	(3.6)	唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ、ヘウナリ 圓筒ナブ	681/1青灰 5786/1青灰	やや背、唇部を含む。 裏面		2/3	
171	佐倉物	横巻器 鉄器	(17.6)	(4.1)	(8.4)	唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ、ヘウナリ 圓筒ナブ	5786/1青灰 5786/1青灰	背、裏面を少し含む。 裏面		1/3	
172	佐倉物	横巻器 鉄器	(17.8)	(4.1)	(8.4)	唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	5786/1青灰 5786/1青灰	やや背、唇部、裏面を多く含む。 裏面		1/4	
173	佐倉物	横巻器 鉄器	(8.0)	(5.2)		唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	10036/1青灰 578/1青灰	縦、1mm以下の長さも多く含む。 不具		1/4	
174	佐倉物	横巻器 鉄器	(8.0)	1.9		口縁部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	2786/1青灰 7578/1青灰	背、裏面を含む。 不具		鎌古	底の可動性あり
175	佐倉物	横巻器 鉄器	21.6	(21.4)	(30.5)	唇部から口縁にかけて内径。唇部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。	円筒ナブ 円筒ナブ	7577/1灰白 7578/1青灰	やや背、縦一輪部を多く含む。 不具		1/3	土紡器
176	佐倉物	横巻器 鉄器	(17.8)	(5.3)		唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。唇部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	6786/1青灰 5786/1青灰	縦、1mm以下の長さも多く含む。 裏面		1/20	
177	佐倉物	横巻器 鉄器	(17.5)	(5.2)		唇部から口縁にかけて内径。唇部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	174/1青灰 5786/1青灰	やや背 面線		1/6	自然輪
178	佐倉物	横巻器 鉄器	(17.8)	(4.1)		唇部から口縁にかけて内径。唇部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。口縁部は直ぐに広がる。	圓筒ナブ 圓筒ナブ	578/1青灰 578/1青灰	背 面線		1/6	自然輪

須磨器・土器製品発表表(179~199)

No.	出土 層位	器種	口径(cm)				形態・長さ	素材	(5面) (9面)	色澤	(内面) (外面)	胎土 組成	焼成中	備考
			口径	口径	口径	口径								
179	佐々木	須磨器 須磨器	(5.2)	(14.0)			器底で大きく外方に反曲する。	須磨ナテ 須磨ナテ 須磨ナテ	10Y8/1灰内 5Y7/1須磨灰	やや粗、胎一中期を多く含む。 点状	1/4	自然焼		
180	佐々木	須磨器 須磨器	(12.0)	(14.0)			口径は外方に大きく反曲し、器底は器底 部から大きく反り、175℃以上焼成の可能性がある。	須磨ナテ 須磨ナテ	5Y6/1灰 2.5Y6/2灰	やや粗、胎一中期を多く含む。 点状	1/4	土層埋		
181	佐々木	須磨器 須磨器	(15.4)	(12)			口径は大きく開口部に反り、外側から 狭く締まる。器底は高い。	須磨ナテ 須磨ナテ	2.5Y7/1灰内 3Y8/1灰口	胎、器底も少量含む。 点状	1/4	須磨器 須磨器		
182	佐々木	須磨器 須磨器	(13.8)	(16)			口径は大きく開口部に反り、外側から 狭く締まる。	須磨ナテ 須磨ナテ	3Y8/1須磨灰 2Y5/1須磨灰	胎、器底も少量含む。 点状	1/8	自然焼		
183	佐々木	須磨器 須磨器	(11.8)	(2.0)			器底で大きく外方に反曲し、口径は高い。 器底は高く仕上げ。	須磨ナテ 須磨ナテ	3Y7/1須磨灰 3Y7/1須磨灰	胎、器底も少量含む。 点状	1/8	自然焼		
184	佐々木	須磨器 須磨器	(1.6)	(11.2)			器底を器底より、器底を狭く。	須磨ナテ 須磨ナテ	2.5Y7/1灰内 3Y8/1須磨灰	やや粗、胎一中期を含む。 点状	1/8			
185	佐々木	須磨器 須磨器	(11.6)	(2.0)			底で高い器底を器底とする。	須磨のため不明	2.5Y8/2灰内 5Y8/1灰内	器 底	1/8	土層埋		
186	佐々木	須磨器 須磨器	(2.0)	23 ツマミ			器底で大きく外方に反曲し、口径は高い。 器底は高く仕上げ。	須磨ナテ 須磨ナテ	10Y8/2灰内 10Y8/2灰内	やや粗、胎一中期を含む。 点一不点	ツマミ	1/4	土層埋	
187	佐々木	須磨器 須磨器	(11.2)	(1.1)			器底で、1.1cm程度の器底が器底に反る。	須磨ナテ 須磨ナテ	5Y7/1灰 5Y7/1灰	器 底	1/4			
188	佐々木	須磨器 須磨器	(1.5)	(7.0)			器底から器底から、器底で器底に立ち 上がり、器底へ反り。	須磨のため不明	7.5Y7/1灰 10Y8/2灰内	器 底	1/4			
189	佐々木	須磨器 須磨器	(1.3)	(1.8)			器底から器底に立ち上がり、口径にか けて外反。器底は高く仕上げ。器底は 高く下向きに仕上げ。	須磨ナテ 須磨ナテ	7.5Y7/1灰 10Y8/2灰内	胎、器底を含む。 点状	1/2	内面に 埋入		
190	佐々木	須磨器 須磨器	(2.45)	(1.3)			大きく開口部は器底付近で僅かに外反 し、器底付近に器底が反る。器底は高い。	ナテ ナテ	2.5Y8/1灰 2.5Y8/1灰	胎、器底を含む。 点状	1/12			
191	佐々木	須磨器 須磨器	(2.4)	(2.2)			大きく開口部は器底付近で僅かに外反 し、器底付近に器底が反る。	須磨ナテ 須磨ナテ	7.5Y7/1灰 7.5Y7/1灰	器 底		埋入		
192	佐々木	須磨器 須磨器	(2.0)	(2.5)	(17.0)		大きく開口部は器底付近で僅かに外反 し、器底付近に器底が反る。	ナテ ナテ	2.5Y7/1灰 10Y8/2灰内	胎、器底も少量含む。 点	1/4			
193	佐々木	須磨器 須磨器	(1.6)	(2.0)			大きく開口部は器底付近で僅かに外反 し、器底付近に器底が反る。	須磨のため不明	7.5Y7/1灰 10Y8/2灰内	やや粗、器底を含む。 点		埋入		
194	佐々木	須磨器 須磨器	(1.2)	(2.1)			口径は器底付近に大きく反る。器底付近に 口径が広がる。器底は高い。	ナテ 須磨ナテ	5Y7/1灰 5Y7/1灰	胎、器底も少量含む。 点状	1/8			
195	佐々木	須磨器 須磨器	(1.48)	2.1	(10.2)		口径は器底付近に大きく反る。器底付近に 口径が広がる。器底は高い。	須磨ナテ 須磨ナテ	5Y6/1灰 5Y6/1灰	やや粗、器底を含む。 点、やや粗	1/4			
196	佐々木	須磨器 須磨器	(15.0)	(1.4)	(12.4)		器底から器底に立ち上がり、口径は大きく開口部 に反る。器底は高く仕上げ。器底は高い。	須磨ナテ 須磨ナテ	7.5Y8/1灰 7.5Y8/1灰	胎、器底も少量含む。 点状	1/12			
197	佐々木	須磨器 須磨器	(1.5)	(1.8)	(13.2)		器底から器底に立ち上がり、口径にか けて外反。器底は高く仕上げ。器底は 高く下向きに仕上げ。	須磨ナテ 須磨ナテ	10Y7/1灰 10Y7/1灰	胎、器底を含む。 点状	1/12			
198	佐々木	須磨器 須磨器	(1.45)	(2.4)			外反して立ち上がり、口径部で僅かに外 反する。口径部は器底付近に器底が反る。	須磨のため不明	10Y7/1灰 10Y7/1灰	器 底		埋入		
199	佐々木	須磨器 須磨器	(1.4)	(3.8)			口径部で僅かに外反し、口径部は高く 仕上げ。	須磨ナテ 須磨ナテ	5Y6/1灰 5Y8/1灰内	やや粗、0.1mm程度の灰、 器底を含む。 点	1/8			

須高路・土師踏続摩裏8(200~216)

No.	出土 場所	形種	直径(cm)				形態・図文	図説 (内面)	色彩 (内面)	胎土 構成	成形法	備考
			口径	器高	胴径	底径						
200	須高路	土師器 杯	(1X8)	(2.1)			図版ナア 図版ナア	25YR6-6黄 25YR5-5黄	黄 鉄		1/8	
201	須高路	土師器 杯	(10.8)	2.2		(7.4)	図版ナア、図版ヘラ切り 図版ナア	7.5YR7-6黄 7.5YR6-5黄	やや黄、磁鉄を多く含む。 良好		1/4	内面に 溝
202	須高路	土師器 杯	(10.3)	2.6		(8.5)	図版ナア、図版ナア 図版ナア	7.5YR7-6黄 10YR7-5に40%黄鉄	やや黄 不良		1/3	内面に 溝
203	須高路	土師器 杯	(10.7)	2.1		(8.1)	図版ナア、図版ヘラ切り 図版ナア	10YR5-6黄灰 10YR7-6黄褐色	灰、磁鉄を少し含む。 良好		1/6	内面に 溝
204	須高路	土師器 杯	(13.2)	(2.3)		(7.0)	図版ナア 図版ナア	7.5YR6-6黄 7.5YR7-6黄	やや黄、磁鉄、磁鉄を多く 含む。 良好		1/3	
205	須高路	土師器 杯	(13.8)	(1.6)				5YR6-4に10% 5YR7-6黄	黄 やや不良		溝付	内面に 溝
206	須高路	土師器 杯	(1.3)			9.4	図版ナア 図版ナア	7.5YR7-6に40% 7.5YR5-4黄褐色	黄 良好		磁鉄	
207	須高路	土師器 杯	(1.0)			17.0		7.5YR7-6黄 7.5YR7-6黄	黄 鉄		1/2	
208	須高路	土師器 杯	(1.9)			6.1	図版ナア、図版ヘラ切り 図版ナア	7.5YR6-6黄 5YR7-5褐色	やや黄、磁鉄を多く含む。 良好		3/4	
209	須高路	土師器 杯	(2.1)			(13.1) 高台付	ナア ナア	2.5YR7-3黄褐色 2.5YR7-3黄褐色	やや黄、1mm以下の長石、 チャートを多く含む。 良好		1/4	底縁部 の溝あり
210	須高路	土師器 杯	(2.6)			(10.6) 高台付	図版ナア ナア	5YR6-6黄 10YR6-3黄褐色	やや黄、磁鉄を多く含む。 良好		1/2	
211	須高路	土師器 杯	(1.7)			(10.5) 高台付	ナア ナア	5YR7-6黄 10YR6-4に40%黄鉄	黄、磁鉄を多く含む。 やや不良		1/6	
212	須高路	土師器 杯	(21.8)	(5.9)			ハテ、図ナア 図ナア、ハテ	5YR7-6黄 5YR7-6黄	黄、磁鉄を少し含む。 良好		1/12	
213	須高路	土師器 杯	(19.7)	(5.1)			図ナア、図ハテ 図ハテ、図ナア	10YR5-6黄褐色 10YR6-3黄褐色	やや黄、1mm以下の長石、 チャートを多く含む。 良好		1/12	
214	須高路	土師器 杯	(28.3)	(10.6)			ナアキ 図ハテ、図ナア	7.5YR7-6黄 2.5YR5-5黄	やや黄、磁鉄を多く含む。 やや不良		1/8	
215	須高路	土師器 杯	(22.8)	(4.8)			ナア ナア	5YR6-6黄 5YR6-6黄	やや黄、1mm以下の長石、 磁鉄を多く含む。 良好		1/12	
216	須高路	土師器 杯	(23.8)	(4.2)			図版ナア ハテ	2.5Y6-1黄灰 2.5Y5-1黄灰	やや黄、磁鉄を少し含む。 灰、磁鉄		溝付	底縁部 に溝

汎用器・土師器数率表9(217~218, 252~261, 266~272)

No.	用土 器種	器種	寸法(cm)				形状・高さ	用途	(外国) (内国)	色澤	(外国) (内国)	胎土 産地	発祥年	備考
			口径	器高	胴径	底径								
217	立合罎	横巻花 心罎	(8.8)	(2.3)	(4.0)		胴壁は内型し、口縁で外反する。胴面は 典型的な高内形横輪+平。		5C78/6灰白釉に黒文花 黒線38/6白	黄 赤	黄 赤	1/2	11歳 ~14C 前	
218	立内輪	横巻花 心罎	2.7	1.35	0.45		小型で、胴壁が厚まる。完形品の長 さは4cm程度と思われる。		10Y70/4に赤い黄 赤	赤	赤	1/2	土師群	
252	立罎	横巻花 心罎	(8.2)	(1.4)			胴平で、口縁部内部にかまを付す。天 蓋部外周へ丸起り。	回転ナデ 回転ナデ	10Y70/2オリーブ灰(輪 紋) 10Y70/1黄赤灰	赤 赤	赤 赤	1/4	外器の 体には 横輪	
253	立罎	横巻花 心罎	(9.2)	(1.7)			胴壁は厚平で、胴面定台形の輪高をそ 起す。	回転ナデ 回転ナデ	5G74/1紅オリーブ灰 5Y74/1黄赤灰	赤	赤	1/2	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	
254	立罎	横巻花 心罎	(21.0)	(4.3)			胴縁から口縁にかけて内型する。口縁部 は丸く平ぼる。	回転ナデ、胴縁へ丸起り 回転ナデ	5P76/1黄赤 5Y76/1黄赤	赤 赤	赤 赤	1/8		
255	立罎	土師器	(16.8)	(1.7)			大きく胴部に丸み、口縁部付有で縁が 丸く平ぼる。胴部内部には内輪が起る。	回転ナデ 回転ナデ	5Y76/赤 5Y76/赤	赤	赤	1/8	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	
256	立罎	土師器	(16.0)	1.8	(10.4)		胴部から内型して立ち上がり、口縁付有 の外反する。胴部内部には内輪が起る。	回転ナデ 回転ナデ	5Y76/赤 5Y77/赤	赤	赤	1/4	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	
257	立罎	土師器	(13.4)	2.8	(10.4)		やや丸みを持った胴縁から、外型して武 蔵の立ち上がり、口縁部は丸くおさ める。内外面に横輪。	回転ナデ 回転ナデ	10Y70/4に赤い黄赤 10Y72/4に赤い黄赤	赤、赤赤を少 量含む。黄 赤	赤	1/8	胎土に 赤を少 量含む	
258	立罎	土師器	(10.6)	3.3	(6.4)		小さい胴部から丸い胴縁が胴縁部に立ち 上がり、口縁で縁から外反し、胴部は丸 く平ぼる。	回転ナデ、胴部へ丸起り 回転ナデ	2.5Y76/赤 5Y76/赤	赤、赤赤を少 量含む。黄 赤	赤	1/2		
259	立罎	土師器	(8.2)	2.2	(4.3)		胴部から内型して立ち上がり、口縁で外 反する。口縁部を下方につまみ上げる。	回転ナデ、胴部へ丸起り 回転ナデ	10Y70/4明黄赤 10Y72/4に赤い黄赤	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	赤	1/2		
260	立罎	土師器	(11.6)	(1.7)	(8.2)		平らな胴部から厚縁部に立ち上がる。内 外面に横輪。	ナデ ナデ	10Y70/4に赤い黄赤 5Y76/赤	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	赤	1/2	胎縁部 赤	
261	立罎	土師器	(11.2)	(7.9)			胴部から内型して立ち上がる。胴壁は厚 平。	回転ナデ、胴部へ丸起り ナデ	5Y76/赤 7.5Y77/赤	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	赤	1/8		
266	立罎	土師器	(13.6)	(2.3)			口縁は丸み突起で、胴部は丸く仕上げら れる。	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y76/赤 5Y74/赤	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	赤	1/2		
267	立罎	土師器	(14.2)	(2.5)			立ち上がりは正中内反し、胴縁は丸く仕 上げる。口縁部は扁平に平ぼる。	回転ナデ 回転ナデ	5B70/黄赤 5P75/黄赤	赤	赤	1/4	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	
268	立罎	土師器	(11.8)	(7.2)			胴部に内型する胴面定台形の輪高をそ 起す。	回転ナデ 回転ナデ	5B70/黄赤 5P75/黄赤	赤	赤	1/2	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	
269	立罎	土師器	(2.7)	(1.2)	(1.2)		胴部に外方に輪高し、胴部は厚平に固 められる。胴縁に横輪が立ち上がる。	回転ナデ 回転ナデ	5B70/黄赤 5Y76/黄赤	赤 黄赤	赤 黄赤	1/8		
270	立罎	土師器	(2.7)	(21.8)			下方に広がってフタ状になり、扁平な 内型する。下部には凹縁部に横輪が起 り、下方につまみ上げる。	回転ナデ 回転ナデ	5B70/黄赤 2.5G77/1紅オリーブ灰	赤	赤	1/4	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	
271	立罎	土師器	(3.5)	(10.0)			内型して胴部と立ち上がり、胴部は厚平に 固められ、下方につまみ上げる。	黄赤のため不明	5Y76/赤 5Y76/赤	赤、黄赤を少 量含む。黄 赤	赤	1/8		
272	立罎	土師器	(1.3)	(10.3)			下方に広がってフタ状になり、胴部を 下方につまみ上げる。	黄赤のため不明	7.5Y77/赤 7.5Y77/赤	赤 黄赤	赤 黄赤	1/2		

瓦葺き屋根1(8~9,16~29,38,72~77)

No.	瓦上 形状	種類	位置(mm)			向き等		色澤	凸部 位置	形状 破綻	その他留意
			長さ	幅	厚み	凸部	凹部				
8	SKI	原瓦	(20.5)	(1.0)	3.4	葺き目ナキのちナゲ	赤色、葺き目	3Y7/1原瓦 2.5Y7/2原瓦		やや短、2cm程度の幅差を含む。 土留瓦、点	行違
9	SKI	変瓦	(24.5)	30.5	1.8	葺き目ナキ、ナゲ	赤瓦、葺きの合わせ目	10Y7/1赤瓦 2.5Y7/4浅瓦		やや短、幅差を含む。 土留瓦、点	一枚持ち
16	SD1	字瓦	(18.0)	(7.8)	2.5~3.8	葺き目ナキ、ナゲ、 裏割	赤瓦、葺き目、葺きの 合わせ目	2.5Y7/4浅瓦 2.5Y7/3浅瓦		やや短 土留瓦、点	透風文
17	SD1	平瓦	(35.2)	(21.4)	2.8~4.1	葺き目ナキ、ナゲ (内側瓦)見目	赤色、ナゲ、葺き目コ (内側瓦)見目	10Y7/1浅瓦 2.5Y7/3浅瓦		やや短、0.5mm以下の凸部・幅差を多 く含む。 風色目、点	斜行破綻で、瓦葺 破綻後他瓦もみれ びによって瓦葺を 実行
18	SD1	変瓦	(18.0)	(8.3)	2.1	葺き目ナキ、ナゲ	赤色、葺き目、葺き目コ ト	5Y7/6浅 5Y7/7浅		やや短、幅差を含む。 土留瓦、点	
19	SD1	原瓦	(18.8)	(9.1)	1.5	葺き目ナキ、ナゲ	赤瓦、葺き目、葺きの 合わせ目、葺き目コ ト	2.5Y7/4浅瓦 5Y7/6浅		やや短、1mm程度の幅差・幅差を含む。 土留瓦、点	
20	SD1	原瓦	(10.7)	(5.3)	1.8	ナゲ	赤瓦、葺き目、葺き目コ ト	2.5Y7/4浅 5Y7/6浅		やや短、幅差を含む。 点	
21	SD1	原瓦	(12.0)	(8.5)	2.5	ナゲ	赤瓦、葺き目、葺き目 コト	2.5Y7/4浅瓦 2.5Y7/4浅瓦		やや短、幅差を含む。 土留瓦、点	
22	SD1	原瓦	(17.3)	(12.3)	1.9	葺き目ナキ、葺き目 コト	赤瓦、葺き目、葺きの 合わせ目	2.5Y7/3浅瓦 2.5Y7/3浅瓦		短、幅差を多く含む。 土留瓦、点	
23	SD1	原瓦	(19.6)	(11.3)	1.5	葺き目ナキ、ナゲ	赤瓦、葺き目	5Y7/6浅 5Y7/6浅		やや短、幅差を含む。 土留瓦、点	行違
24	SD1	変瓦	(16.8)	(20.0)	1.9	葺き目ナキのち葺き目 ナゲ	赤瓦	5Y7/1浅 2.5Y7/2浅		短、幅差を多く含む。 浅瓦、やや点	葺き目
25	SD1	変瓦	(19.3)	25.9	2.1	葺き目ナキ、葺き目 コト	赤瓦、葺き目、葺きの 合わせ目	2.5Y7/3浅瓦 2.5Y7/3浅瓦		短、幅差を含む。 土留瓦、点	一枚持ち
26	SD1	変瓦	(24.2)	(20.3)	2.7	葺き目ナキ、のち葺き 目ナゲ	赤瓦	5Y7/6浅 5Y7/6浅		やや短、幅差を含む。 土留瓦、点	
27	SD1	変瓦	(6.4)	30.4	2.0	葺き目ナキのち葺き目 ナゲ	赤瓦	2.5Y7/6浅 2.5Y7/6浅		短、幅差を多く含む。 土留瓦、点	一枚持ち
28	SD1	変瓦	(23.2)	(16.2)	1.6	葺き目ナキのち葺き目 ナゲ、葺き目	赤瓦、葺き目、葺き目 コト、葺き目	5Y7/1浅瓦 5Y7/1浅瓦		やや短、幅差を含む。 浅瓦、葺き目、点	一枚持ち
29	SD1	変瓦	(16.7)	(16.3)	2.9	葺き目ナキのち葺き目 ナゲ	赤瓦、葺き目	2.5Y7/1原瓦 2.5Y7/2浅		短、幅差を多く含む。 土留瓦、葺き目	ナゲキ葺き目、葺 き目
38	SD2	透風瓦	(7.6)	(3.6)	1.0	葺き目ナキ、葺き目 コト	赤瓦	10Y7/1原瓦 10Y7/1原瓦		葺 き目	
72	SD2	字瓦	4.5	(18.1)	2.8	葺き目ナキのち葺き目 ナゲ、葺き目	赤瓦、葺き目	2.5Y7/3浅瓦 2.5Y7/3浅瓦		やや短、幅差を含む。 土留瓦、点	透風文
73	SD2	平瓦	(20.2)	(3.8)	2.8	葺き目ナキのち葺き目 ナゲ、葺き目	赤瓦、ナゲ、葺き目 コト	2.5Y7/3浅瓦 5Y7/6浅瓦		短、1mm以下の凸部・幅差を多 く含む。 土留瓦、やや点	葺き目
74	SD2	字瓦	(10.6)	(11.1)	2.7	葺き目ナキのち葺き目 ナゲ、葺き目	赤瓦、ナゲ、葺きの 合わせ目	5Y7/6浅 5Y7/6浅		やや短、1mm以下の幅差を多 く含む。 浅瓦、葺き目	透風文
75	SD2	原瓦	39.4	16.1	2.0	葺き目ナキ、ナゲ	赤瓦、葺き目、葺き目 コト	2.5Y7/4浅 2.5Y7/6浅		やや短、幅差を含む。 土留瓦、点	行違
76	SD2	原瓦	38.6	(9.4)	2.0	葺き目ナゲ	赤瓦、葺きの 合わせ目	10Y7/6原瓦 10Y7/6原瓦		短、葺き目を含む。 土留瓦、点	行違
77	SD2	原瓦	39.3	16.8	2.2	葺き目ナキのち葺き目 ナゲ、葺き目	赤瓦、葺き目、ナゲ	10Y7/4浅瓦 10Y7/4浅瓦		やや短、0.5mm以下の幅差・幅差を含む。 浅瓦、葺き目	行違

五穀類表2 (78~95, 97~100)

No.	品名 品所	種類	品質(mm)			測定方法		品質	品質 項目	粒土 状況	その他備考
			長さ	幅	厚さ	凸部	凹部				
78	SD0	粟玉	(22.1)	14.9	1.7~2.8	横目ナナキ、横ナデ	春日、赤切り	10Y76/6明栗黄 10Y76/6明栗黄		容、1mm以下の長石・中砂を多く含む。 不良	白濁質
79	SD0	粟玉	(20.1)	17.4	1.9	横目ナナキのちナデ	春日、赤切り、縦目口	7.5Y74/1黄白 2.5Y76/1赤灰		やや赤、0.5mm以下の長石・細砂を含む。 良	
80	SD0	粟玉	(22.3)	(19.7)	2.2	ヘナナデ	春日、赤切り、縦目口	5B6/1黄灰 7.5Y76/1灰		容、1mm以下の長石・細砂を含む。 横目質、良	行粒質
81	SD0	女玉	(16.8)	(17.3)	2.7	横目ナナキ、赤切り取	赤切り	2.5Y7/6明栗黄 10Y76/6明栗黄		容、細一中砂を多く含む。 土層質、不良	
82	SD0	女玉	(17.3)	24.8	1.8	ヘナナデ	春日、赤のかわせ目	5Y6/1灰 5Y6/1灰		やや粗、細砂を含む。 横目質、良	
83	SD0	女玉	(16.5)	(22.9)	1.4	ナデ	春日、赤のかわせ目、 縦目口	10Y76/6黄種 7.5Y76/1黄種		やや赤、細砂を少量含む。 土層質、不良	
84	SD0	女玉	(21.3)	(16.7)	1.3	ナデ	春日、赤切り	2.5Y7/3黄種 2.5Y7/3黄種		やや赤、細砂を少量含む。 横目質、不良	
85	SD0	女玉	(40.4)	27.6	1.8	横目ナナキに高濃をかけた 格子ナナキ	春日	2.5Y7/2黄種 10Y76/1黄種		やや赤、細砂を含む。 土層質、不良	高濃口
86	SD0	女玉	39.6	37.5	1.5	高平に高濃をかけた格子 ナナキ、ナデ、ヘナ 横目質	春日、赤切り、粒土の 混合質	2.5Y7/2灰黄 2.5Y7/2灰黄		容 土層質、不良	高濃口
87	SD0	女玉	(23.3)	26.6	2.0	高濃をかけた格子ナナ キ	春日、横目質	7.5Y7/1灰白 2.5Y7/3黄種		赤、1mm以下の長石・中砂を多く含む。 横目質、良	高濃口
88	SD0	女玉	(18.7)	29.5	2.1	高濃をかけた格子ナナ キ	春日、縦目口	5P01/1暗青灰 10Y76/1灰白		赤、1mm以下の長石を少量含む。 横目質、良	高濃口
89	SD0	女玉	(14.2)	(15.9)	2.0	高濃をかけた格子ナナ キ	春日	2.5Y7/6明栗黄 2.5Y7/3黄種		やや赤、細一中砂を多く含む。 土層質、不良	高濃口
90	SD0	女玉	(9.9)	29.3	1.6	高濃をかけた格子ナナ キ	春日、赤のかわせ目	2.5Y7/2灰黄 3Y4/1灰		赤、横目を含む。 横目質、良	高濃口
91	SD0	女玉	(18.7)	24.8	1.7	ヘナ、縦目口	春日	10Y76/6明栗黄 2.5Y7/3黄種		赤、長石・中砂を多く含む。 土層質、良好	
92	SD0	女玉	38.5	(17.3)	2.1	横目ナナキ、横ナデ	春日、赤切り、横目質	10Y77/4に濃い黄種 10Y77/4に濃い黄種		やや粗、縦砂を含む。 横目質、やや不良	
93	SD0	女玉	35.9	27.0	2.5	横目ナナキ、カキメ	春日、赤切り	7.5Y73/1黄種 10Y73/1黄種		粗、やや赤を少量含む。 土層質、やや不良	横目口
94	SD0	女玉	(16.3)	(14.8)	1.8	横目ナナキ、ナデ	春日、ハナ、赤のかわ せ目	10Y77/1灰白 5Y7/2灰白		やや赤、細一中砂を含む。 横目質、良	高濃口
95	SD0	女玉	(9.1)	(20.3)	1.9	横目ナナキ、ナデ	春日、横目質	2.5Y7/4黄種 7.5Y7/1灰白		やや赤、細砂を多く含む。 土層質、不良	
97	五穀中2	半玉	(27.8)	29.9	2.2	三条の取り出し黄種、 2級、ナデ	春日、赤切り、横目質	5Y7/3灰白 5Y7/1灰白		やや赤、0.5mm以下の長石を少量含む。 横目質、良	横目口三盛質
98	五穀中2	半玉	(17.2)		3.2~4.8	横目ナナキ、横目質、 高濃質、ナデ	春日、ナデ	2.5Y7/1灰白 5Y6/1灰白		やや赤、1mm以下の長石、中砂、 細一中砂を多く含む。 横目質、良	横目口三盛質
99	五穀中2	半玉	(21.6)	(18.6)	2.2	三条の取り出し黄種、 2級、ナデ	春日、赤のかわせ目、 赤切り、ハナ、縦目口	10Y76/1灰白 10Y66/1黄種		やや赤、1mm以下の長石、細砂を多 く含む。 横目質、良	横目口三盛質
100	五穀中2	半玉	(12.2)	(10.7)	2.2	三条の取り出し黄種、 2級、ナデ	春日、赤切り	5B56/1黄種 5P68/1黄種		やや赤、1mm以下の長石、細砂を多 く含む。 横目質、良	横目口三盛質

互訳集3 (102~105, 107~109, 110~111, 113, 225~235)

No.	山上 原文	種類	長さ(cm)			構造等		巻部	凸部 凹部	新土 状況	その他備考
			長さ	幅	厚さ	凸部	凹部				
102	五島中3	古文	(20.7)	(30.7)	1.8	裏面を糊けた格子目ナ キ、ナデ	布目、布の合わせ目、 襷巻	2.5Y7/6両面 2.5Y7/4両面		古 土跡、やや古	真カッ
103	五島中3	古文	(20.4)	(20.4)	1.9	裏面を糊けた格子目 ナキ、ナデ	布目、襷巻	5Y76/6両 5Y76/6両		古 土跡、やや古	真カッ
104	五島中3	古文	(18.4)	30.8	1.8	裏面を糊けた格子目 ナキ、ナデ	布目	7.5Y76/4にAW+糊 10Y76/4にAW+糊		やや古、襷巻を含む。 土跡、やや古	真カッ
105	五島中3	古文	(21.6)	(23.2)	2.0	裏面を糊けた格子目 ナキ、ナデ	布目、襷巻、襷カッ ト	5B5/7甲 5B5/7甲		古、襷巻を多く含む。 襷巻、襷	一枚作り
107	五島中4	字瓦	(12.3)	(10.0)	2.4	二枚組、ナデ	布目、襷巻	10Y77/6両面 2.5Y77/6両面		やや古、襷巻を少し含む。 土跡、不目	裏面を二枚組
108	五島中4	字瓦	(8.0)	(18.8)	3.5	両面の糊り出し痕等、 襷巻、ナデ	布目、襷巻	2.5Y7/4両面 2.5Y7/4両面		やや古、0.5mm以下の長尺、襷巻を多 く含む。 土跡、不目	裏面を二枚組
109	五島中4	字瓦	(21.2)	(12.2)	1.5	縦ナデ	布目、襷カッ	2.5Y8/6両面 5Y8/2両		やや古、0.5mm程度の長尺、襷巻を多 く含む。 襷巻、不目	行巻
110	五島中6	字瓦	(21.5)	13.2	1.8	縦目ナキ	布目、縦目	NS/7 NS/7		やや古、襷巻を含む。 襷巻、不目	行巻
111	五島中7	古文	(16.8)	28.2	2.5	両面を糊けた格子目 ナキ、ナデ	布目、布目、襷巻、 襷カッ	10Y77/1以内 10Y77/1以内		襷 巻、襷	ナキまたは襷 長、真カッ
113	徳島3	書瓦	(19.2)	16.7	2.6	横目のちハシ	布目、襷カッ	2.5Y8/1以内 2.5Y8/2両面		古、中目を少し含む。 襷巻、不目	行巻
225	徳島3	字瓦	(24.2)	(23.1)	2.7	三条の裏面、襷巻、 裏面を糊けた格子目ナ キ、ナデ	布目、ナデ、襷巻	2.5Y7/1以内 7.5Y7/1以内		やや古、1mm以下の長尺、中一節 巻を多く含む。 襷巻、不目	裏面を三枚組 又は 襷巻を含む
226	徳島3	字瓦	(14.7)	(11.0)	2.2	三条の裏面、襷巻、 襷カッ	布目、布目、ナデ	7.5Y76/4両面 10Y76/4両面		やや古、1mm以下の長尺、ナデ、 襷巻を多く含む。 土跡、不目	裏面を二枚組
227	徳島3	字瓦	(8.1)	(7.6)	2.7	三条の裏面、襷巻、 ナデ	布目、襷巻	5Y6/1両 5B5/1両		やや古、0.5mm程度の長尺を含む。 襷巻、襷	三枚組 （厚さあり）
228	徳島3	字瓦	(7.2)	(8.0)	2.5	三条の裏面、襷巻、 ナデ	布目、ナデ	10Y77/4にAW+糊 10Y77/6両面		古、1mm以下の長尺、中目を多 く含む。 土跡、襷	裏面を二枚組
229	徳島3	字瓦	(7.9)	(7.9)	2.6	二枚組、ナデ	布目	2.5Y7/4両 2.5Y7/1両		やや古、1mm以下の長尺、中一節 巻を多く含む。 土跡、不目	裏面を二枚組
230	徳島3	字瓦	(8.6)	(11.2)	2.2	三条の裏面、襷巻、 襷カッ	布目、襷カッ	2.5Y8/4両 2.5Y7/4両		やや古、1mm以下の長尺、中目を多 く含む。 やや古	裏面を三枚組
231	徳島3	字瓦	(11.0)	(15.5)	1.9	三条の裏面、襷巻、 襷カッ	布目、襷巻	2.5Y7/2両 2.5Y7/2両		やや古、0.5mm以下の長尺、襷巻を 含む。 土跡、不目	裏面を三枚組
232	徳島3	字瓦	(11.2)	(7.4)	2.6	三条の裏面、襷巻、 襷カッ	布目、縦目、襷巻、 襷カッ	1B6/ 2.5Y7/1両		やや古、0.5mm以下の長尺、襷巻を 含む。 襷巻、不目	裏面を二枚組
233	徳島3	字瓦	(8.7)	(16.5)	4.2	縦目ナキ	布目、襷巻	5Y8/1以内 2.5Y8/2両		古、襷巻を少し含む。 襷巻、不目	裏面を二枚組
234	徳島3	字瓦	(7.1)	(12.8)	2.5	二枚組、ナデ、襷カッ ト	布目、襷巻	10Y78/6両面 10Y77/6両面		やや古、中一節を少し含む。 土跡、襷	裏面を二枚組
235	徳島3	書瓦	(22.6)	(9.4)	1.3	縦ナデ	布目	2.5Y7/1両 2.5Y8/2両		やや古、0.5mm程度の長尺、襷巻を多 く含む。 土跡、不目	行巻、 襷カッ

瓦根標準4 (236~251, 262~265)

No.	品名	種類	法量(cm)			設置等		仕様	凸部 凹部	積土 積灰	その他備考
			長さ	幅	厚さ	凸部	凹部				
226	包合器	両瓦	(19.6)	(19.2)	1.3	縦ハテ	布目	5Y6/2K 2.5Y7/2積灰		やや凸、0.1mm程度の長凸、隙砂を含む。 土留置、具	
227	包合器	両瓦	(16.4)	(13.6)	1.3~2.0	横ハテ、溝縁カット	布目、溝縁カット	5Y5/2Kオリーブ 5Y7/2深目		やや凸、縦一溝砂を含む。 隙置置、整	
228	包合器	両瓦	96.8	15.8	1.6	ナテ、凹凸両面に向け 穿孔、穿孔の工具兼瓦 蓋	布目	N7/深目 5Y7/27深目		密 積置置、具	行基置き、釘瓦
229	包合器	両瓦	(25.1)	(11.1)	2.2	横目ナテキ長ナテ	布目、糸切り、溝縁一 部カット、溝縁置	5Y7/4積 7.5Y8/4積置置		やや凸、縦一溝砂を多く含む。 隙置置、整	凹面にスス
240	包合器	両瓦	(20.6)	(8.5)	2.4	ナテ、ハテ、両面付凸 取縁付	布目、糸切り、ナテ	5Y7/2凸 1.9Y7/2積		やや凸、隙砂を含む。 土留置、やや不立	
241	包合器	女瓦	(19.0)	(13.9)	2.3	横目ナテキ、ナテ	布目	2.2Y8/2内 2.5Y8/3積置		密 工積置・不立	
242	包合器	女瓦	(29.0)	18.8	2.0	横目ナテキ	布目、糸切り	1.0Y8/1積置 1.0Y8/1積置		やや凸、溝砂を多く含む。 隙置置、具	
243	包合器	女瓦	(20.0)	(20.1)	3.0	縦方向ナテキ、ハテ	布目、縦溝置	5Y6/3積置 5Y6/4積置		凸、隙砂を多く含む。 縦置置、整	縁取り作り
244	包合器	女瓦	(13.6)	(22.4)	1.6	ナテ	布目	3Y5/深 1.6Y7/1積置		やや凸、隙砂・溝砂を含む。 凹置置、長目	
245	包合器	女瓦	(27.3)	12.0	2.1	縦目ナテキ、ナテ、 横縁・縦縁カット	布目、縦溝置、横縁・ 縦縁カット	5Y7/6積 7.5Y8/3に深い溝		やや凸、溝砂一溝砂を含む。 土留置、具目	
246	包合器	女瓦	(8.6)	29.1	2.0	縦目ナテキ、ナテ、 横縁カット	布目、糸切り、横溝置 積置置	5Y7/1積置置 3.2Y6/1積置		やや凸、隙砂を含む。 縦置置、長目	凹縁カット
247	包合器	女瓦	(29.2)	26.3	2.0	縁面を削げた格子目ナ テキ、ナテ、縦縁カット	布目、布のなかわけ正、 ハテ	5Y2/1積置 N7/深目		やや凸、0.3mm以下の長凸、溝一巾七 含む。 溝置置、やや不立	
248	包合器	女瓦	(24.7)	(18.3)	1.9	縁面を削げた格子目ナ テキ、縦ナテ	布目、縦溝置、布の縦、 縦縁カット	2.5Y7/4積置 2.1Y7/1積置		密 溝置置、不立	凹縁カット
249	包合器	女瓦	(18.7)	(18.2)	2.6	縁面を削げた格子目ナ テキ、縦縁カット	布目、溝縁置、糸切り、 縦縁カット	2.5Y6/2積置 7.5Y8/2積置		やや凸、 土留置、具目	アタキ置置に縦 瓦
250	包合器	女瓦	(18.2)	(18.0)	1.9	縁面を削げた格子目ナ テキ、ナテ	布目、縦溝置、ナテ	5Y7/2K内 2.5Y7/3積置		やや凸、1mm以下の長凸、中砂を含む。 縦置置、具	一枚作り、蓋瓦 瓦の可能性あり
251	包合器	女瓦	(22.7)	(17.8)	2.2	縁面を削げた格子目ナ テキ、ナテ	布目	N/深目 2.5Y7/3積置		やや凸、0.3mm以下の長凸、隙砂を含む。 土留置、不立	
262	S7K	宇瓦	(11.5)	(8.0)	1.9	三糸の縦り加し劣等、 ナテ、縦溝	布目、ナテ	2.5Y7/1オリーブ積 5Y7/1積置		やや凸、0.5mm以下の長凸、隙砂を多 く含む。 土留置、整	凹縁と正置置瓦
263	SDK	宇瓦	(12.0)	(8.5)	2.7	縦溝、ナテ	布目、ナテ、縦溝置	1.0Y8/4積置置 1.0Y8/6積置置		やや凸、隙砂を含む。 土留置、やや不立	凹縁と二置置瓦
264	SDK	壱瓦	(24.0)	(13.5)	1.7~2.9	縦溝多糸、縦臥瓦、ナ テ	布目ナテ、ナテ	1.0Y8/4に深い溝置 1.0Y7/4に深い溝置		溝3mm以下の長凸、お蓋、ナテード、 溝一溝砂を含む。 土留置、具	
265	S7K	女瓦	(17.5)	(20.0)	3.0	縦目ナテキ、ナテ	布目、ナテ	2.5Y7/2積置 2.9Y7/2積置		やや凸、縦砂を含む。 土留置、具	凹縁カット

互刺磨表5 (274~280)

No	品上 場所	種類	法線(mm)			調整年		色調	凸凹 形状	加工 状況	加工 状況	その他備考
			長さ	幅	厚さ	凸面	凹面					
274	試研	字瓦	(11.7)	(6.8)	3.2~4.4	新研子タタキ、タタキ、 面研削	専日、ナデ、精研直	5Y95/凸面 2.5Y7/凹面			概、1mm以下の長石、管仲、ナヤ と少く含む。	明後日並置拡大
275	試研	女瓦	(22.3)	26.0	2.4	電研を削げた角字タタキ、 ヘラ研削、保研 カット	専日、精研直、細研カ ット	5Y5/凸面 5Y5/凹面			やや紫、細研を含む。	精研直作り、ナ ヤ4面研削は粗研
276	試研	女瓦	(14.8)	29.3	2.8	鏡目タタキ、精研大さ くカット	専日、精研直、ナデ	5Y37/半研 3Y37/半研			やや紫、細研を含む。	
277	試研	女瓦	(32.7)	27.6	1.7	研平鏡目ナヤ、波研二 面、鏡目鏡目交互	専日、赤研り、両研直	5Y7/凸面 5Y7/凹面			管 研削直、直	拡大無文の字瓦 か
278	試研	男瓦	(23.8)	(8.8)	1.7	鏡目タタキ	専日、赤研り、研削一 部カット	2.5Y37/凸面 2.5Y37/凹面			やや紫、細研を含む。	
279	試研	男瓦	34.9	7.9	1.6	鏡目、赤研ナデ	専日、赤研一部カット	10Y6/凸 7.5Y6/凹			紫、0.5mm以下の長石、鏡研を少く含 む。	行研直、面研直 か
280	試研	男瓦	(36.6)	(12.8)	1.7	鏡目タタキ、ナデ	専日、赤研り、鏡目直	2.5Y37/凸面 2.5Y37/凹面			やや紫、細研を多く含む。	行研直

鏡瓦調整表

No	品上 場所	法線(mm)			瓦文形状		調整年		色調 (瓦凸面) (調整)	加工 状況	破法	備考
		長さ	幅	厚さ	凸面	凹面	凸面調整	凹面調整				
27	SD2			3.9	赤字八角 または八角	1+6	不明	不明	10R67/凸面 3Y7/凹面	やや紫、0.5mm以下の長 石、鏡研を多く含む。	調整直、直	多少欠損しているが、本 品の製法からみて、人達 とみられる。
96	瓦文 凸	(15.2)		2.5	赤字八角	1+5+9	波	粗研直	5Y97/凸面 7.5Y7/凹面	やや紫、1mm以下の長石、 管仲、中研研を多く含 む。	調整直、直	調整直、波研削は直、 219-220と両研削。
101	瓦文 凹	(13.0)	(1.9)	3.2	赤字八角	1+8	無文	ハテ	凸面ナデ 凹面赤研	やや紫、0.5mm前後の ナヤット・細研を含む。	七研直、直研	凹の調整は4面、管仲、 ナヤ・鏡子の一部を削 削。
114	調整直 凸	(16.0)		2.6	赤字八角	不明(波 研削直)	無文	ナデ	5Y96/凸面 3Y94/凹面	概、0.2mm以下の長石、 管仲、鏡研を多く含む。	調整直、直	
219	調整直 凹	15.8	(10.5)	2.3	赤字八角	1+5+9	波	調整直、 ナデ	凸面ナデ 凹面赤研	概、1mm以下の長石、中 研研を多く含む。	調整直、 中研直	調整直、96-220と両研 削。
220	調整直 凸	(15.1)		2.2	赤字八角	1+5+9	波	調整直、 ナデ	5Y97/凸面 3B6/凹面	概、1mm以下の長石、 管仲を多く含む。	調整直、直	調整直、96-219と両研 削。
221	調整直 凹	(12.3)	(16.5)	3.1	赤字八角	1+8	無文	ナデ	凸面ナデ 凹面赤研	管、0.2mm前後のナヤ ット・細研を多く含む。	調整直、直研	凹の調整は不明、管仲、 ナヤ・鏡子の一部を削 削。
222	調整直 凸			2.3	赤字八角 か。	不明	不明	ナデ	5Y7/凸面 3Y7/凹面	概、1mm以下の長石、 管仲を多く含む。	調整直、直 (小瓦)	
223	調整直 凹			4.5	赤字八角 か。	欠損	無文	不明	5Y7/凸面 3Y7/凹面	概、1mm以下の長石、 管仲、鏡一研研を多く含 む。	調整直、直	
224	調整直 凸	(18.0)		4.3	調整直 十六瓦	1+8	調整直	調整直、 ナデ	5Y96/凸面 5P94/凹面	凸、細研を削がれます。	調整直、直	調整直で凸面の2x101 と凹面、17と4ナヤット。
273	調整直 凹	(15.0)	(8.8)	(2.9)	赤字八角 か。	欠損	波	ナデ	凸面ナデ 凹面赤研	やや紫、0.5mm以下の長石 を含む。	調整直、直	

第3章 まとめ

第1節 遺構

今回の調査対象地は、秦泉寺廃寺の中心部分と推定される区域であったため、これまで不明であった伽藍配置の解明に繋がる成果が期待された。しかしながら、瓦類の出土量はこれまでの調査に比べて非常に多く、今回の調査対象地付近が寺院の中心部分であることはほぼ確実であると考えられるものの、礎石建物の痕跡は殆ど検出できず、検出した建物は全て掘立柱建物である。ただし、柱穴内に礎石と思われる石の置かれたものや、礎石の置かれていた痕跡と考えられる箇所が数箇所存在しており、このことから考えると、礎石建物が存在していたことも想定される。しかし、いずれも独立しており、並んで検出されたものはなかったため、今回は建物としては扱っていない。

また、建物の柱穴同士の切り合いはなく、遺物の出土もほとんどなかったため先後関係の判断は難しい。しかしながら、区画溝の可能性が高い溝跡が3条見つかっており、そこからは遺物が多く出土している。なお、これからの記述において、軸線の正方位からの偏角については南北棟建物及び南北溝については本来の数値を使用した。また、東西棟建物及び東西溝については軸線方向に直交する直線を想定し、その偏角を使用した。また、調査においては座標北を使用した。当該地における座標北と真北との偏角は約 $0^{\circ}1'18''$ であり、非常に小さいため、以下の記述では特に区別はしていない。

(1) 溝跡

各溝跡の正方位からの偏角は、西偏 $2^{\circ}\sim 4^{\circ}$ の範囲内で殆ど差はみられず、誤差の範囲内と考えられるため、検出状況から見て取ることのできる先後関係はSD3→SD2の切り合い関係のみである。両遺構の年代的な位置づけについてであるが、少なくとも8世紀中葉あたりまではSD3が存在していたものと考えられる。そして、それ以後何らかの理由によってある程度埋没した後にSD2が掘削されたものであろう。なお、この掘削については、完全に新規の掘削とみるよりは、こわれた溝の改修とみる方が妥当かもしれない。そして、8世紀後半以降、少なくとも9世紀前半にはSD2に切り替わったものと考えられる。

また、SD1については、SD2やSD3のような溝同士の切り合い関係がないために、その側面からの推定はできないが、掘立柱建物との切り合い関係から考えて、SD2とほぼ同時期若しくはやや後の時期に位置づけられよう。

(2) 掘立柱建物跡及び柵列

各建物からの出土遺物が少なく、遺物のみで時期を推定するのは難しいが、建物の検出状況や軸線方向及び規模等を総合してみると、時期順に以下の6つのグループに分けることができる。

A. SB2・SB3・SB8

やや大きめの建物で、今回の調査ではもっとも古い一群である。建物の軸線方向の正方位からの偏角は西偏1°ないし0°である。なお、SB2については調査区の北側に、SB3については調査区の南側に延びていると考えられる。また、SB8については他の2棟より若干時期が下り、Bのグループに近い可能性がある。

B. SB4・SB9

Aのグループの直後に位置づけられる建物である。Aのグループに比べてやや建物の規模が小さく、建物の軸線方向の正方位からの偏角は西偏3°及び東偏2°である。このうち、SB4はAにより近い時期、SB9はCにより近い時期と考えられる。

C. SB5・SB10・SB11

Bのグループの次の段階に属するグループである。Bのグループに比べて柱穴の大きさが更に小規模になり、建物の軸線方向の正方位からの偏角は3棟とも西偏1°である。この時期にはSD3は廃絶しており、SD2と交代していたものと考えられる。

D. SA1、SB1・SB7

Cのグループの次の段階に位置づけられるグループである。このうちSA1はSD1に平行していることから考えて、Cのグループにより近い可能性がある。建物の軸線方向の正方位からの偏角は西偏4°～7°である。この時期の終わりまで古代寺院が存続していたのかは微妙であり、すでに機能していなかった可能性もある。

E. SB6

今回の調査ではもっとも時期が下がると思われる段階に位置づけられる建物であり、時代的には中世もしくは、それに近い時期と考えられる建物である。建物の軸線方向の正方位からの偏角は西偏17°であり、大きく西偏している。

(3) 時代的な位置づけ

以上の5つのグループのこれまでの調査報告書の時期区分と比較しての位置づけは、現在のところ以下のように考えられる。初期の白鳳及び奈良時代前半の時期に重なる部分があり、その点で

大まかな時代区分	第3次・第4次調査	第5次調査	第6次調査
白鳳後半以前	なし	第1段階	なし
白鳳後半～奈良初頭	I期	第2段階	Aグループ
白鳳末～奈良中頃	II期		Bグループ
奈良後半～平安前半	III期前半		Cグループ
平安前半～平安中頃	III期後半		Dグループ
平安中頃～平安後半	IV期	第3段階	なし
平安後半～平安末	V期	第4段階	Eグループ

やや整合性に欠けるが現時点での一応の結論としておく。

なお、第1次・第2次調査において検出された遺構については、当該報告書においては特に時期区分はなされていないため、この表からは省いた。これについては、第4次調査の報告書において、大部分がV期以降の中世寺院の遺構である可能性が高いという推察がなされている。

第2節 遺物

(1)全般

今回の調査対象地は、秦泉寺廃寺の中心部分と推定される場所であった。遺構については、中心的な伽藍の検出には至らなかった。しかしながら、遺物については、これまでの調査に比べて寺院創建以前と考えられるものの出土割合が低く、7世紀後半～8世紀以降に位置づけられるものが多くを占めている。特に遺構出土の遺物においてこの傾向が顕著に認められる。これは、伽藍の検出には至らなかったものの、やはり当該地が寺院の中心区域であることを示していると考えられる。また、出土遺物の内に占める瓦の割合も非常に多く、このことからいっても、今回の対象地が寺院の中心区域の少なくとも一角を占めることは間違いないであろう。

(2)瓦

瓦については、原料胎土の産地(付欄2・3)、鎧瓦・宇瓦の型式(付欄1)について寄稿を受け、掲載した。重複を避けるためここでは簡単に述べるが、原料胎土は現土佐山田町の国分川支流において採取されたとみられる。また、現在知られている窯跡の分布等から考えて瓦の焼成は原料採取地付近で行われた可能性が高いが、消費地である秦泉寺付近で焼成された可能性もある。いずれにせよ、原料採取地から秦泉寺までは、外海を経由せずに国分川～久万川という河川経由で結ばれており、舟運の面から考えると比較的運搬の容易な地理関係にあったと思われる。また、創建瓦の年代については、従前よりやや時期が下って7世紀後半～8世紀初頭であるとの結論が出されている。また、讃岐地方の普通寺出土瓦と同范と見られる鎧瓦・宇瓦が出土したことも今次調査における特筆点である。

(3) 須恵器

ここでは、今回の調査において特徴的なことについて述べておきたい。

まず、今時調査出土遺物の特徴として挙げられるのは鉄鉢型の須恵器鉢の出土割合が比較的に高いということである。これまでの調査で報告されているのは第二次調査出土の一点のみであり、他の調査では鉢類の報告はあるものの、口縁が内傾しているものはみられない。口径は12cm程度から20cmを超えるものまで、種類は多い。完形のものはないが、ほぼ、陶邑Ⅳ型式の内に分類できると考えられる。この鉄鉢型須恵器鉢の用途については、形態から類推される用途である托鉢以外の目的に使用された可能性もありえようが、少なくとも仏教に関連の深い遺物であるということとはほぼ間違いないと思われる。そうであるならば、この付近が寺院跡であることや、寺院として活発に活動していたことを示す遺物としてとらえることができよう。

須恵器蓋坏類については、陶邑のⅡ型式以前のもの割合が少ないことが大きな特徴として挙げられる。包含層出土の遺物については、Ⅱ型式の遺物も一定の割合で出土している。しかしながら、溝跡を含めた遺構出土の遺物については、Ⅱ型式の遺物も散見されるものの、坏と身の逆転するⅢ型式以降の時期の遺物が大半を占める。これについては、土佐においては中央から遠方に位置するために、中央での型式変化がダイレクトに反映せず、やや遅れて変化が起こるとこれまで考えられてきた。これは、秦泉寺廃寺のみの傾向ではなく、他の遺跡における出土傾向も同様である。そのため、Ⅱ型式からⅢ型式への型式変化が完全ではなく、Ⅱ型式の蓋坏が遅くまで残存するという認識になっていたが、今時調査における蓋坏の出土傾向は、このような考え方とは必ずしも一致しない。寺域の中心部分と考えられる区域でのこのような出土傾向(鉄鉢も含めて)から導き出される結論は、大きく分けて次の以下のようなものとなる。

まず第一の結論としては、第一次・第二次調査において推定されたように秦泉寺廃寺の創建時期はやはり奈良時代とするもの。これは、第三次調査や本次調査において出土した鏡瓦の型式との関係において、やや整合性にかける。

二番目に導き出せる結論は鏡瓦の型式を重視したもので、やはり寺院の創建時期は白鳳期であるとし、蓋坏の型式変化のタイムラグが、少なくとも秦泉寺廃寺においてはあまり小さくなく、中央の型式変化が比較的ダイレクトに伝わったとするもの。これは、これまでの考え方を大きく変更するものであり、今回の調査結果のみで結論を導き出すのは性急に過ぎるかもしれない。

第三の結論としては、上記の二つの折衷案で、寺院の創建時期を白鳳期とするが、創建初期にはあまり活動は活発でなく、奈良時代になってようやく寺院としての活動が活発に行われるようになったというもの。

寺院の建造開始から完成までに多くの時日を要する例が多い点等を考慮に入れて考えるならば、第三の結論がもっとも蓋然性が高いと思われる。しかしながら、寺院創建(特に土佐で最古の寺院である可能性が高い)という大事業を行うに至った強い動機というものを含めに入れて考えるならば、創建時から寺院としての活動は、ある程度活発に行われていた可能性はある。従って、少なくとも秦泉寺廃寺においては、寺院創建後に使用されていた須恵器については陶邑のⅢ型式以降

のものが大部分であり、Ⅱ型式以前の遺物については基本的には混入であり、寺院創建以前に使用されていたものであるとの一応の見解をとっておく。この見解は、付編1において示された創建瓦の年代観(7世紀後葉～8世紀初頭)を考えに入れるならば、従来の見解との相違は縮まると考えられる。

ここまでの見解から、包含層や遺構において出土したⅡ型式に分類される遺物は主として寺院創建以前の集落の存在を示すものであり、Ⅲ型式以降に分類される遺物は寺院創建後の活動を示すものであるとして捉えることができる。

(4) 土師器

土師器類については、須恵器と形態が同じで土師質焼成のものが一定量みられることが第一の特徴である。これについては、これまでの調査における出土傾向との比較はしづらいが、今回の出土量からみて単に焼成不良のものばかりではなく、特に蓋坏についてはある程度意図したものも多く存在するとみた方がよいと思われる。このような遺物については、秦泉寺廃寺に限られたものではなく、先行する研究や報告等も多くあり、様々な呼称があるが、今回の報告では特に須恵系の土師器としては分類せず、主に土師質焼成の須恵器として分類した。

次に、坏・皿あるいはそれらの蓋類に、赤色塗彩若しくは化粧土(今回の報告では赤色塗彩・観察表では赤彩で統一した)の痕跡のみられるものが多くみられることが挙げられる。これについては、直接寺院と結びつくものではないが、一般の集落よりは寺院等のある程度公的な施設の存在を示すと考えても間違いではないと考えられる。また、これまでの他遺跡での出土例をみても、このことはほぼ裏付けられそうである。また、薄手の丁寧な作りの土師器についても同様のことがいえそうである。

第三に挙げられる出土傾向の特徴としては、煤が付着し、灯明皿としての使用が考えられる坏・皿類が一定量存在することである。これは第二の特徴として挙げた赤色塗彩(化粧土)の土器ほど、即座に寺院と結びつくものとはいえないが、一般集落と考えるよりは寺院等のある程度公的な施設の存在を示す傍証としてもよいと思われる。

第3節 終わりに

今回のまとめでは、検出遺構については大まかな時代区分を試みた。完全なものとは言い難いが現時点での一応の結論としておく。

また、第4次調査報告書において、第1次・第2次調査で検出された講堂・金堂等の遺構が後の時代のものではないかという提起がなされた。そのため、極端に言えば、現在のところでは古代寺院の存在を示す基壇、伽藍等の確実な遺構は見つかっていないことになり、特に創建時期が白鳳時代にさかのぼるといふ根拠は鏡瓦の存在によるのみである。今回の調査においても、建物跡については一応の時代区分を試みたとはいえ、遺構からの出土遺物は少なく、完全なものとは言

い難い。その中で、溝跡については一定量の出土遺物も存在し、また、SD2・SD3というほぼ同一方向の二本の溝が重なって検出されたことや、そのうちのSD3底面から出土した遺物等を総合して考えるならば、寺院の創建された時期が白鳳期にまで遡るかどうかは確実ではないにしても、少なくとも奈良時代前半には寺院の区画溝として、SD3が存在していたことは、まず間違いないと考えてよいであろう。

上記のことと関連し、本報告書のまとめにおける遺物についての記述は、古代寺院が確実に存在したことを示す状況証拠となりうるような、特徴的な遺物の出土傾向についての例示を中心に述べてきた。これによってもなお、秦泉寺廃寺の創建された時期が白鳳期にまで遡るという証拠については、鏡瓦の型式に頼らなければならないという状況は変わらない。しかしながら、仮に鏡瓦の存在を抜きにして考えたとしても、少なくとも8世紀前半の奈良時代はじめ頃に寺院が存在していたことは、ほぼ間違いないものと考えてよいと思われる。

参考文献

- 川村源七他「長宗我部地検帳土佐郡上」(高知県立図書館、1957)
田辺昭三「陶器古窯址群Ⅰ」平安学園創立九十周年記念研究論集第10号(平安学園、1966)
廣田典夫・岡本健児「秦泉寺廃寺-第1次・第2次調査」(高知市教育委員会、1977)
中村浩他「陶器Ⅲ」(大阪府教育委員会、1978)
小笠原好彦他「来住廃寺」松山市文化財調査報告書第12集(松山市教育委員会、1979)
稲垣晋也「飛鳥白鳳の古瓦鉢刷碗」奈良国立博物館編(東京美術、1982)
山本哲也・龍岡一之「秦泉寺廃寺跡-第3次調査」高知市文化財調査報告書第5集(高知市教育委員会、1984)
森郁夫「瓦」考古学ライブラリー43(ニュー・サイエンス社、1986)
橋本久和「中世土器研究序論」(真陽社、1992)
東京造形大学宇津賀校地内埋蔵文化財発掘調査団「南多摩窯跡群」(1992)
古代の土器研究会「古代の土器1 都城の土器集成」(真陽社、1992)
古代の土器研究会「古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ」(真陽社、1993)
古代の土器研究会「古代の土器研究-律令的土器研究の西東・2須恵器-I」(1993)
中村浩「須恵器」考古学ライブラリー5(ニュー・サイエンス社、1993)
古代の土器研究会「古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ」(真陽社、1994)
廣田佳久「南四国の須恵器-周辺地域における須恵器の変遷」王朝の考古学(雄山閣出版、1994)
山本哲也・吉成承三「秦泉寺廃寺発掘調査報告書」高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集(高知県埋蔵文化財センター、1994)
中世土器研究会「概説中世の土器-陶磁器」(真陽社、1995)
中村浩「須恵器集成図録第1巻近畿編1」(雄山閣、1995)
川畑聡「讃岐の古瓦展」(高松市歴史資料館、1996)
上原真人「瓦を読む」歴史発掘第11巻(講談社、1997)
池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相、下の坪遺跡の成果を中心として」下の坪遺跡Ⅱ、野市町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集(野市町教育委員会、1998)
蓮本和博「軒平瓦に見る讃岐の白鳳寺院」(財)香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要7(香川県埋蔵文化財調査センター、1999)
池澤俊幸「土佐から見た平安時代の土器」中近世土器の基礎研究XV(日本中世土器研究会、2000)
田上浩「秦泉寺廃寺(第5次調査)-附高知城北側外堀石垣の調査」高知市文化財調査報告書第25集(高知市教育委員会、2002)
廣田佳久・門田透・平島文徳「コゴロ 遺跡群」奈良半利町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集(奈良半利町教育委員会、2003)

付 編

付編目次

付編1 秦泉寺廃寺出土の軒瓦～様式の共有に見る同族意識

1. はじめに	79
2. 形態分類	79
3. 秦泉寺式軒瓦	84
4. 秦泉寺式軒瓦の類例とその文様構成の検討	86
5. 他の地域の顔面施文軒平瓦と建立氏族	89
6. 秦泉寺式軒瓦の成立	93
7. 秦泉寺廃寺出土のZN101・ZN203A	94
8. 秦泉寺を取り巻く豪族間のネットワーク	95
9. まとめ	97

図版・表

第1図 秦泉寺廃寺出土軒丸瓦の分類	80
第2図 秦泉寺廃寺出土軒平瓦の分類(1)	82
第3図 秦泉寺廃寺出土軒平瓦の分類(2)	83
第4図 白鳳期主要寺院の軒丸断面図	85
第5図 川原寺式(左)、法隆寺式(中)、藤原宮式(右)軒瓦	85
第7図 立善寺A(左)、立善寺B(中)、山田寺式(右)軒丸瓦	87
第8図 立善寺出土軒瓦	88
第9図 吉備寺式軒瓦	89
第10図 播磨の顔面施文軒平瓦	90
第11図 南山城の顔面施文軒平瓦	92
第12図 極楽寺出土軒平瓦	93
第13図 秦泉寺廃寺出土ZN203A	94
第14図 秦泉寺、立善寺、善通寺の位置	95
第1表 秦泉寺顔面施文軒平瓦分類・計測表	86
第6図 第1表の凡例	
第2表 南山城の古代寺院と造営氏族	91

付編2 秦泉寺廃寺出土瓦類の原料土種と採掘地層の同定に関する調査 I

I 調査の概要

1. 調査の目的	101
2. 調査の期間と方法	101
3. 瓦胎の分類と主流瓦胎型の抽出	101
4. 瓦胎原料七種の特定と、土壌堆積環境の判出し	102
5. 同定基準瓦の条件設定と選定	102
6. 瓦胎に認め難い遺跡近辺の沖積破屑物の影響	103
7. 同定基準試料瓦片に関する原料土産状の判出し	104
8. 県内広域調査の結果	106

II 土生川中流域の黒色土

1. 土生川流域の地形と地質	107
2. 土生川の現況	107

3. 土壌試料TUE-0101採取点の地層	108
4. 土生川黒色土に於ける粘土富化の環境条件	108
Ⅲ “陶村”の構造及び秦泉寺廃寺跡の遺跡性格に関する推論	
1. 新改川水系の古窯址群立地と土生川中～下流域の古窯址空白地帯	109
2. 密接する土生川黒色土と“陶村”の地理的關係について	110
3. 秦泉寺廃寺跡の性格問題と当同定調査の結果	112

図版・表

図版1. 同定瓦胎・土壌セットの組織と土壌採取点の地層	113
1. 同定基準瓦胎JT-J001の凸面に残る繩窓叩目	
2. 同定基準瓦胎JT-J001の非焼結ゾル状含水組織	
3. 同定土壌試料TUE-0101採取地点の地層-土生川左岸	
4. 同定土壌試料TUE-0101の組織-土生川左岸	
5. 同定土壌試料TUE-0101採取地点の地層断面図-土生川左岸側方便食崖	
図版2. 新改川流域の窯址分布と土生川辺黒色土層の露頭地点	114

付編3 秦泉寺廃寺出土瓦類の原料土種と採掘地層の同定に関する調査Ⅱ

はじめに	115
1. 試料	115
2. 分析方法	116
3. 結果	117
4. 考察	119

図版・表

図1 重鉱物組成	117
図2 火山ガラスの屈折率	118
表1 重鉱物分析結果	117
表2 薄片観察結果	118
表3 蛍光X線分析結果(化学組成)	118
図版1 重鉱物・テフラ・薄片	121
1. JT-J001(瓦破片)中の鉱物	2. TUE-0101(黒灰色粘土)中の重鉱物
3. TUE-0101(黒灰色粘土)中のテフラ	4. JT-001(瓦破片)中の薄片
5. TUE-0101(黒灰色粘土)薄片	

付編1 秦泉寺廃寺出土の軒瓦～様式の共有に見る同族意識～

松田 重治

1. はじめに

高知平野にもいくつかの古代寺院が存在したが、とりわけ秦泉寺廃寺はそれらの中でも最古段階の寺院と考えられてきた。また地名から渡来系氏族である秦氏の氏寺であったとの見解が有力で、建立年代は出土した軒丸瓦の型式から白鳳時代とされてきた。しかしながら資料上の制約もあって、それ以上に検証されていないのが現状である。

一方、今回の発掘調査では香川県普通寺市に所在する仲村廃寺と普通寺、丸亀市の田村廃寺(以下、総称して「普通寺」という)の軒瓦と同范関係を有する細素弁十六弁蓮華文軒丸瓦(ZN101)と扁行唐草文軒平瓦(ZN203A)が各1点(第1図-12, 第3図-33)出土している。

ZN101やZN203Aなどの型式名は、『讃岐の古瓦展』(高松市歴史資料館 1996)で用いられているものであり、本稿でもこれに準じて記述していくことにする。

本稿では、①創建期とされる軒瓦の系譜をたどる手段として、特徴的な軒平瓦に注目し、その製作技法を含めた類似点と、それに組合う軒丸瓦とのセット関係を調べ、また②普通寺のZN101、ZN203Aと、それらと同范である秦泉寺廃寺出土のZN101、ZN203Aに見られる相違点からその背景にあるものを搬入された時期と考え、そこから考えうる氏族間のネットワークについての考察を試みる。本稿では以上のことを中心に、秦泉寺廃寺を巡るこれらの問題に幾許かの検討が加えられればと考えている。

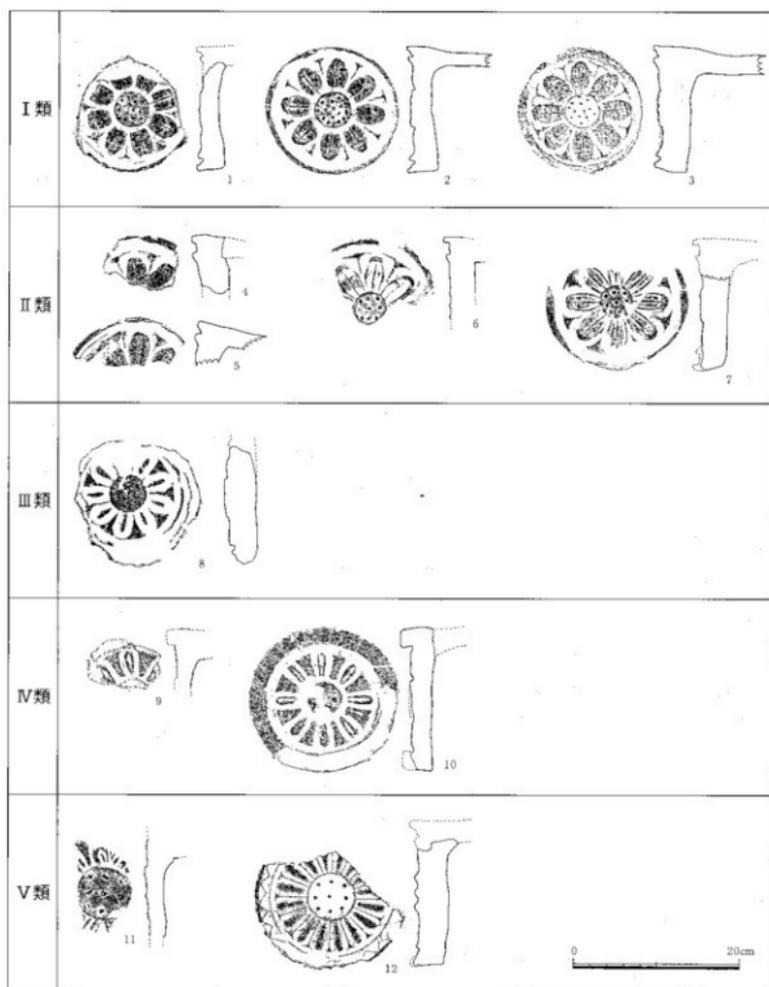
なお、本稿中の寺名の表記について、寺そのものを指す場合には「秦泉寺」など寺名で、寺跡を表す場合には「秦泉寺廃寺」というように遺跡名で表記することにする。また本文中では瓦の表記に鎧瓦、宇瓦、男瓦、女瓦の名称が用いられているが、本稿では軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の名称を用いて執筆する。この点については執筆者相互の呼称の問題であり、あえて統一は図っていない。

2. 形態分類

これまでの6度に亘る発掘調査を通じて、秦泉寺廃寺では軒丸瓦14点、軒平瓦35点が出土している。これらを分類したのが第1～3図である。

軒丸瓦(第1図)

軒丸瓦は同一系譜上にあると見られるⅠ～Ⅳ類(秦泉寺系)と秦泉寺に搬入されたと思われるⅤ類の5つに分類される。秦泉寺系の特徴は素文の周縁と有稜線素弁蓮華文である。



第1図 秦泉寺廃寺出土軒瓦瓦の分類²¹⁾ (S=1/6)

I類については、掲載した3点の他、本書第37図220に掲載されている1点がある。詳細は後述するが、これらは同范品とみなしてよい。

II類には須恵質(4, 5)と土師質(6, 7)のものがある。須恵質のものについては、花卉と周縁が現存するのみである。この2点は周縁の断面形状が異なるが、花卉の様相は類似している。土師質のものは掲載した2点の他、本書第36図106の1点があり、これらは蓮子や花卉の配置から同范品とみなされる。直径16cm程度のI類に比べ、II類は約17cm程度とやや大型で、弁端は反転するものの全体に平面的であり、周縁は素文で内側に段を持たないなどの特徴から、I類の退化型式であると考えられる。間弁の両端は隣合う間弁の両端に連続し、それはあたかも一周する凸線の途中に8つの間弁が配置されている風である。中房は小さく、蓮子は「1+8」の配置を採る。土師質のものはいずれも赤橙色系の色調を呈するが、秦泉寺廃寺においてこの色調を呈するものが他にない点は興味深い。

III類は外区に凸帯状の圏線が巡ることや花卉が9葉(現存8葉)であることから秦泉寺系とは区別し、外系であるV類とすることもできる。これを秦泉寺系と考えた場合、外区に巡る圏線は連続する間弁の名残と考えられる。また花卉を表現した線の幅が広く、中央に残った直径方向の細長い島の横断面が山形を成すことから、この島を稜線の表現と見ることもできる。III類は1点が出土するのみで周縁も不明であるが、稜を表現したと見られる花卉から、ここでは秦泉寺系と考えておく。ただし、軒丸瓦II類の後続型式としてIII類を想定することはできず、その間には何型式かの存在を考えなければならぬと思われる。

IV類は細弁化しているものの8葉で、稜を沈線で表現する。周縁は素文で幅が広い。中房は剥離しており、蓮子の配置は不明である。IV類は2点出土しているが、9が細片であるため、同范如何については不明である。

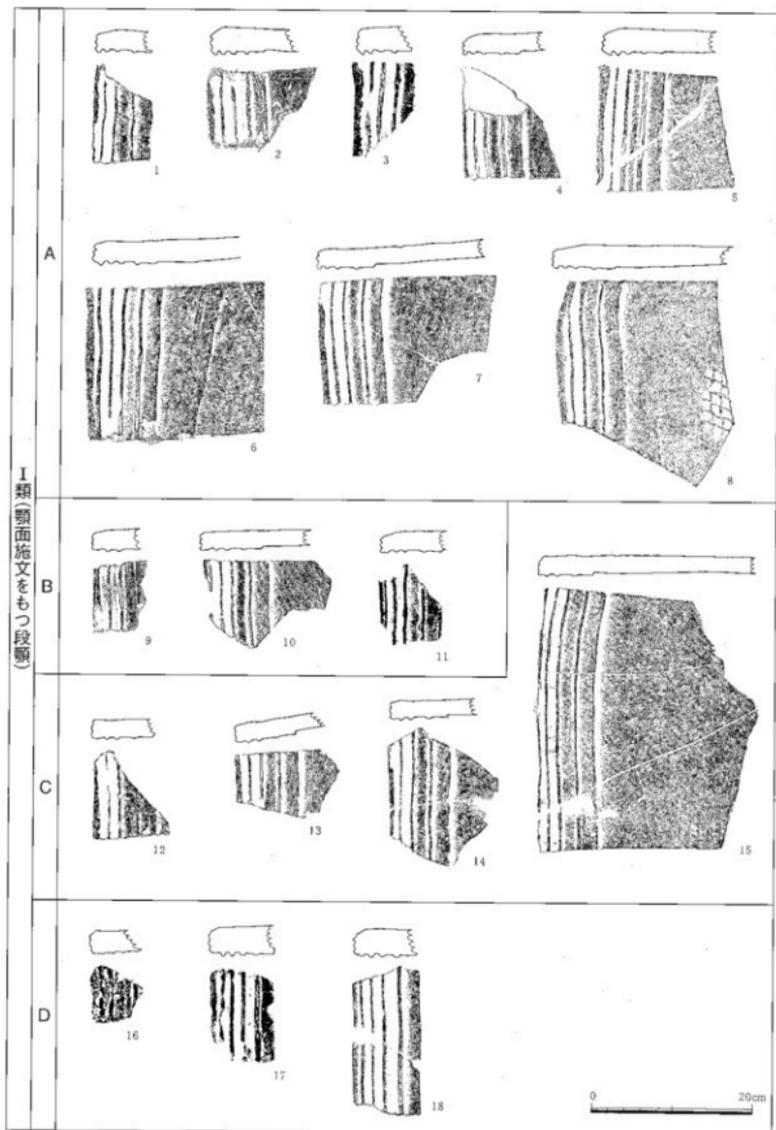
V類としたもののうち、11は南国市野中廃寺²³と同范で、平安時代前半期に位置づけられる忍冬文軒丸瓦であり、12は香川県普通寺市に所在する普通寺出土の細葉弁十六葉蓮華文(ZN101)の同范品である^{23, 24}。

軒平瓦(第2～3図)

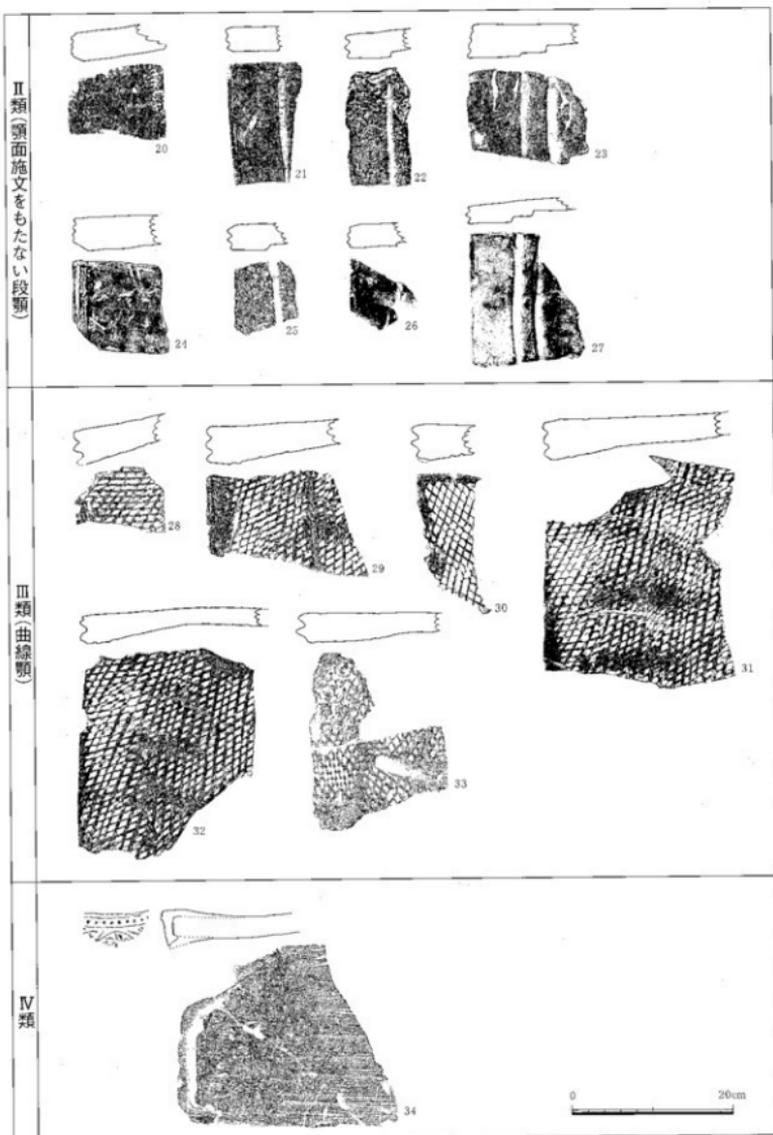
軒平瓦は瓦当に重弧文を採用するI～III類(秦泉寺系)と秦泉寺に搬入されたと見られるIV類の5つに分類される。

I類は顎面施文を有する一群で、顎面の凸帯が段顎と同時に引き出されている。瓦当下部の形状によりさらにA～Dの4つに細分される。瓦当下部の構造については、下垂するもの(A～C)としないもの(D)がある。また前者は瓦当下面の形状の違いであり、顎面に対してA:斜行するもの、B:平行なもの、C:丸いものである。これらについても時期差を想定できるかもしれないが、顎と瓦当の位置関係による差異と見られることもできる。

II類は段顎であるが顎面施文を持たない一群である。22～25は顎幅より26, 27と同様の二段顎である可能性が高いと思われるが、20, 21は他に比して顎幅が広く一段顎であるかもしれない。両者ともに瓦当には三重弧文と四重弧文がみられる。なお、二段顎の成形技法は、27を見れば型挽に



第2図 秦泉寺鹿寺出土軒平瓦の分類(1) (S=1/6)



第3図 秦泉寺鹿寺出土軒平瓦の分類(2) (S=1/6)

より二段同時に引き出していることが窺える。

Ⅲ類は曲線顎を有する一群である。顎面に平坦面を有するものとそうでないものがあるが、いずれも凸面には斜格子文を採用している。一般の平瓦には凸面の成形に縄タキを多用していることから、軒平瓦の成形にあえて斜格子タキを採用しているとしてよいと思われる²³。瓦当は二重弧文と三重弧文がみられるが、この違いは32を見れば、顎の厚さに規制されたものと解することができる。

Ⅳ類は34の1点のみであるが、12と同様、善通寺出土のZN203Aと同範である。

これらのうち、冒頭で述べた創建期のものと考えられる軒瓦は、軒丸瓦・軒平瓦ともにⅠ類であり、本稿ではこれを便宜的に「秦泉寺式」と呼称して進めていく。

3. 秦泉寺式軒瓦

軒丸瓦(第1図)

文様構成

瓦当の文様は従来、有稜線素弁八葉蓮華文で百済末期様式とされてきたものである。花卉内には花卉を区画するように小さな凸線が巡ることから、これは重弁を意識したものかもしれない。花卉の形状はいわゆる「てりむくり」が大きく、花卉の中央には直径方向に明瞭な稜を凸線で表現する。花卉の基部は下端を隣接する花卉と共有し、間弁の先端は花卉の1/2程度で収束している。間弁の形状は辺の丸い三角錐状であるが、内側の2面に爪形の段を有する。周縁は素文であるが、内側に段を作り出している。中房は低く平面的で、蓮子の数は「13」である。その配列は整然としていないが、「1+5+7」と見ることもできる。焼成は須恵質のみである。

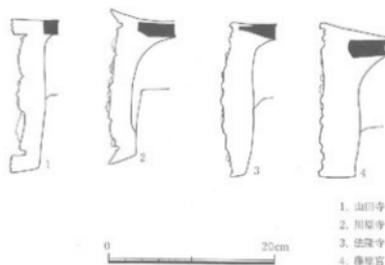
成形技法

丸瓦の成形については、それを観察できる個体は2点(2,3)である。凸面は表面が一部を残して磨減しているが、タキの痕跡は見出せない。おそらくタキ目をナデで消しているものと思われる。凹面には細かい布目が残っている。

丸瓦と瓦当の接合位置については、丸瓦は瓦当上端よりもやや低い位置につけられている。接合部は断面の平坦部が瓦当、丸瓦と考えられるので、粘土の補足は少量で斜面の部分のみに補填されたと推測される。

丸瓦の位置関係は古いものほど丸瓦が高い位置にあり、瓦当と丸瓦のなす角度は直角に近い。新しいものは丸瓦の位置が下がり、上面が反るとともに、瓦当径が大きくなる。

以上のことを踏まえた上で九瓦の接合位置を第4図に秦泉寺式軒丸瓦を当てはめれば川原寺式あるいは法隆寺式と藤原宮式の中間とみなすことができる²⁷。さらに、蓮子の配置「1+5+7」を川原寺式の影響と見れば秦泉寺の創建にはおのずと7世紀後葉～末頃という年代が与えられる。ただし蓮子の配置が大きく崩れていることを加味すれば、上限は7世紀末に近くなると思われる。年代を設定するには根拠に乏しい感も拭えないが、ここでは7世紀後葉から幅を持たせる意味で8世紀初頭までと考えておく。



第4図 白鳳期主要寺院の軒丸断面図²⁸(S=1/6)



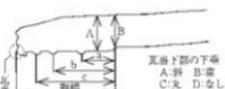
第5図 川原寺式(左)、法隆寺式(中)、藤原宮式(右)軒瓦
(写真は奈良文化財研究所蔵、法隆寺式は法隆寺許可済)

軒平瓦(第2, 6図, 第1表)

創建期のもと考えられる軒平瓦の文様構成は、瓦当に三重弧文を採用し、頸には凸帯が巡らされている。焼成には土師質のものも須恵質のものがある。焼成の差を年代差と捉えることも可能ではあるが、文様や成形技法からそれを想定することは困難である。また先述のように土師質の軒丸瓦も数点存在し、これは創建期のものに後出すると思われるが、色調が赤橙色を呈することから両者のセット関係は認めがたい。従って須恵質、土師質の両者ともに秦泉寺式とみなすことにする。

瓦当の三重弧文は型挽きである。また頸部に文様を持つ軒平瓦は「頸部施文軒平瓦」あるいは「頸面施文軒平瓦」と呼ばれるもので²⁹、秦泉寺麿寺の場合には、頸面に3～4条の凸帯が挽型によって挽き出されている。特徴としては、頸が凸帯とともに挽き出されている点である。凸帯とともに挽き出された頸は、小さい段を有する程度であるが、段頸として捉えておく。それぞれの頸面に

施される凸帯の間隔については、第1表に示すように若干のばらつきがあるが、比率で見ると差はそれほど大きくない。使用した挽型については不明な点も多いが、軒丸瓦の范に比べて似たような挽型を作りやすいことは事実であろう。額面施文にみられる差異を凸帯や顎を挽き出した後の調整の差とみるか、異なった挽型を使用したとみるか、その見方は様々であろうが、凸帯や顎の間隔には一定の決まりがあったと解することもできる。



第6図 第1表の凡例

図録番号	調査年次	報告者	遺構	瓦の形状	瓦の下部	瓦の型													
						幅	厚	A	B	A:B	厚	a	b	b/a	c	c-b	d	d-c	幅間(s)
1	2000	土師賢	聖徳寺三尊像	A	3条	2.5	-	7.1	2.3	4.4	2.1	5.7	1.3					7.1	1:1.9:2.5
2	2000	土師賢	聖徳寺三尊像	A	3条	3.0	2.7	0.3	6.8	2.3	4.1	1.8	5.3	1.2				6.8	1:1.8:2.3
3	第12次	阿部正志 藤下明之	聖徳寺三尊像	A	3条	3.0	-	-	6.8	2.3	4.0	1.7	5.2	1.2					1:1.7:2.3
4	2000	藤原真	聖徳寺三尊像	A	3条	2.4	2.2	0.2	7.3	2.6	4.6	2.0	6.1	1.5				7.3	1:1.8:2.6
5	2000	土師賢	聖徳寺三尊像	A	3条	2.8	2.7	0.1	7.9	2.5	4.6	2.1	5.8	1.2				7.9	1:1.8:2.3
6	2000	土師賢	聖徳寺三尊像	A	4条	2.5	2.1	0.4	9.1	2.5	4.1	1.9	5.8	1.4	7.3	1.5	1.8	1:1.8:2.2:2.9	
7	2000	藤原真	聖徳寺三尊像	A	3条	2.2	2.2	0.0	7.4	2.8	4.9	2.3	6.2	1.3				7.4	1:1.9:2.4
8	2000	藤原真	聖徳寺三尊像	A	3条	2.7	2.2	0.5	8.0	2.8	3.1	2.3	6.4	1.3				8.0	1:1.8:2.5
9	2000	阿部正志	聖徳寺三尊像	B	3条	2.6	-	-	-	-	-	2.7	-	1.3					
10	2000	阿部正志	聖徳寺三尊像	B	3条	2.2	2.9	0.7	7.8	2.4	4.8	2.4	5.9	1.1					1:2:2.5
11	第12次	阿部正志 藤下明之	聖徳寺三尊像	B	3条	2.6	2.4	0.2	8.1	2.5	5.0	2.5	6.1	1.1					
12	2000	土師賢	聖徳寺三尊像	C	3条	2.2	-	-	7.9	2.6	4.7	2.1	6.1	1.6					1:1.8:2.3
13	2000	藤原真	聖徳寺三尊像	C	3条	2.3	1.8	0.5	7.2	2.5	4.7	2.3	6.2	1.5					1:1.9:2.3
14	2000	土師賢	聖徳寺三尊像	C	2条	2.9	1.9	1.0	7.6	2.5	4.7	2.2	5.9	1.2					1:1.9:2.4
15	2000	藤原真	聖徳寺三尊像	C	3条	2.1	2.2	0.1	6.8	2.4	4.7	2.3	6.0	1.3					1:2:2.5
16	第9次	藤下明之	聖徳寺三尊像	D	2.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
17	第3次	阿部正志 藤下明之	聖徳寺三尊像	D	4条	3.3	2.8	0.5	8.2	3.3	4.1	1.8	5.4	1.3	6.8	1.3	1.7	1:1.8:2.5:2.8	
18	2000	一宮直	聖徳寺三尊像	D	4条	3.3	2.9	0.4	7.9	2.8	4.3	1.9	5.8	1.3	7.0	1.2	0.9	1:1.7:2.2:2.7	
19	2000	一宮直	聖徳寺三尊像	小形	3条	3.1	3.1	0.0	7.9	2.8	4.6	2.0	6.0	1.4					1:1.8:2.3

第1表 秦泉寺額面施文軒丸瓦分類・計測表

4. 秦泉寺式軒丸の類例とその文様構成の検討

前述のように、秦泉寺廃寺は高知県下でも最古段階の寺院であると考えられる。実際、現段階では軒丸の文様構成等において秦泉寺式に先行すると思われるものは存在しない。そこで以下では、秦泉寺式の前様式に当たる可能性のあるものを県外に求め、それらについて検討してみた。

阿波・立善寺跡遺跡(第7, 8図)

立善寺跡遺跡は徳島県阿南市宝田町に所在する。阿南市史によれば、立善寺周辺には塔に由来すると考えられている「東の一」など寺に関すると思われる地名もいくつか残り、また正八幡神社付近には「郡」と呼ばれて那賀郡衝との関連が示唆されている地がある。郡衝推定地と立善寺との距離は約500m、県南地域における古代の要衝地と考えられており、その経営には郡司一族との結びつきが想定されている²¹⁰。

なお、寺の名称について、発掘調査の結果に基づく資料を使用する場合は「立善寺跡遺跡」、寺そのものを指す場合は「立善寺」と呼称する。

立善寺跡遺跡から秦泉寺式軒丸瓦と同系とみられる有稜線素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している²¹¹。立善寺例のそれは2型式あり、立善寺 Aは瓦当径11.2cm程度と小振りである。

弁区は花卉の「てりむくり」が小さく、花卉中央の直径方向に伸びる稜は凸線で表現している。また秦泉寺式同様、凸線による花卉内の区画もみられる。中房径は3.3cmと秦泉寺式より小さいが、中房高は秦泉寺式とはほぼ同じ5mm程度である。蓮子の配置は「1+6」の二重配列を取る。周縁には一条の凸線が巡り、重圏文の退化型式であると見ることができる。間弁の内側の2面に小さな段を有する。

立善寺Bは瓦当径14.5cm程度と秦泉寺式より小さい。花卉の「てりむくり」や花卉の区画、直径方向の稜など弁区の様相は秦泉寺式のそれに類似する。中房は高く、また12個の蓮子が不規則に並ぶ。周縁は内側をナアによって凹線状に凹ませており、段を表現したものと考えられる。

立善寺Aと立善寺Bの先後関係については、Aの方が瓦当径は小さいものの、文様構成の緻密さからAがBに先行し、立善寺Aは一瞥して山田寺式の影響を想定できるものである。そのように考えてよければ、花卉内の区画は重弁の退化したもののみなされよう。

立善寺Bと秦泉寺式軒丸瓦については、次に挙げるような文様の類似性から両者ともに立善寺Aを模倣したものと推測される。

- ① 花卉内に凸線による区画が見られる。
- ② 花卉の中央に、直径方向の稜が凸線で表現される。
- ③ 間弁の内側の2面に小さな段を有する。
- ④ 花卉の先端が大きく反転する。

次に、立善寺跡遺跡Bと秦泉寺式軒丸瓦の先後関係であるが、次に挙げる理由から秦泉寺式が立善寺Bに先行すると考えられる。すなわち、

- ① 中房の蓮子の配置について立善寺Bは秦泉寺式のもののがさらに崩れたものであると考えられること。
- ② 立善寺Bの周縁のナアは秦泉寺の段が退化したものとみなされること。
- ③ 間弁の内側の2面に表現された段は周縁側の辺と稜を繋ぐ線で表現されていること。の3点である。ただし、両者の間に大きな時期差はないと考えられる。



第7図 立善寺A(左)、立善寺B(中)、山田寺式(右)軒丸瓦
(山田寺式の写真は奈良文化財研究所蔵)

軒平瓦

一方、立善寺において、文献上確認できる顎面施文軒平瓦の出土は報告書に掲載された1点と阿南市史²¹に掲載される1点(第6図-5)の計2点がある。本稿では、これら2点に加え、徳島県埋蔵文化財センターで実見できた1点を検討資料に加えることにする。

3は報告書中の第16図-1である。土師質で顎部に4条の凸帯が残る。瓦当は二重弧文が施されるが、薄いつくりであることから、これに用いられた挽型は本来3条であった可能性もある。

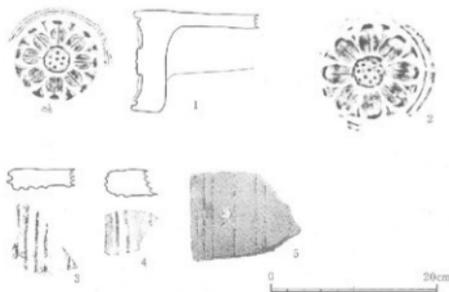
4は文献に未掲載のものである。細片であるが、須恵質で顎部に3条の凸帯が残る。瓦当は三重弧文で、顎の形態は不明である。

5は実見できていないが、顎部には5条の凸帯が巡らされており、小さな段顎を有する。顎面施文に挽型使用の有無は不明であるが、顎は浅く、挽き出されている可能性が高いと思われる。瓦当は型挽三重弧文である。

現在確認できる立善寺出土の顎面施文軒平瓦は上記の3点であるが、そのうちの4は他の2点とも、そして秦泉寺のそれとも凸帯の間隔が異なっている。4の第3凸帯を5の第5凸帯にあわせると間隔は合うので、これだけが挽型の位置が上にずれたとも考えられるが、この違いを年代差と見ることでもある。

出土軒瓦の全体数も少なく、このためこれらの顎面施文軒平瓦が創建期のものなのか、あるいは補完的に使用されたのかの判断は現段階では難しい。報告書によれば「有稜線素弁八葉蓮華文軒平瓦」は「当地のものとしては最も古いもの」として捉えられている。明言されていないが、立善寺A・Bともに創建期のものと考えられているようであり、既述のように、立善寺Aが立善寺Bに先行する。このことを踏まえた上で秦泉寺式のセット関係も勘案すれば、少なくとも立善寺Bは顎面施文軒平瓦とセットになると考えてよさそうである。なお、立善寺Aに伴う軒平瓦については、前述のように、顎面凸帯の間隔の違いを年代差と見れば、顎面施文軒平瓦と組合う可能性が高くなる。しかしながら顎面施文軒平瓦の出土数が少ないこと、他の2点と異なる4が細片であることから、現段階では不明とせざるを得ない。

次に立善寺の軒瓦の年代である。立善寺Aは、山田寺式の退化型式と考えてよければ、7世紀中葉以降ということになる。また、立善寺Bは、中房の蓮子の配置を川原寺式の影響と考えてよければ7世紀後葉以降であるが、秦泉寺式軒平瓦との前後関係から7世紀末以降の所産とすることがで



第8図 立善寺出土軒瓦²¹(S=1/6)

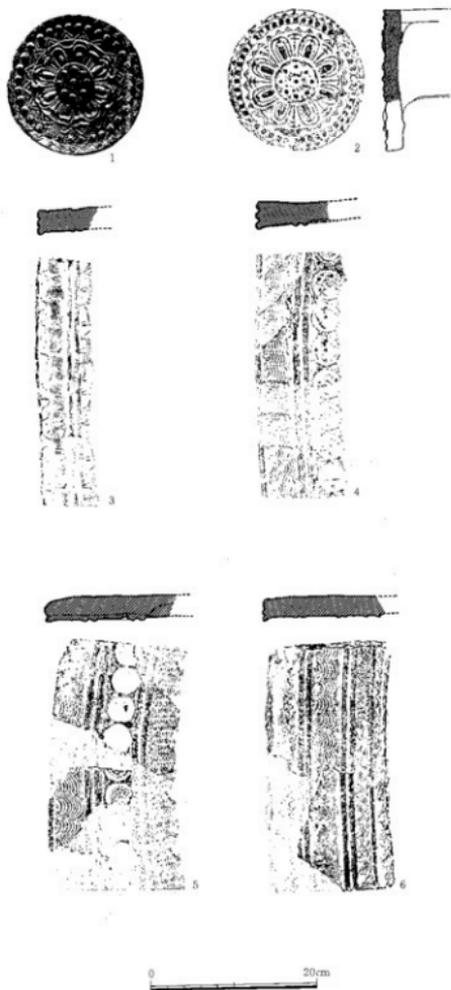
きる。額面施文軒平瓦については、少なくとも立善寺Bとの共伴は確実に考えられるため、上限は7世紀末以前ということになる。

5. 他の地域の額面施文軒平瓦と建立氏族

額面施文軒平瓦の分布は、私が調べた限りでは、額面に凸帯文を施すものは吉備地方、西播磨や南山城に面的に広がる他、讃岐と阿波、土佐に点在する。これらのうち、阿波と土佐については 既述のとおりである。したがって、ここでは残る3地域に見られる額面施文軒平瓦について、組合う軒丸瓦も含めて概観してみたい。

吉備(第9図)

吉備地方では、備中と美作に額面施文軒平瓦が分布している。これらのうち、後者については、組合う軒丸瓦が川原守系であるなど、播磨と共通する要素も見出せる²¹⁵。一方、備中には吉備寺式と呼ばれる瓦当文を採用する軒瓦がある²¹⁶。この吉備寺式の軒平瓦に額面施文が採用されるわけだが、その文様は凸帯に限らず、構描き波状文や円形文、円版貼付などが組合わされる。また、これと組合う軒



1: 日清院寺
2-6: 備前鹿寺

第9図 吉備寺式軒瓦²¹⁷(S=1/6)

丸瓦も特徴的な瓦で、畿内その他に類例を見ない。

吉備寺式軒瓦について年代の詳細は不明であるが、7世紀後半から8世紀初頭という時期が想定されているようである。外区の珠文を藤原宮式の影響と見れば、初現は7世紀末まで下ることになるが、組合う軒平瓦は重弧文を採用する。

なお、吉備寺式軒瓦を採用する古代寺院のなかで、秦氏の建立が想定される秦原廃寺が存在することを付記しておく。

播磨(第10図)

播磨における顎面施文軒平瓦の分布は、宍粟郡から佐用郡へと延びる地域(播磨北西部)から隣接する美作の一部にまで及ぶ。これらの顎面施文軒平瓦は製作技法と文様によって第一種～第四種に分類されており³¹⁸、この分類についての概略については第10図に示すとおりである。

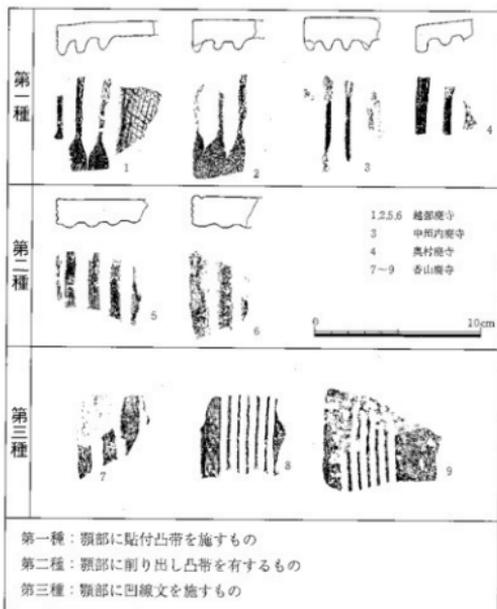
播磨の顎面施文軒平瓦について、秦泉寺のそれとの共通点としては顎面に凸帯がめぐらされることと第二種以降の瓦当文様に重弧文が施されることのみである。第一種の瓦当面は手描きの唐草文や素文が採用される。

顎面の凸帯そのものは秦泉寺のものが型挽によるのに対し、播磨のそれは最も古い第一種が貼り付けであり、続く第二種、第三種には凹線が巡らされており、秦泉寺のものとは趣を異にする。

共伴する軒丸瓦は、具体的な組み合わせは不明であるが、川原寺式かそれに近い系列の複弁蓮華文が出土している。

これらの顎面施文軒平瓦の年代は、伴出する軒丸瓦や須恵器などの年代観を参考に、第一種=第一段階が7世紀第4四半期、第二種=第二段階が8世紀第1四半期、第三種=第三段階がその第2四半期という時期が想定されている。

ところで播磨国風土記には渡来系氏族に関する記述が多く見られ、これらの渡来系氏族が寺院の建立に関与した可能性は高いと考えられる。播磨に居住した渡来系氏族は播磨の開発と対吉備勢力の根拠地として畿内から移住させられたものと考えら



第10図 播磨の顎面施文軒平瓦³¹⁷(S=1/6)

れている²⁰⁾。

南山城(第11図, 第2表)

南山城に広く分布する額面施文軒平瓦であるが、中でも特に久世郡(城陽市)と綴喜郡(田辺町)に所在する寺院跡に集中している。これらの額面施文軒平瓦は額面の凸帯と額の形態から第11図のように分類されている。額部の施文方法としては挽型による削り出しと貼り付けによるものがある。額の形態も古いものは浅い段額を採用するが、貼り付けによるものが多いようだ。

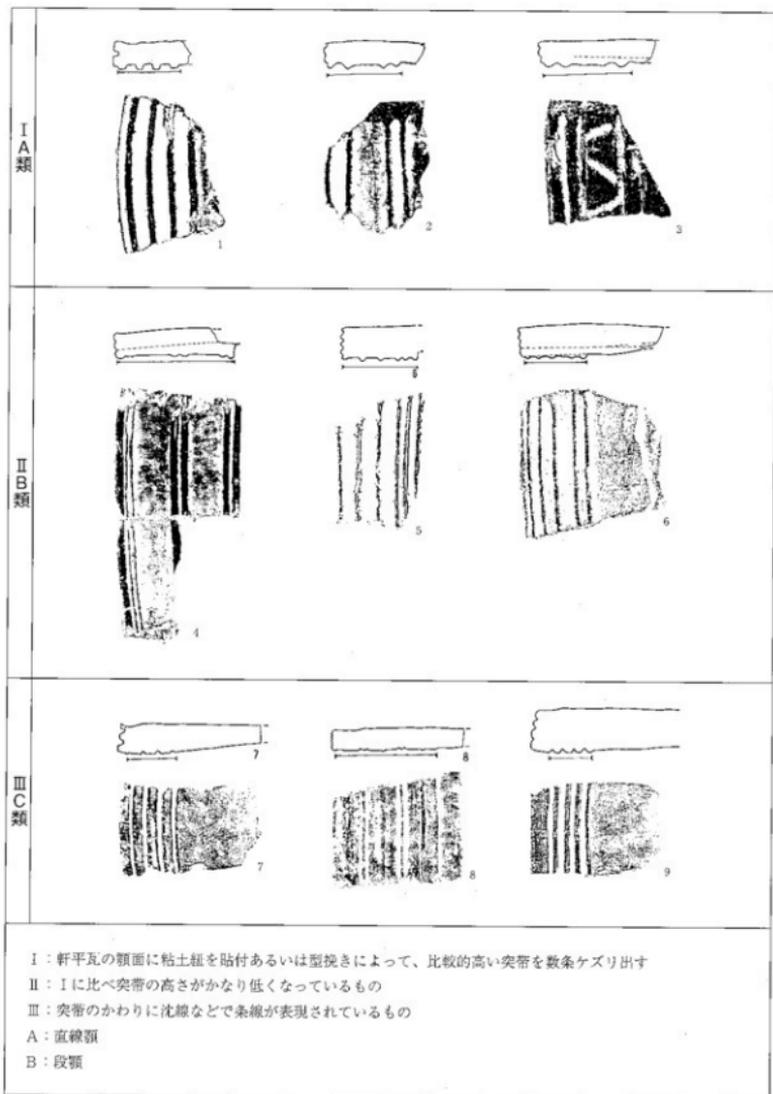
ところで南山城といっても、宇治川を境にしてその右岸と左岸で額面施文の分布の様相が異なる。久世郡や綴喜郡は右岸城に属し、凸帯の形状や額部の相違等で型式学的変化を追うことができる。これらに組合う軒丸瓦は、正道庵寺や平川庵寺では山田寺系の単弁八葉蓮華文、久世庵寺では川原寺式と推定されているが、久世庵寺のそれは平川庵寺の川原寺式を模倣したものと考えられている。

一方左岸城では額面文自体がヴァリエティに富むものの、額面文を持つものは直線額のもののみで、左岸城の額面施文軒平瓦は右岸城の影響下で成立した可能性が高いという。これらの軒平瓦の年代については、IA類が7世紀第3四半期、II Bが第4四半期以降とされている。なお奈良時代になると、南山城では額面施文軒平瓦の生産・使用が終了し、平城宮と同范もしくは同系統の軒瓦で統一されるようである²¹⁾。

額面施文軒平瓦を採用する寺院の建立氏族については第2表のとおりである。南山城は高麗氏や黄文氏をはじめとする高句麗系の渡来系氏族が偏在する地域であるものの、全体として民族的なまとまりが見出せない。ここでは額面施文軒平瓦の採用を、久世郡と綴喜郡を中心とする地域的結合とすることもできるが、組合う軒丸瓦には山田寺式と川原寺式がみられ、またそれらが混在していることから、他の地域に比べて状況は複雑だったのかもしれない。

郡名	寺院名	発願者・造営氏族・その他	額面施文軒平瓦	図版	創建年代	備考
久世郡	正道庵寺	山背氏(山代國造)	I A	1	7世紀第2四半期	久世郡
	平川庵寺	黄文氏・高麗系	I A	2,3	7世紀第2四半期	久世郡
	久世庵寺	山背氏(山代國造)	II B	4	7世紀第4四半期	久世郡
綴喜郡	山陵寺跡		II B	5	7世紀第4四半期	田原郡
	興戸庵寺	中臣酒麻進氏	型で施文	7	7世紀第4四半期	
	普賢寺	長息氏・新羅系(岡城の韓人)・百濟系・多々良公氏・任那系	II A		7世紀第2四半期	
	三山水庵寺	高麗系	II A	8	7世紀第2四半期	山本郡
	志水庵寺	内氏?	II A	9	7世紀第2四半期	有智郡
相家郡	蟹溝寺	粟河勝・和賀・秦氏?高麗系? 総氏?	II B	6	7世紀第4四半期	緯部額面施文軒平瓦は微量

第2表 南山城の古代寺院と造営氏族²²⁾



第11図 南山城の顎面施文軒平瓦¹¹²³ (S=1/6)

讃岐・極楽寺(第13図)²⁴ 25

極楽寺は寒川郡に所在した寺院で、創建は白鳳後期と考えられている。極楽寺の額面施文軒平瓦は貼り付けによる段顎に型挽の四重凸帯を持ち、瓦当にも型挽三重弧文を施す。瓦当下部は下垂しない。重弧文軒平瓦は額面施文軒平瓦の他、二段顎のものや無施文の段顎のものが知られ、重弧文にも三重弧と四重弧のものがある。これらの中で額面施文軒平瓦の位置付けは不明であるが、軒九瓦の転換期が周縁に珠文をめぐらせる藤原宮式の採用であり、これに組合うと考えられている軒平瓦は変形扁行唐草文であることから、瓦当文様に三重弧文を採用する額面施文軒平瓦の時期の下限は8世紀初頭頃までと考えてよいと思う。上限については創建期と考えられている軒九瓦が川原寺式の重式である十六葉細単弁から十二葉細単弁蓮華文軒九瓦なので、7世紀後葉頃と考えておきたい。

なお、極楽寺の建立氏族については不明であるが、寒川郡の有力氏族であり、寒川郡の大領にも任じられたという凡直氏が大きく関与した可能性は高いといえる²⁶。



第12図 極楽寺出土軒平瓦²⁷ (S=1/6)

以上、私による限りで他地域の額面施文軒平瓦を概観してきた。まず、その採用にあたっての渡来系氏族の関与についてであるが、これについては一概には言えない。記録上、額面施文軒平瓦を採用する寺院の多くに渡来系氏族の名が見え、また記録に残らない渡来系氏族も多くいたことは容易に推測できることから、彼らと額面施文が結びつく可能性もないではない。

しかしそれは額面施文を持たない軒平瓦についても同様である。さらに軒平瓦の製作技法や額部を含めた形態などで地域差が大きく、同一系譜上にあるとはいえない。このことから各地における額面施文軒平瓦の採用については、それぞれの地域において構築された寺院間のネットワークに規制されたものとした方が理解しやすい。

6. 秦泉寺式軒瓦の成立

軒瓦の瓦当の同範・同文関係には、その瓦のセット関係を通じて政治的意図や同族的意識を含めた豪族間におけるネットワークを表現しているとみなされる。そこには瓦工や笥、あるいは僧侶の移動といった要素もあろう。そして瓦当文様の共有が豪族間のネットワークを表現するものである以上、瓦当文様の移動には軒瓦の製作技法までを含むと考えられよう。

このような観点から前項で各地の額面施文軒平瓦を概観した結果もあわせると、改めて秦泉寺と立善寺の近縁性が指摘できる。そして秦泉寺式と同じ様式を持つ軒瓦が見出せない以上、立善

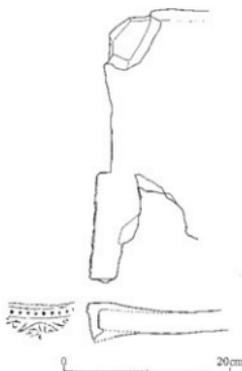
寺 A から秦泉寺にいたる段階において新たに創出された様式である可能性も浮上する。秦泉寺式軒平瓦に見られる顎面凸帯については、立善寺 A の段階でその有無は不明であるが、あるいは秦泉寺式軒丸瓦の創出の際にできたものとも考えることもできる。

秦泉寺式軒平瓦の成立については、他地域の顎面施文軒平瓦の年代観が参考になる。すなわちいずれの顎面施文軒平瓦も、その製作技法は異なるものの、播磨の一部を除いて瓦当に重弧文を採用し、年代的にも総じて7世紀後葉から8世紀初頭頃と考えられている。このような観点からすれば、秦泉寺式軒平瓦もこの時期の所産と考えられ、このことは先に想定した秦泉寺式軒丸瓦の年代とも齟齬はない。もし仮に立善寺 A が顎面施文軒平瓦と組合うとしても、山田寺の造営は641年の蘇我倉山田石川麻呂による発願以来、完成までに40年以上をかけており（『上官聖徳法王帝説』裏書）、さらに山田寺式軒丸瓦の范は8世紀初頭まで使用された可能性があるという²²⁸。この指摘に立てば、立善寺 A を7世紀後葉まで下げることは可能である。ただ基本的に瓦当文様はセットで移動するという前提に立てば、顎面施文軒平瓦は中房に川原寺の影響が見られる素弁八葉蓮華文軒丸瓦とセットで成立した様式とみた方が考えやすい。しかしそうすると立善寺 A と組合う軒平瓦が見当たらない。この点については今後の資料の増加を待って新たに検討することとして、現段階では秦泉寺式軒丸瓦は立善寺 A を、立善寺軒丸瓦 B は立善寺軒丸瓦 A もしくは秦泉寺式を模倣して製作されたものと把握するに留めておく。

7. 秦泉寺廃寺出土の ZN101・ZN203A

今回の調査では、讃岐・普通寺と同范関係を有する軒瓦が各出土している。そのうちの細素弁十六葉蓮華文軒丸瓦は表採資料であるが、扁行唐草文軒平瓦については遺構（SD1）から出土しており、その年代の下限は遅くとも9世紀前半までとすることができる。ZN203A の同范関係についてはすでに詳しい研究がなされており^{229 230}、ここでは触れないが、その後の資料整理でこの瓦当に接合する平瓦部が見つかった（第13図）。その詳細については第2章「調査の成果」にあげるとおりであるが、要点をまとめると次のとおりである。

- ① 曲線顎を有し、凸面には縄タキが施されている。
- ② 瓦当の接合は「包込み技法²³¹」によるものである。
- ③ 色調は青灰色を呈する。



第13図 秦泉寺廃寺出土 ZN203A

ところで普通寺における ZN101 および ZN203A は白鳳後期の様式とされており²³²、軒平瓦である ZN203A には段顎が採用される。一方の秦泉寺 ZN203A は曲線顎である。このことが両寺院

におけるネットワークを否定する根拠にはならず、むしろ秦泉寺 ZN203Aの製作時期が奈良時代以降にまで下る可能性を示唆しているものと考えられる。これ以前に秦泉寺と普通寺の間にネットワークの存在を想定させる資料が一切見られないことから、両寺院のネットワーク構築は奈良時代から平安時代のある時期ということになるが、現存する資料ではそれ以上のことはわからない。

なお ZN101の製作時期を示す具体的な資料はないが、色調が ZN203Aと同様に青灰色を呈することと普通寺におけるセット関係から、両者は時を同じくして秦泉寺にもたらされたと考えることができる。

8. 秦泉寺を取り巻く豪族間のネットワーク

ここまでで秦泉寺廃寺から出土した軒瓦の同範・同文関係から7世紀後葉から8世紀初頭頃には阿波・那賀郡の立善寺と、奈良時代以降には讃岐・多度郡の普通寺とネットワークを構築していたことがわかった。以下では秦泉寺が構成するネットワークについて、もう少し具体的に考えてみることにする。

まず、軒瓦の共有という側面から他の地域を見た場合、そこに必ずしも同一氏族が関わるといふ想定が成り立つわけではない。例えば、先に顔面施文を検討する際に見た吉備地域の場合では、吉備寺式軒瓦を採用する寺院は7寺であり、それに関与した氏族は秦氏、賀陽氏、下道氏などであった²³。もちろん彼らの間に外戚などによる同族関係はあったものと思われ、軒瓦の共有には同族的紐帯とも言うべき関係が働いていると考えられる。しかし少なくとも彼らが別姓であるという点を重視すれば、同族という意識よりはむしろ政治的な色彩の方が強いといえるかもしれない。ただ、秦泉寺のネットワークの場合、これまでに見てきた地域と大きく異なる点は寺院間の距離である。すなわち他の地域で構成されるネットワークが概ね同一国内の繋がりに対し、立善寺、普通寺ともに秦泉寺とは国が異なり、その距離も100kmを超える。このような観点からすれば、ネットワーク構築の目的に政治的意図はあるとしても、その背景にはそれぞれの寺院の経営に関わる氏族間の同族的意識が利用されたと想定したほうが理解しやすい。



第14図 秦泉寺、立善寺、普通寺の位置

秦泉寺の造営氏族

秦泉寺を建立した氏族は、その所在地「秦」という地名から渡来系氏族である秦氏の関連が想定されている。この地域には他に秦氏の居住を示すものは知られていないが、隣接する吾川郡に居

住した秦氏の資料として、正倉院南倉大幡残欠に「郡司擬少領无位秦勝国方」の名が見えると同時に、秦泉寺の軒丸瓦の退化型式と見られるものが現在の吾川郡春野町の人寺廃寺から出土している²³⁴。そして吾川郡内にも八田という地名が残る。「八田」は「ハタ」であるが、「秦」は「ハダ」と奈良朝の音で訓まれるため²³⁵、少なくとも「秦」地区に7世紀末段階での秦氏の存在は認めてよい。秦泉寺に関連する氏族で、その存在を確認できる氏族は秦氏のみである。

ところで寺院の造営について、郡領氏族の存在は無視できない。特に天武朝以降、国の仏教政策が強化されたが、それに伴って各郡の郡領の関与が強まったことは容易に推測される。

以下では秦泉寺と立善寺、また秦泉寺と普通寺のネットワーク構築に秦氏もしくはそれぞれの寺院が所在する郡の郡領氏族が関与する可能性について探ってみることにする。

秦泉寺と立善寺

立善寺と秦氏の関連を示す資料は一切ないが、秦泉寺との関連で立善寺の創建および経営に秦氏が大きく関与したと仮定して、立善寺が所在した那賀郡内の秦氏について見てみたい。

当地の秦氏の居住を示す記録については、平城京のSD12530から出土した木簡がある²³⁶。これによれば、那賀郡出水郷の戸主として秦人がいたらしい。この秦人は戸主ということで、身分的にはかなり低いと見られるが、ここで注目すべきは「出水郷」の存在であろう。出水郷については、後の平安時代に編纂された「倭名類聚抄」の郷名を現在の地名に比定した論文が、徳島県史²³⁷に掲載されている。これによれば「長生町本庄に和泉八幡宮があり、その社の付近の土地を和泉と呼んでいる。このことから和泉郷は長生・宝田・富岡・荒井の地方を指すとする大日本地名辞書の説を正しいと採る」とあり、立善寺が所在するのは現在の宝田町である。また、「和泉」は「出水」である。従って立善寺は出水郷に所在したことになる。秦泉寺の「泉」が「出水」を語源にしているとなれば理解しやすい。

しかし、ここまでの解釈にも問題がないわけではない。まず木簡に記された秦人の身分が低いことである。

秦泉寺建立に関わった秦氏の、土佐郡内における地位については不明ながら、先述の吾川郡・大寺廃寺建立に大きく関わったとされる秦勝国方は郡の次官に近い地位に就いている。片や「戸主」である。郷を構成する50戸のうちの一つの長ということでその差は歴然である。

「勝」も「人」もどちらも下級帰化人を表す姓であるが、その身分に差がありすぎるように思う。もちろん、郷内の秦氏が彼一人ではないだろうし、さらに上級職についていた秦氏もいたに違いない。ここで一般的に言われる秦氏の変遷をたどると、秦氏は5世紀末から6世紀初頭頃に秦部の伴造となり、彼らが各地の秦部を直接の管理するために秦人と呼ばれる下級渡来人を部下に持つようになったようだ²³⁸。この見解に従えば、出水郷の戸主であった秦人を直接管理する秦氏がどこかにいたはずであるが、この点については、現存する資料による限り不明である。立善寺建立に秦氏の関連を想定するならば、より上級の官位を持つ秦氏を想定したほうが良いと思われる。

ついで阿寺院の造営に郡領氏族が関与した可能性についてである²³⁹。

秦泉寺は土佐国の土佐郡、立善寺は阿波国の那賀郡に所在した寺院であるが、那賀郡は、立評

以前は勝浦郡や海部郡とともに長国を構成していた。長国造は長氏である。土佐国造は土佐氏を名乗ったらしく、後のカモ氏であるといわれる。そして長国造と土佐国造が先祖を同じくする同族であるという主張は興味深い。その詳細については「高知県史⁴³」および「阿南市史⁴¹」に譲るが、大筋は『旧事本記』『国造本紀』の「都佐国造 志賀高穴徳朝御世 長阿比古同祖 三嶋溝杭命九世孫 小立足尾賜国造」という記載を引用し、都佐の国造となった小立足尾は長阿比古(長国造の姓)と同祖である三嶋溝杭命の9世孫とするもので、これは土佐側の主張である。ところで長阿比古を阿波の長氏とせず、紀伊の長氏とする見解もある⁴²。この見解については明確な根拠が示されていないため、両者のどちらが正しいともいえないが、秦泉寺と立善寺の軒瓦の関係から前者を支持したい。

秦泉寺と普通寺

普通寺の造営氏族は讃岐西部の有力豪族である佐伯氏といわれている。ところで三代実録によれば、普通寺が所在する多度郡では貞観6年(864)に正六位下の秦子上成と秦子弥成が忌寸に賜姓されている⁴⁴。ここから奈良時代における多度郡に秦氏の居住を推定できるのであり、そう考えてよければ秦泉寺と普通寺のネットワーク構築に際し、多度郡の秦氏の仲介、すなわち讃岐と土佐における秦氏の同族意識を想定すべきであろう。

一方、多度郡にカモ氏の居住を示す資料はなく、現在のところ秦泉寺と普通寺のネットワーク構築にカモ氏の関与を想定することはできない⁴⁴。

9. まとめ

これまでの6度に亘る調査結果をもとに、本稿では秦泉寺廃寺出土の軒瓦を分類した。

そして創建期の軒瓦と考えられる軒丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅰ類を「秦泉寺式」と仮称し、秦泉寺式は阿波・那賀郡に所在した立善寺の軒瓦と同文関係にある。その系譜は立善寺から秦泉寺という流れであり、秦泉寺の建立時期は、秦泉寺式軒瓦の年代観を当てはめてよければ7世紀後葉から8世紀初頭頃ということになる。

一方、今回の調査では、讃岐・多度郡に所在する普通寺の軒丸瓦(ZN101)および軒平瓦(ZN203A)と同範の軒瓦が出土している。本稿中の軒丸瓦Ⅴ類(12)と軒平瓦Ⅳ類(34)がそれであるが、特に軒平瓦は普通寺のものと同範の形態が大きく異なり、白鳳後期とされる文様の軒平瓦が奈良時代以降の製作技法で製作されている。

以上のことから秦泉寺は、7世紀後葉から8世紀初頭頃には立善寺と、そして奈良時代には普通寺とネットワークを構築していたと考えられるが、本稿ではその背景にあるものを氏族間の同族意識に求めた。他地域のような政治的結合を想定するには寺院間の距離が離れすぎていると思われるからである。そして阿波・那賀郡にも、讃岐・多度郡にも秦氏は存在した。秦氏は秦泉寺の造営氏族と考えられている氏族である。また阿波那賀郡の前身である長と土佐の間には国造の同

祖伝承があるという見解もある。一方、多度郡の郡領であり普通寺の造営氏族である佐伯氏と秦泉寺の所在する土佐郡の郡領であるカモ氏の繋がりとは不明である。

このように秦泉寺と立善寺、それから秦泉寺と普通寺を結びつける氏族間の繋がりを具体的に想定することはできる。しかしこれらも現存する資料から共通点を見出したに過ぎず、またそこには少なからず希望的な憶測が含まれていることも否定しない。これらの想定をより強固なものとし、あるいは別の氏族によるネットワーク構築を想定するためにも、今後の資料増加に期する部分も多いが、それ以外にもまだまだ課題は山積みである。

最後になったが、本稿を成すにあたり下記の方々および諸機関から助言とご教授、そしてご協力を賜った。記して謝意を表する(50音順、敬称略)。

片桐孝浩 川畑 聰 梶原瑞司 小林麻由 田上 浩 貞野雅己 藤川智之
徳平涼子 前田光雄 山本一伸 山本哲也 吉成承三
さぬき市教育委員会 (財)高知文化財団埋蔵文化財センター
(財)徳島県埋蔵文化財センター 高知市教育委員会 高松市教育委員会
土佐山田町教育委員会 奈良国立文化財研究所

註1 『秦泉寺廃寺』高知市教育委員会 1975

『秦泉寺廃寺跡』高知市教育委員会 1984

『秦泉寺廃寺跡発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994

『秦泉寺廃寺(第5次調査)』高知市教育委員会 2002

より作成。第2, 3図および第1表についても同じ。

註2 『野中廃寺』『高知県埋蔵文化財センター年報1』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992

註3 蓮本 和博『白鳳時代における讃岐の造瓦工人の動向』『研究紀要Ⅹ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 2001

註4 川畑 聰『讃岐国における古代寺院出土軒瓦の同范・同文関係』『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1992

註5 『秦泉寺廃寺(第5次調査)』高知市教育委員会 2002

註6 『古代の瓦』『日本の美術11』1971より抜粋、一部改変

註7 第5図では川原寺式と藤原官式の間には法隆寺式があるが、法隆寺式は軒丸瓦に限れば川原寺式の退化型式であることから、型式として川原寺式の次に現れるものは藤原官式であると考えられる。

註8 川畑 聰『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館 1996

註9 顎の平坦面に施文された軒平瓦を総称して、今里幾次氏が「顎部施文軒平瓦」という語を用い、竹原伸仁氏が「顎面施文軒平瓦」という語を用いた。ここでは文様が顎面に施されるという意味で顎「面」施文という語を用いることにする。なお、顎面施文は凸帯以外にも波

状文や円形文などが施される場合もあり、文様そのものを指す場合には「顎面凸帯」などの用語を使用する(註10、註21参照)。

註10 『阿南市史 第1巻(原始古代中世編)』1987 阿南市史編纂会

註11 『秦泉寺廃寺跡発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994
『立善寺跡遺跡』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1997

註12 註8に同じ

註13 3は報告書より転載一部修正, 5は阿南市史より転載

註14 註10に同じ

註15 今里 幾次「新宮町香山廃寺の古瓦」『播磨古瓦の研究』真陽社 1995

註16 『岡山県史 第3巻 古代Ⅱ』岡山県史編纂委員会 1990

註17 1は「古代の瓦」, 2~6は岡山県史より抜粋一部改変(註6, 16参照)。

註18 註15に同じ

註19 今里 幾次「新宮町香山廃寺の古瓦」をもとに作成。なお第四種については、同書では范型によるものとあり、詳細が不明であるため制変した(註15参照)。

註20 森 公章「風土記と渡来系氏族」『季刊考古学 第60号』1997

註21 竹原 伸仁「南山城の古代屋瓦に関する一考察 —軒平瓦に見る兩仕舞と装飾について—」
『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1992

註22 中島 正「山背の古墳と寺院」『季刊考古学 第60号』1997

竹原 伸仁「南山城の古代屋瓦に関する一考察 —軒平瓦に見る兩仕舞と装飾について—」
をもとに作成。

註23 竹原 伸仁「南山城の古代屋瓦に関する一考察 —軒平瓦に見る兩仕舞と装飾について—」
をもとに作成(註21参照)。

註24 註8に同じ

註25 蓮本 和博「軒平瓦に見る讃岐の白鳳寺院」『研究紀要Ⅳ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1999

註26 註4に同じ

註27 「讃岐の古瓦展」より転載, 一部改変(註8参照)。

註28 上原 真人「瓦を読む」『歴史発掘11』講談社 1997

註29 註3に同じ

註30 註4に同じ

註31 註25に同じ

註32 註8に同じ

註33 註16に同じ

註34 岡本 健児『日本の古代遺跡39 高知』保育社 1989

註35 『秦泉寺廃寺跡発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994

註36 松原 弘宣「阿波国の地方豪族」『古代の地方豪族』吉川弘文館 1988

註37 『徳島県史』徳島県史編纂委員会 1963

註38 関 晃『古代の楊化人』吉川弘文館1994

註39 郡はその前身を「評」といい、国造一族を中心とする在地有力氏族の地域支配関係を基礎とし、彼らが大夫や少領の地位を世襲した。「郡」は大宝令によってはじめて規定された行政単位で、それ以前は「評」と表された。立善寺建立の時期にそのどちらの「こおり」を当てていたかは不明であるが、本稿では「郡」の文字を当てて記述している。

註40 『高知県史 古代・中世編』高知県史編纂会 1971

註41 註10に同じ

註42 松原 弘宣『土佐国の地方豪族』『古代の地方豪族』吉川弘文館 1988

註43 松原 弘宣『讃岐国西部地域の地方豪族』『古代の地方豪族』吉川弘文館 1988

註44 秦泉寺と同様に善通寺と同形の軒瓦を出土する遺跡に加茂ハイタノクボ遺跡⁴⁴がある。加茂ハイタノクボ遺跡は現在の長岡郡土佐山田町加茂地区に所在する、瓦窯の灰原と考えられている遺跡である。報告書によれば、そこで表採された複弁八葉蓮華文軒瓦(報告書 Fig12-1など)が善通寺のZN104と同形であり、同遺跡出土品(報告書 Fig8-1)や加茂・日吉神社で保管されている均整唐草文軒平瓦(Fig12-5など)がZN206と同形・同文であるが、包込み技法の採用については不明である。この窯が稼動していた時期は、具体的にはわからないが、出土する平瓦の成形に縄タキが見られることから奈良時代には稼動していることがわかる。なお善通寺ではZN104はZN101に若干後出し、白鳳末期～奈良時代の時期が想定されている。一方のZN206は平城宮型式と考えられており、これもZN203Aに後出する⁴⁵。加茂ハイタノクボ遺跡の「加茂」をカモ氏と結び付け、カモ氏と善通寺のネットワークを想定することもできるが、加茂ハイタノクボ遺跡は瓦窯の灰原である。カモ氏と加茂ハイタノクボ遺跡を関連づけるならば、現段階ではカモ氏は瓦窯を管理したと見るべきで、むしろそこからの供給先を重視すべきであると思われる。

註45 『加茂ハイタノクボ遺跡』土佐山田町教育委員会 2000

註46 註8に同じ

参考文献

『高知県史 考古資料』高知県史編纂会 1971

『山城の古瓦』京都府立山城郷土資料館 1983

網 伸也『摂津の古墳と寺院』『季刊考古学 第60号』1997

稲垣 晋也『南海道古瓦の系譜』『新修 国分寺の研究 第5巻上 南海道』吉川弘文館 1987

狩野 久『古代を考える 古代寺院』吉川弘文館 1999

田村 圓澄『飛鳥・白鳳仏教史 上』吉川弘文館 1994

坪井 清足『飛鳥の寺と国分寺』岩波書店 1985

前園 実知雄『終末期古墳と寺院』『季刊考古学 第81号』2003

松下 正司『中国・四国の古墳と寺院』『季刊考古学 第60号』1997

付編2 秦泉寺廃寺跡出土瓦類の原料土種と 採掘地層の同定に関する調査 I

四国土建株式会社 文化遺産調査室主任研究員 武吉眞裕

I 調査の概要

1. 調査の目的

古代の仏寺跡に比定される秦泉寺廃寺跡に関しては、過去の調査に於いて堂塔伽藍の存在を物証する明確な遺構の検出に乏しく、末尾に「寺」の付く「秦泉寺」なる地名と、この地に分布・埋蔵する布日瓦や蓮弁文瓦当類の符合等から導かれる推定的な遺跡性格の域を未だ脱し得ないでいる。

「秦泉寺」なる地名の由来には、その来歴を決定付けるに足る古文書記載や地誌・碑文の存在を欠くのに対し、窯業土製品としての瓦類には、それら瓦胎自体に素材の来源を示す地歴情報が確実に封印されている。

当調査は、秦泉寺廃寺跡出土瓦類を構成する瓦胎の主流に対して原料土種と採掘地層の同定を行い、遺跡性格や古代交通地理の問題とも相関する製瓦地点を物的側面から限定付けると共に、古代土佐で活躍した陶部と瓦工の関係や製瓦技術の復元に不可欠な原料土の一角を特定することを目的とする。

2. 調査の期間と方法

当調査は、秦泉寺廃寺跡第6次発掘調査に付随して実施し、2000年9月29日から同発掘調査終了後の2001年3月31日迄を期限とした。

本章冒頭記載の目的に照らし、最も有効かつ集約的結果を得るため、基準選定する主流型瓦胎サンプル1点に対して地質要素が合致するサンプル土壌1点の選定・同定を当調査の核心に位置付けた。同定基準の瓦胎サンプル1点は、第6次発掘調査区内の出土品から非焼結部分を選定するものとし、サンプル土壌1点は、県内広域踏査で収集する土壌資料から厳選するものとした。このサンプルセットの決定に当たっては、鏡下観察による主要な岩片・鉱物粒子の組成及び形状の基本的合致を必要条件とする。更にサンプル土壌に対しては、非精製かつ単味素地の状態でテスト炉と穴窯による火焼性能テストを加え、粗製瓦原料土としての適合性を検証するものとした。

以上の選別条件を最も高い類似性で満たす瓦胎と土壌のサンプル1対に対しては、精密な定性同定分析と科学的評価を、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

3. 瓦胎の分類と主流瓦胎型の抽出

第6次発掘調査区の遺物包含層における瓦片垂直分布には、瓦胎や成形痕等の相違による偏差が見られず、表採瓦片の異種混在状況との間に大差は無いと判断される。このため、発掘調査の冒頭より収集可能な表採資料331点にトレンチ壁採取資料7点を加えた総計338点、自然乾燥重量

35663gの瓦片を分類基礎とし、その主流瓦胎型を抽出した。

圧倒的多数の瓦胎では、瓦原料土採掘地周辺や水系域の地質を端的に反映する主要岩片粒子として、石英砂岩もしくは石英粒子の集合体・優白質の泥岩・酸化鉄を含む泥質岩や有色砂質岩・チャート片が共通して含まれる。更にそれら瓦胎の大部分に鬼界カルデラ給源のK-Ah火山灰(アカホヤ)が混じり、一部の破片では、広域テフラ粒子が始良カルデラ給源のAT火山灰に置換するものも観察される。また、所含の岩片に水磨の顕著な瓦胎では、火山ガラスの含量・サイズとも一般に小さく、岩片水磨の軽微な瓦胎では、これらが大きくなる。

上記の現象は、それぞれ原料土の母材である地層からの水積移動距離の大きさを反映すると考えられる。この理由から、基本的には同質の地質環境を背景とする主流瓦胎型所属の303点を二分し、岩片水磨度の軽・重、火山ガラス粒子の大・小に応じて、量的に優勢な前者をI型(水磨度一軽;火山ガラス一大)・劣勢な後者をII型(水磨度一重;火山ガラス一小)とした。I型は破片数219点、重量26287g、II型は破片数69点、重量6237gを占める。後述する野中庵寺跡出土瓦と同胎の破片1点を除く縄蓆印目文瓦片は、全て母材から距離的に近いI型に属し、綾杉印目文や斜格子印目文を施す平瓦片は、I型・II型双方に跨る。I型・II型を除く瓦片資料50点、3139g中には、平安前期に位置付けられた野中庵寺跡(南岡市野中)出土の縄蓆印目文平瓦片や軒丸瓦片と同胎の細片計2点、および中世~近世の丸瓦・平瓦片各1点等が混じる他、帰属を保留すべきものが多い。

4. 瓦胎原料土種の特定と、土壌堆積環境の割出し

I型・II型に二分した主流瓦胎には、所含岩片の水磨度や火山ガラスの粒径に格差が見られる他、胎の組織構造や胎内未分解炭素の濃度にも傾向差が存在する。胎の組織構造に関しては、I型に於いて酸化鉄その他鉄化合物の濃淡に起因する細かい胎織やブロックの顕著な破片が優勢である。一方のII型では、それらが不顕著であり、胎呈色の主因となる酸化鉄の遊離・拡散が窺える。胎内未分解炭素の濃度に関しては、I型での濃度が高く、II型では一般に濃度が低い。なお、I型・II型に共通する胎内孔隙率の高さは、一面に於いて焼結度の低さに起因するが、火山灰の含有と胎内炭質物の残留を重ね合わせると、粘土を主成分とする若干練整気味の腐植質黒色土という原料土壌の姿が浮かび上がる。

以上の状況から、I型は酸化鉄の縞を伴う非固結泥岩層に次いで広域テフラ堆積層を主母材とする水積粘土層に由来し、酸化鉄が遊離し難い地衣付近の非湿型地堆積環境に所在したと考えられる。これに対し、同様の地層を母材とするII型では、より河成作用を受けて堆積した後、酸化鉄の遊離し易いグライ環境に閉塞され、腐植集積を断絶した水積粘土層に由来する可能性が高い。

5. 同定基準瓦の条件設定と選定

瓦胎I型・II型の全般的な質的特徴の一つとして、焼結度の低さが際立つ。この点は、焼結度の低い胎ほど原料成分の変質が少なく、組織観察による原料土種の割出しに有利となる。また、原料土は一旦火焼を受けて胎化した時点から、熱変化の度合やその後の環境に応じて、原料土とは異なる風化系を辿る。実際、秦泉寺庵寺跡の出土瓦類も、本来の表部に止まらず、後発した断

口の表部にも白化・再粘土化を来たしたものが多い。

このため、同定基準瓦の選定には、①母材となった地層の近くで堆積した状況が読み取れるⅠ型所属で、②成形手法上、量的に突出した割合を占める縄瀬印目文を施し、③被熱変化が極軽微か無に近い部分を約200g(含水重量)以上伴うことを条件とし、その出土を待った。発掘調査中盤の2000年11月7日、Ⅰ区北端のトレンチ壁に露出した瓦片5〜6枚の累重中に、上記の条件を満たす縄瀬印目文瓦片の出土が認められ、これを同定基準瓦胎試料——JT-J001として選定した。

この試料に含まれるバブル型火山ガラスは、流紋岩質マグマでも特に高珪酸型を示す無色の穹片粒子で占められ、ATの特徴と一致する。なお、瓦胎Ⅰ型・Ⅱ型を通じ、所含の広域テフラに有色のバブル型火山ガラスの目立つK-Ahが優勢な中で、純粋なATのみを含む瓦胎サンプル例には、Ⅱ区南端バンクの包含層から採取した綾杉印目文平瓦1点(Ⅰ型胎所属)も含まれる。

6. 瓦胎に認め難い遺跡近辺の沖積碎屑物の影響

秦泉寺廃寺跡は金谷川の沖積扇に立地する。この金谷川は、秦泉寺廃寺跡の北背に切り立つ北山に水源を発する小河川であるが、この第6次発掘調査区の北方約500m以北の中・上流域では、秩父累帯を縦断する黒瀬川構造帯の蛇紋岩を数箇所まで浸食する。支流の一つである淋谷川側方の山腹に若干のチャート岩塊を見る他は、蛇紋岩で区切られた砂岩勝ちの砂岩・泥岩互層が沖積源を占めており、この水系地質は第6次発掘調査区内の基本的な土壤堆積にも、顕著に反映する。

第6次発掘調査区に於ける客土層以外の検出地層は、約6300年前¹¹⁾の鬼界カルデラ噴火以後に堆積した完新世扇状地河成砂礫堆であり、一部にK-Ah混じりの砂質粘土(暗灰褐色・浅黄色)を夾む。この点は、かつて金谷川の流域にテフラ性腐植質黒色土が分布した可能性を示唆するが、既往の踏査範囲に関する限り、この種の土壤型を現認し得ない。

調査区東部側方の丘陵(前里地区)には、比較的軽度の加水圧碎と練泥を施すのみで焼締陶の製作が可能な優白質の非固結泥質岩が路頭しており、粗陶類の混和材に適する無色で固結の緩い石英砂岩を伴う。これら窯業適正を備える地質成分の風化堆積層に金谷川の沖積作用が加わった場合、多量の蛇紋岩片や遊離磁鉄鉱粒子、有色の砂岩・泥岩、微量のチャートおよびK-Ah火山灰が加わるほか、酸化鉄や塩基成分の増量による耐火性能の顕著な低下を避け難い。第6次発掘調査区でサンプリングした瓦類を通じ、蛇紋岩由来と見られる苦鉄岩片の含有は極めて稀であり、磁鉄鉱の含量も顕著とは言えず、磁鉄鉱に関してはほぼK-Ah火山ガラスの含量または有無と正の関係が窺える。また、特にⅠ型胎では石英砂岩が顕著な量を保ち、水磨度の高い砂粒子を多含するⅡ型胎に於いても、有色の砂質岩片や泥質岩片が比較的少なく、チャートや石英砂岩等の珪質岩片の割合が高い。

以上の点から、これらサンプリング瓦類に、金谷川の扇状地堆積層から原料土を取材するものが混じる可能性は、極めて低いと言わざるを得ない。また、金谷川の沖積作用を免れる丘陵部の二次堆積層に関しても、秦泉寺廃寺跡の主流瓦胎との関係を肯定する要素を見出せず、それら瓦胎原料土の採掘地層は、他の地域に求めるべき結論となる。

7. 同定基準試料瓦片に関する原料土産状の割出し

同定基準瓦胎 JT-J001 では、厚さ約22mmの瓦胎の一角にのみ結晶水の不完全な焼失を生じ、大部分は付着水が蒸発した程度の火焼に止まるものと推定される。また、胎全体を黒灰色に見せる炭質物は、表層部1mm程度が分解して白味の強い胎色を顕わす。I型胎の中では、砂粒子と孔隙の乏しい部類に属す点から、この表部炭質物の分解は、必ずしも火焼の結果とは断言できず、後発した自然分解の可能性も考えられる。これらの点から、熱効果としての火焼温度は、芯部の最低箇所でも概ね100℃前後、表部の最高箇所でも500℃前後が限界と見られ、内部は原土の状態に近い。この同定基準瓦胎の観察から、原料土種とその堆積環境および地質背景は以下のように推定される。

1) 同定基準瓦胎 JT-J001の原料土種

瓦胎 JT-J001 では、炭質物混じりの粘土分が多く、広域テフラの AT が混じる。この炭質物は、ATの風化によって生じた活性アルミナが腐植を集積した産物と推定される。

通常、活性アルミナを多生した火山灰由来の軽質土は、孔隙率が極めて高く、可塑性の付与に要する水量も多い。自然乾燥段階から細かい亀裂を生じるが、付着水が蒸発する100℃強程度の温度帯で孔隙が顕著化し、結晶水の蒸発が始まる500℃付近では、既に膨張破砕している例が多い。

瓦胎 JT-J001の一部を抽出し、テスト炉内で1110℃の還元焼成を行った結果、成形好適の含水素地に対して約10%の線収縮を生じたが、逆の膨張箇所は見られない。ここでは、一定の耐火性能を備えた泥質岩由来の粘土鉱物が可塑性を支配し、非晶質粘土鉱物アロフェンによる団粒構造の影響は軽微である。所含の砂粒子は、石英・白色泥岩・砂岩・チャートが主であり、砂粒子には水磨の形跡が殆ど見られず、火山ガラスの遺存も良好な点から、河成堆積成分とは断じ難い。むしろ、雨水等によって丘陵などの緩斜面を短距離移動した程度と推定される。また、胎組織には、酸化鉄の濃淡による縞斑が明瞭であり、かつて原料土壌が地表付近の酸化環境に所在した様相を示す。

以上の点を総合すると、同定基準瓦胎 JT-J001の原料土種は、岩片砂・AT火山灰混じりの腐植質黒色粘土と考えられる。

2) 同定基準瓦胎 JT-J001に投影する堆積環境

瓦胎 JT-J001に含まれる AT火山灰は、約21000～22000年前^[2]に鹿児島湾奥部の始良カルデラに生じた大規模なマグマ水蒸気爆発による火山砕屑細粒子であるが、当時の気候は更新世後期の最終氷期最盛期へと向いつつあり、海面が大きく後退していた。このため ATは、高知県下でも現在の海面より相当低いエリアまで地上降灰が及んだと推定される。しかし、今から約8000～4000年前の縄文海進期をピークに、海面が AT降灰当時より大きく上昇した関係から、ATの地表遺存も縄文海進期の汀線移動に制約されたと考えられる。この縄文海進の最盛期に近い約6300年前には、南西諸島の鬼界カルデラ噴火による K-Ahが高知県下にも大量に降灰しており、現在の沖積平野より一段高い洪積台地や丘陵緩斜面・盆地状地形部等で、限定的な AT遺存を K-Ahが覆

うケースが想定される。また、K-AhはATより新しい広域テフラであり、相対的に遺存が良く、雨洗や掃流作用を受けにくい上記のようなイネ科草原植生の地形部で腐植を累積し、黒ボク土を形成している。

実際、高知県下の地表付近で検出される黒ボク土は、その殆どがK-Ahを母材あるいは副母材としており、ATの検出は稀少である。しかし、自然地形を前提とする限り、K-Ah層の残留し得ない表部地形にAT層の遺存を想定するのは比較的困難と考えられる。

3) 同定基準瓦胎JT-J001に投影する地質背景

既述のように、瓦胎JT-J001の原料土種は“岩片砂・AT火山灰混じりの腐植質黒色土”と推定し得るが、ここではその骨格と言うべき粘土と岩片砂を供給した地質背景に焦点を当てる。ここで言う“粘土”とは、伝統的な土器や土師器・須恵器・瓦・陶器類の原料に適する地質成分由来の極細粒砕屑粒子であり、土性では埴土～重埴土の範囲に相当するものを指す。

まず、極限的な少量分布が知られる珪質の火成岩やその変成岩を除くと、高知県下の粘土母材は泥質堆積岩類に限定される。高い圧密によって硬質化した珪質泥質岩では、風化抵抗性の強さから、まとまった量の粘土層を形成し得ない。これが可能な泥質堆積岩は、粒子間結合の緩い非固結型に限られる。この種の非固結泥質岩は、当然ながら高圧変成帯には見られず、高知県下では、秩父累帯と四万十帯北帯・南帯に分布する。更に、分布の傾向としては、地質構造線や断層近くに断続するため、その形成自体に造構運動と関わる部分も存在しよう。これらの主な分布を北から南の順に挙げると、①秩父累帯北帯の上部領石層南沿；②秩父累帯北帯の物部層；③秩父累帯北帯・中帯間の黒瀬川構造帯南沿（大樽—杉田構造線南沿）；④秩父累帯南帯の虚空蔵山層群；⑤四万十帯北帯・南帯間の安芸構造線沿および中筋構造線沿である。

上記の地層に断続する非固結型泥質岩を窯業適正面から見ると、凡そ次の評価が可能となる。

通常数cm～数10cmの狭い間隔で酸化鉄の濃淡による縞を帯びる。酸化状態の露頭で褐色～赤色の部分は、低火度で過焼・変形を来し、野焼・窯焼の別なく単味使用に適さない。逆に融媒成分に乏しい白色部では、焼結温度が高く、概ね1200℃以上の中～高火度焼成に向く。土器・土師器・須恵器類の平均的器肌は、これら露頭中の淡黄～淡赤橙色部を可塑材に用いる場合、最も高い復元性を得る。

従って、岩体露頭の直接採掘は、往々にして事後の選別・粉砕・水篩・精練工程という時間とコストを要する結果となり、現実的とは言えない。特に瓦類の製造では、大量の原土を要する点から、非固結泥岩を主たる母材とし、自然の選別・水篩を経た二次堆積土（いわゆる低級粘土）を用いたと考えざるを得ず、瓦胎JT-J001の場合も例外ではない。

この瓦胎JT-J001の原料土に二次堆積過程で混入した水磨を受けないチャート片は、非固結泥質岩の近辺にチャートの露頭が存在することを示す。四万十帯両帯にはチャートが比較的乏しく、非固結型泥質岩との共在には、これまで顕著な露頭との遭遇を得ない。このため、瓦胎JT-J001も、他のI型胎やII型胎と同様、秩父累帯の地質を投影すると判断される。

8. 県内広域調査の結果

瓦胎 JT-J001 を始めとする主流型瓦胎の観察結果から、これらの原料土採掘地層は秩父累帯のうち、非固結泥質岩・石英砂岩・チャートが共在し、広域テフラの覆う洪積台地・丘陵緩斜面・盆地状地形部等に該当する地域が、県内広域調査の重点に絞られた。

1) 広域調査の手順と範囲

調査の手順は、丘陵斜面部の切面や滑落面を対象とする非固結泥質岩と石英砂岩類の探索・サンプリングを経た後、それらの下方域で二次堆積の有無とテフラ混じり黒色土の遺存を探索した。チャートに関しては、ある程度の掃流距離も想定して、露頭の探索から外し、テフラの種類と共に黒色土サンプルの鏡下観察に持ち越した。秩父累帯の踏査範囲は、越前町一佐川町一日高村一伊野町一土佐市一高知市一土佐山村一南国市一野市町一土佐山田町の一帯に渡り、丘陵斜面～福部を中心に実施したが、実際のところ、宅地化や道路の新設・圃場整備等により、踏査・観察の及ばない区域が多数を占めた。このため、原料土採掘地点に肉迫するには、当初から相当の制約が存在することを改めて実感せざるを得ない。

2) 土生川中流域の集中調査と結果

踏査の対象を既述の地質・地形に絞り込んで約3週間が経過した11月30日、高知平野東部の丘陵際に所在する土佐山田町植地区の土生川中流点で、側方浸食崖に露出する旧川床堆積物をサンプリングした結果、岩片の種類と形状が瓦試料 JT-J001 と一致した。これまでの県内主要河川を対象とする川砂観察の結果から言えば、支流単位で差異が見られるため、この砂粒組成の一致を重視した。また、非固結泥質岩と石英砂岩の共存は、過去の土生川踏査で一部地点を確認している。これにより、調査対象を土生川流域に狭めた結果、川床浸食面にチャート層の横断する地点の存在や、数地点の側方浸食崖に可塑性と成形性を合わせ持つ広域テフラ混じり黒色土の遺存が認められた。当同定調査では、鏡下観察と火焼テストの結果、同定基準瓦胎 JT-J001 の特徴と基本的に一致する土壌試料 TUE-0101 を、この土生川中流左岸で得ている（2000年12月20日採取）。このサンプル一対に対して専門機関に委託実施した同定分析調査結果の詳細は、付録3に併載する。

II 土生川中流域の黒色土

今日、土生川の岸辺あるいは側方浸食崖の数箇所に遺存する黒色土には、火焼試験の結果、伝統的陶業産に比較的汎用的な性能を持つ点が判明しており、その産状を記すとともに、窯業史における地勢面から略考を加える。

1. 土生川流域の地形と地質

土生川は、高知県香美郡土佐山田町の中南部に位置する楠目地区の東麓山地に水源を発する小河川であり、南北を挟む山丘の合間を蛇行して南西に下る。楠目の予岳地区で川床勾配を緩め、扇頂を形成する。ここより南北幅400m程度の沖積平地を経た後、再び南北から丘陵の迫る幅100m余りの狭い平地を抜け、南側洪積台地の断崖下を流れ下って新改川に注ぐ。いわば、高知平野に向けて南西の一角に狭い口を開けた細長い袋状の沖積平野を形成する小河川である。谷状地形を沖積した平地であるため、国土調査では谷底平野に分類している。

この谷底平野の沖積源となった至近の山地地質は、秩父果帯中帯北部に属す。その北側山地の油石地区で黒瀬川構造帯南縁の大樽-杉田構造線と接するため、秩父果帯中帯の中でも非常に複雑な地質を顕わす。すなわち、右岸側山地の尾根-南中腹および裾部の一部斜面には蛇紋岩が露頭し、これを除く斜面部は、砂岩泥岩互層・赤色礫岩・チャート礫岩から成る。また、左岸側山地では、土生川上流域の斜面部が泥質岩、尾根部は灰緑色礫質砂岩から成る。更に、中流左岸側の丘陵斜面部では、扇頂付近が輝緑凝灰岩、中・下流域が砂岩泥岩互層と円礫質の洪積段丘で構成される。

2. 土生川の現況

この土生川沖積地は、既に圃場整備を終え、河道にも護岸工事が施されている。幸い、一部に自然の河川環境を残す工法が採用され、岸辺の盛土下に旧表土や、旧川床堆積層、浸食された基岩等の露頭が数地点で観察される。露頭する砂岩泥岩互層には、固結の緩い石英砂岩と非固結泥質岩の互層も含まれる。また、川床に浸食されたチャート層が露頭する箇所も存在しており、土生川単独でもⅠ型胎・Ⅱ型胎双方の岩片組成を供給し得る。土生川の上・中流域は、南側の丘陵および洪積段丘沿いに流れており、非固結泥質岩類はこの丘陵斜面に多い。また、この泥質岩にチャート層を伴う部分も見られる。北側山地上方の油石には、やや大型の蛇紋岩層が露頭するが、小規模な山腹盆地状の地形を呈するため、土生川谷底平野に対する蛇紋岩碎屑物の供給は、かなりの制限を受けたと考えられる。実際、土生川の旧川床堆積物には、蛇紋岩類が希薄であり、磁鉄鉱も突出した量とは言い難い。

大型の円-亜円礫を主とする旧川床碎屑物の上は、砂層から黒色粘土層へと漸移する。また、基岩の直上を、砂層-黒色粘土層が覆う部分も存在する。黒色粘土層を覆う現植生は、ススキとコケ類が主である。この黒色粘土層中の広域テフラはK-Ahが主勢であり、中流区間12地点で採取した試料中では、純粋なATは「京力」の小字が伝わる地点で採取した土壌試料TUE-0101一点のみである。

3. 土壌試料 TUE-0101 採取点の地層

袋状の谷底平野を抜けようとする土生川の流れが、須江の段丘斜面南端に差しかかる手前の区間では、南のマエヤマ丘陵裾に河道が密着する結果、左岸の基岩層を大きく浸食している。この部分の基岩層は、泥岩勝ちの砂岩泥岩互層である。砂岩は石英砂岩に属し、橙色～白色の泥岩は非固結型で、良質の陶土となり得る岩相を顕わす。この地点は植地区の小字「京力」に属し、地理座標は北緯33° 36' 38"・東経133° 40' 55"に位置する。上方のマエヤマ丘陵では、類似の泥岩層がチャートと共生する他、採取点付近の対岸でも石英砂岩と橙色～灰白～白色範囲の泥岩層が互層を成す。この状況から、土生川の形成過程に於いて、この区間一帯が多量の水積粘土を生み出した点に疑問の余地はない。

特に左岸の側方浸食崖には、白色泥岩を薄い河成砂礫層が覆い、更に角粒勝の砂層を経て腐植質黒色粘土層の堆積へと漸移する部分が注目される。この黒色粘土層は、砂の多含にも関わらず、強い可塑性と良好な成形性を保有し、AT火山灰を含む。岩片砂粒の構成も、付近の側方浸食崖やマエヤマ丘陵の露頭成分と一致し、同定基準瓦胎 JT-J001 と基本的な合致を見た。土壌サンプルの番号整理を経て、この試料に TUE-0101 を当て、瓦胎試料 JT-J001 との同定分析調査に供した。

4. 土生川黒色土に於ける粘土富化の環境条件

かつて土生川沖積地を覆っていた表部土壌の片鱗は、現況では土生川岸辺の教箇所に垣間見るに過ぎない。しかし、江戸中期頃の編著と目される『土佐州郡志』香美郡巻ノ八⁽⁴⁾には、「植村属山田郷」の土壌に関して「其土黒」と明記したうえ、山川の項目に「土生川在村南」と記す。また、長岡郡巻ノ十四では、同郡須江村の西を流れ下る新改川(眠川)に香美郡楠目源流の土生川が合する様子を「波布川源出楠目村流入眠川」と綴るため、「波布川」の当て字あるいは訓字も存在したことが知れる。字義通りとすれば、「土生川」の名義は、「はに(埴)うぶ(産)の川」であり、現代語では「粘土や土砂を生産する川」となる。

実際、「土生川在村南」と書かれる植村南限の丘陵地質は、既述のような粘土供給源であり、土生川中流の川床勾配は極めて緩く、粘土・シルト等の浮流碎屑物を流域に水積する谷底平野蛇行河川に属す。一般に取水の便から初期農業の成立し易い環境と言われ、この手狭な平地の開けた右岸側には、弥生～近世の遺物散布地としてモジリカワ遺跡や西クレドリ遺跡が知られている。その一方、水積促進型地形の弊害として出水による冠水害を避け難く、『植隠見記』⁽⁴⁾には、延享三年・寛政四年・天保十三年の三大洪水が伝わる。

1965年現地調査の経済企画庁国土調査第63号では、この植地区の表部土壌を深井沢流に分類し、「ほぼ全層黒ボクからなる土壌」と記録する。ただし、深井沢流は、土佐山田町新改の試坑番号 IC-7 を代表断面とする扇状地堆積様式の黒褐色土であり、Ⅲ層[礫層]を覆うⅠ・Ⅱ層[非固結水成岩、腐植質火山灰層を母材とする]を標準とする。その新改地区のⅠ・Ⅱ層に当たる黒褐色土は、当同定調査の採取資料に関する限り、全て粘土集積の乏しい疎鬆軽質型で、火焼性能が著しく劣る。県下で通常見られる黒ボク土は、このような疎鬆軽質土であるが、土生川岸辺の黒色土では、多量の粘土集積が見られる。この相違こそ、冠水に伴う浮流粘土成分の集積が度重なった結果で

あろう。

Ⅲ “陶村”の構造および秦泉寺廃寺跡の遺跡性格に関する推論

高知平野北東辺の土佐山田町丘陵地帯に集中する古窯址群は、新改川水系の谷陵沿いに分布する。

ここでは、当同定調査の結果を新たな視座に加え、古代穴窯群の立地概況と土生川中～下流域に於ける古窯址発見の空白や、これに繋がる“陶村”を再検討すると共に、この空白地帯に帰結した秦泉寺廃寺跡主流瓦胎原料の來源が同遺跡の性格評価に密接する点を指摘して、当調査のまとめとする。

1. 新改川水系の古窯址群立地と土生川中～下流域の古窯址空白地帯

現在、新改川の通常水位は浅く、一時的増水は別として、燒窯産期である晩秋～早春の乾季に恒常的水路として機能したとは考え難い。新改川本流ですら「眠川」と称される所以を『土佐州郡志』は、浅い平常水位と排水の速さによる旨を伝える。すなわち、長岡郡巻ノ十四、久次村の条で「是眠川也在村東南源出甫喜山」として甫喜山に水源を發する新改川を指示した上、同巻、比江村の条に於いて「眠川 或曰國分川傳云雨餘有大水不可涉川傍一瞬之間乍涸而易涉故曰眠川」と記す。同巻が基本的に漢文の語法に則る点から、「涉」は跋渉・徒渉による渡川を指す。更に同巻、國分村の条では、「…或曰眠川俗謂雨則水溢甚速而其枯亦速行人值水卒溢則坐眠岸上而待其涸故名」とし、降雨による新改川水位急昇の都度、通行人が岸辺で坐眠して水位低下を待つ慣わしに「眠川」なる俗称の所以を指摘する。これら新改川跋渉の通行を記す条項の見在は、いずれも領石川を合する下流域(國分川とも通称)の國分村や比江村であり、より水深の浅い中流域周辺に新改川水系の窯址群は分布する。それゆえ、特に國衙や國分寺・國分尼寺の比定地である國分・比江地区等への製品供給を背景に置く場合も、確たる実証性に乏しい古代舟運以外の利点に、窯址分布の実体を読み解くべきであろう。

陶窯業の立地は、生産可能な物的条件を根拠とし、優先順位の第一は採掘可能な原料土の存在：第二は製作と築窯に必要な調合水の存在：第三は焼成燃料に用いる草木竹の存在であろう。まず、原料土について言えば、最も採掘容易で即用性の高い素地素材は、母材を有する丘陵の斜面や裾域に水積分布する。次に調合水について言えば、原料土を水積した余水は、更に下方で小谷を成すため、採掘地付近で得られる。最後に草木竹について言えば、原料土採掘や築窯に先立って伐採する周辺の植皮が、窯焚燃料のほか窯壁用仮骨材や大型製品素地への混入スサとして低コストの素材となる。

これら工程で開発された斜面部に穴窯操業を継続する場合、資源の枯渇に伴って操業区域の比高上昇を避け難い。須恵器または瓦を焼造した新改川水系の古窯址としては、右岸西部の支流である渡川沿いに14基、右岸上手の小谷沿いに8基前後、左岸沿いに2基、左岸の大法寺地区の谷川

沿いに9基ほどが報告・或いは記録される。これら個々の立地は、支流である小川や小谷に沿い、大勢として古墳後期から奈良・平安期へと谷筋を登るように立地高度を上げる。この状況は、前述した窯業生産の技術的論理と概ね合致する。

土生川は、新改川下流域の水系では最大の支流であるが、これまでの所、楠目の予岳地区で形成される扇頂部の右岸側に予岳窯跡(古墳)、同左岸側に長谷山1号・2号窯跡(平安)の計3基の存在が知られるに止まり、その実体も明確とは言い難い。以下、楠目・植を経て須江南部の洪積台地段下で新改川に合するまで古窯址発見の空白地帯が続く。国術城比定地東辺の比江庵寺跡出土瓦中に、植タンガン窯址供給瓦片の混在が指摘されるが、その窯址は、植地区でも一丘陵を隔てる新改川に面し、立地上は土生川沖積の直接的影響下には無い。唯一、地名考証および周辺に県下最大規模の古窯址群を擁する立地から、須恵器生産の拠点もしくは陶部集落に比定される須江地区が土生川沖積扇で植地区と繋がる地形は、極めて興味深い。この植村は、天正十六年(1588)記帳の長宗我部地検帳や元禄期の本田新田地払帳⁶⁾に於いて「上村」と記される。その西隣で新改川と土生川の両沖積作用下に形成された扇状地村落は、明治に「須江」と改書される以前、「陶村」あるいは「陶之村」と綴られていた。この須江地区中央部に「ヨ子ガウチ」なる小字があり、その水田中の古窯址消滅が伝えられ、一応「須江米ケ内サンマイ窯跡」と仮称されるが、従来物的資料による裏付けを欠く。ただし、かつて「陶村」で須恵器や瓦を焼造した可能性は否定できず、その際、「陶村」南東部と緩斜面で接する土生川下流域の粘土資源は、無視し得ない根本要素となる。

2. 密接する土生川黒色土と「陶村」の地理的關係について

当同定調査を通じ、秦泉寺庵寺跡出土の古代瓦類に関して、主要原料の性能域と定性分析データによる生産実態解明に原点的な端緒を得た。すなわち、圧側の多量を制する瓦胎原料土は、遺跡から東北東に約13.5km隔てる土佐山田町植の土生川中流域に水積する黒色土を代表型とする腐植質粘土であり、所含の広域テフラは県下に遺存の多いK-Ah(鬼界アカホヤ火山灰)を主とするが、稀に遺存発見例の限定されるAT(始良丹沢火山灰)に置換する瓦胎も存在する。高知県下の既往発掘調査に伴うATの検出認定は、四万「帯地質」に属する宿毛市の二例を数えるに過ぎない。この点、当同定調査で試料選定した縄罫印日文瓦胎JT-J001と黒色土壌TUE-0101の一对が、秩父帯帯に特徴的な地質成分枠で極高度の同定性を示した上、県下に稀少なAT火山灰のみを含む後期洪積世の堆積層所属という局面でも合致する。更に、土壌形成の過程で広域テフラが母材の一角を担い、非固結泥質岩由来の粘土と植物性炭質物の集積が豊富な土壌試料は、新改川水系の窯址集中地帯を含む当調査収集試料中にも土生川辺黒色土に比肩する例を見ない。しかも、土生川辺黒色土では、堆積環境や層準により低～中～高火度域の各陶窯業適正すら満たしている。この類稀な黒色～黒灰色土の露頭は、左岸「ツクリオカ」と対岸「キノカサ」を東限とし、試料TUE-0101を採取した左岸「京力」と対岸「モジリカワ」を西限とする東西約870m(直線距離)の区間に点在する。それらの分布水準は、上手の「ツクリオカ」で標高37.5m前後、下手の「京力」で標高27.5m前後と概算される。河床勾配の緩い中流域に当たり、河道が大きく蛇行する。過去の土師器生産あるいは土師土給地の履歴を暗示する「ハヅ」の小字も、この区間の左岸に現存する。陶窯業適正面では、土師器・須

恵器供膳具のような薄胎には、上位層準の少砂部位が適し、砂量の増す中位層準は須恵器臺や埴輪・瓦のような厚胎に適す。また、洪積礫層や基岩層と接する粗砂礫の下部層準は、道具土や窯壁等の耐火材に適す。かかる汎用性は、可塑性と耐火性を支える結晶質粘土鉱物：粘性と成形性を増す腐植性炭素；素地の乾燥割れや熱収縮を抑える石英・チャートやバブル型火山ガラスなど珪酸質粒子の各主要成分が、広い含率幅を備える堆積上の特性に由来する。

古代の陶部や瓦工らが、新改川水系の山丘で窯炎を掲げた当時、この種の易採掘性と窯業好適性の際立つ黒色土が土生川中流域を覆っていた景観に疑問はなく、生産技術の一般的な論理上、この一帯は操業初期に開発すべき地形・地質環境を備える。「はに(埴)うぶ(産)の川」と解し得る「土生川」の字義は、当同定調査の結果とも合致し、その「ハブガワ」の小字は、植地区南西端と直接する須江地区中東の角部に現存する。かつての「陶村」中樞部に比定し得る須江上段遺跡から同定土壌試料TUE-0101採取地点までの最短距離は、わずか300m前後を測るに過ぎない。すなわち、「陶村」中樞部に視座を据えて周辺の陶土資源を探索した場合、土生川辺の黒色土は、易採掘性・汎用性・至近性に加え、沖積扇で繋がる易搬入性の点に於いても、他に追従を許さない長所を備える。ここから浮かび上がる「陶村」中樞部の性格は、単なる陶部居住区の域に止まらない。むしろ、搬入した素地原料土を選別・集積し、成形・乾燥工程を経た後、特に比較的初期の操業段階では、東面後背の洪積段丘斜面や丘陵斜面等で焼成にも及ぶ一貫システム型の須恵器・瓦類製産場の姿に近い。特に瓦類や大甕等の製作には、膨大な原料土と燃料薪の消費を伴い、生産の論理自体に操業域の面的拡散要素を内在する。後に、律令制の崩壊による操業庇護の喪失と需要の低下が、この拡散に拍車をかけたと考えられる。この視点から言えば、須江上段遺跡北部の「須江米ヶ内サンマイ窯跡」伝承は、虚実不定としても無意味とは断じ得ない。この地区東面の段丘や付近の丘陵緩斜面は、開墾・営農・宅地化等、古くから開発の重なる区域であり、かつて窯基が点在した場合でも、その遺存条件は極めて厳しい状況と思われる。

窯業生産の死命を制する原料土の所在と性能という原則から言えば、須江上段遺跡付近に想定される「陶村」中樞部の立地自体が、土生川黒色土の分布を背景に画定された可能性が高い。この点は、原料土粒子の一角にチャートや広域テフラを含む須恵器片が、高知平野各所の表採試料中に多数を占める現象からも窺え、秦泉寺窯跡第6次発掘調査でサンプリングした須恵器細片27点389g中の23点316gという当該比率に関しても、その例外ではない。

結論として、秦泉寺窯跡の遺物サンプル例が示すように、須恵器類と瓦類には同種の沖積扇や洪積層に取材する大きなグループが存在し、概ね器の大小や器壁の厚薄に対応して原料土の取材層準を調整したと見られる。原料土種とその所在は、陶窯業の死命を制する根幹であり、土生川黒色土のような汎用型造正土に対しては、製作器種や用途に応じた連携的な採掘・選別作業が不可欠と考えられる。この点は、土生川黒色土を用いる須恵器工人と瓦工が、実質的に同一集団に属し、いずれも土生川下流右岸の扇状地を占める「陶村」を拠点に活動した可能性を強く示唆する。

3. 秦泉寺窯跡の性格問題と当同定調査の結果

最後に、視座を秦泉寺窯跡に戻した場合、既述のように遺跡付近で瓦胎組成を満たし得ない

大量の古代瓦類の出土は、明らかに搬入の結果を物語る。この意味に関する限り、当同定調査の結果は、秦泉寺廃寺跡もしくはその至近に古代寺院が存在したとする従来の推定と矛盾するものではなく、遺跡性格をめぐる今後の検討作業に一つの指標を加えるものと思われる。

注

- [1]・[2] 『地層の知識—第四紀を探る』町田洋・新井房夫・森脇広著 1986年12月15日東京美術
- [3] 土生川周辺の地質基岩名は、経済企画庁1966年発行の国土調査第62号付図に準拠する。
- [4] 『土佐州郡志 上』(復刻版) 土佐史談会 昭和58年11月10日発行に拠る。
- [5] 『土佐山田町史』別編事物志“災害と防災”831頁に引見あり。
- [6] 『土佐七郡のうち本田新田地帳』 松本英子発行 55年8月1日発行に拠る。

図版1 同定瓦胎・土壌セットの組織と土壌採取点の地層



1.同定基準瓦胎JT-J001の凸面に残る縄蓆印目



2.同定基準瓦胎JT-J001の非焼結ゾル状含水組織



3.同定土壌試料TUE-0101採取地点の地層—土生川左岸

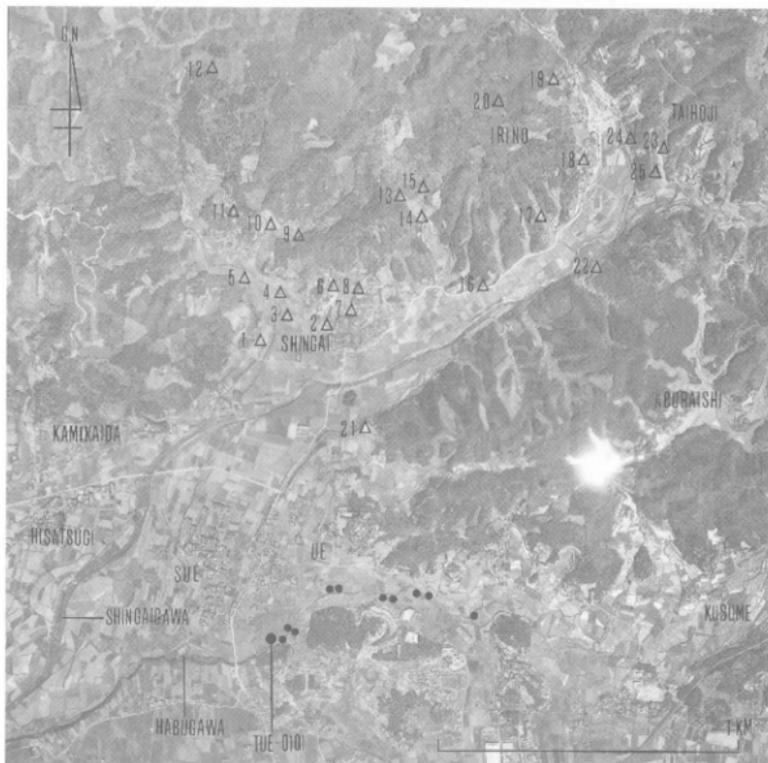


4.同定土壌試料TUE-0101の組織—土生川左岸



5.同定土壌試料TUE-0101採取地点の地層断面図—土生川左岸側方浸食崖

図版2 新改川流域の窯址分布と土生川黑色土層の露頭地点



所用の空中写真は、建設省国土地理院が1962年5月8日に撮影したもの(写真番号MSI-62-03X-006B-4)

(凡例)

- 1△-西ノ内窯跡(古墳); 2△-小山田1号窯跡(古墳~奈良); 3△-小山田2号窯跡(古墳~奈良); 4△-小山田-3号窯跡(古墳~奈良); 5△-西谷1・2・3号窯跡(奈良); 6△-林ノ谷1号窯跡(古墳~平安); 7△-林ノ谷2号窯跡(古墳~平安); 8△-林ノ谷3号窯跡(古墳~平安); 9△-東谷1号窯跡(奈良・平安); 10△-東谷2号窯跡(奈良・平安); 11△-東谷松本窯跡(奈良・平安); 12△-ドヲモダ窯跡(平安); 13△-大谷1号窯跡(奈良~平安); 14△-大谷2号窯跡(奈良~平安); 15△-大谷3号窯跡(奈良~平安); 16△-三反田古窯跡(平安); 17△-八ノ谷窯跡(平安); 18△-岡ノ丸窯跡(平安); 19△-城ノ谷1号窯跡(古墳・平安); 20△-城ノ谷2号窯跡(古墳・平安); 21△-植タンガン窯跡(白鳳); 22△-植セガイ窯跡(古墳~奈良); 23△-大法寺1号窯跡(奈良・平安); 24△-大法寺2号窯跡(平安); 25△-大法寺3号窯跡(奈良・平安);
- TUE-0101-同定分析用黑色土試料の採取点(土生川左岸、北緯33° 36' 38"・東経133° 40' 55");
- 土生川黑色土層の露頭地点; SHINGAI-新改; IRINO-入野; TAIHOJI-大法寺; KUSUME-楠目; ABURAIISHI-楠目油石; UE-植; SUE-須江; KAMIKAIDA-上改田; HISATSUGI-久次(以上、土佐山田町); SHINGAIGAWA-新改川; HABUGAWA-土生川

付編3 秦泉寺廃寺跡出土瓦類の原料土種と 採掘地層の同定に関する調査Ⅱ

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高知市に所在する秦泉寺廃寺跡の発掘調査では、水田耕作土直下の遺物包含層より瓦の破片が比較的多数出土している。出土した瓦のうち、瓦当類は白鳳様式が主流であるとされているが、平安前期に下るものも少数存在するとされている。また、瓦当以外の瓦では特に凸面に縄蓆紋の印目が確認されているものが注目されている。この瓦については、瓦当との対応関係が不明なために詳細な時期の決定はなされておらず、現時点では「古代の縄蓆紋瓦」と称されている。

発掘調査者によるこの瓦の胎土の観察と周辺地域における踏査およびサンプリングから、秦泉寺廃寺跡出土の古代の縄蓆紋瓦の原料は、遺跡より東北東方向へ約13kmほど離れた場所にある上生川左岸の粘土層である可能性が高いと考えられた。本報告では、この瓦の胎土と粘土との地質学的な特性を把握することにより、上述の可能性について検討を行うものである。

1. 試料

今回の試料となった瓦は、サンプル番号 JT-J001 とされた瓦片である。I 区の北端バンクにおいて水田耕作土直下の遺物包含層より出土した。出土時の瓦は、周囲の包含土壌と同程度に軟弱であり、全面が土壌と癒着していたとされている。採取時に約20余りの小塊に分離し、変形を生じている。また、これらの小塊の洗浄については、水洗では胎土の洗損が著しいために、切り出しナイフによる付着土壌の除去で留められている。分析試料としては、7片の破片 (JT-J001a~g) が選択された。今回の分析では、さらに7片の中から比較的分量があり、また表面の亀裂や劣化程度の比較的軽いと思われる JT-J001e を選択した (以下本文中では瓦試料とする)。

一方、瓦の原料と考えられている粘土試料は、サンプル番号 TUE-0101 とされた黒灰色を呈する細砂混じりのシルト質粘土 1 点である (以下本文中では粘土試料とする)。試料は、土佐山田町植の土生川左岸に形成された小規模な側方侵食崖に認められた粘土層より採取された。土生川は、高知平野北東部を流れる小河川であり、高知平野北部を南西方向に流下する国分川の支流となっている。

試料採取地点では、軟質の白色泥岩層の上位に厚さ 10~20cm ほどの砂礫層を経て厚さ 20cm ほどの黒灰色粘土層が認められている。黒灰色粘土層の最上部数 cm は腐植土層となり現在の地表を構成している。なお、この黒灰色粘土層より採取された土は、成形性と耐火性にとすぐれ、熱収縮が小さいために大型品の焼成にも適するといわれている。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、瓦のような比較的粗粒の砂粒を含む胎土の試料の分析において、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。また、後者の方法は再現性の高い数値によるデータが得られる。ここでは、重鉱物分析と薄片作製観察および蛍光X線分析の3方法を用いて試料間のデータを比較検討する。なお、黒灰色粘土層中には細粒の火山砕屑物からなるテフラが含まれていることが現地観察において確認されているが、ここでは、黒灰色粘土の特性の一つとしてその火山砕屑物の特徴を把握し、テフラの特定も行う(テフラ分析)。この際に火山砕屑物が火山ガラスの場合は屈折率の測定を行う。以下に各分析方法の処理過程を述べる。

(1) 重鉱物分析

試料は、適量をアルミナ製乳鉢で粉砕、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm—1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物のプレパレートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

(2) 薄片観察

薄片は、試料の一部(粘土試料は樹脂による固化の後)をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は岩石学的手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにし、また鉱物の加熱変化をもとに焼成温度を推定した。

(3) 蛍光X線分析

主要10元素の SiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 TiO_2 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 およびLOIについて蛍光X線分析法によって分析した。以下に各分析条件を記す。

1) 装置

理学電機工業社製 RIX1000 (FP法のグループ定量プログラム)

2) 試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製 TI100;10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉砕し、105℃

で4時間乾燥させた。この微粉砕試料についてガラスビートを以下の条件で作成した。

溶融装置：自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1) 溶剤及び希釈率：融剤(ホウ酸リチウム)5.000g; 試料0.500g

剥離剤：LiI(溶融中1回投入)

溶融温度：1200℃ 約7分

3)測定条件

X線管：Cr(50Kv—50mA)

スペクトル：全元素 K α

分光結晶：LiF,PET,TAP,Ge

検出器：F-PC,SC

計数時間：PeaK40sec,Back20sec

(4)テフラ分析および屈折率測定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスの屈折率測定には、温度変化型屈折率測定装置"MAIOT"(古澤,1995)を用いる。

3. 結果

(1)重鉱物分析

瓦試料と粘土試料は互いに類似した重鉱物組成を示す(表1、図1)。

組成は、ともに斜方輝石が最も多く、35%程度を占め、他に少量の角閃石、緑レン石、不透明鉱物を含み、微量の単斜輝石や黒雲母などを伴う。なお、粘土試料は瓦試料に比べて角閃石の量比がやや高く、また、瓦試料には微量の藍閃石と思われる角閃石族の鉱物やジルコン・ザクロ石・電気石などの鉱物も認められた。

(2)薄片観察

瓦試料の胎土中に認められた砂粒は、全体的に少量であり、主に石英と曲率のある平板状のバブル型とよばれる火山ガラスからなる。他に鉱物片として微量の斜長石と極めて微量のカリ長石、斜方輝石、黒雲母、白雲母が認められ、岩石片として微量のチャートと砂岩および極めて微量の

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	藍閃石	角閃石族	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	合計
JT-J001e	1	87	7	12	0	4	4	1	1	16	2	38	77	250
TUE-0101	1	85	3	43	1	0	2	0	0	13	0	31	65	250

表1 重鉱物分析結果

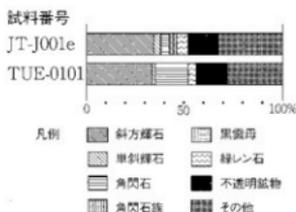


図1 重鉱物組成

泥岩、凝灰岩、結晶片岩が認められた。

粘土試料には、多量の砂粒が含まれている。砂粒の多くは石英粒であるが、他に鉱物片として斜長石、岩石片としてチャートと泥岩およびバブル型の火山ガラスがそれぞれ少量ずつ認められた。

さらに、微量のカリ長石や砂岩および結晶片岩と極めて微量の角閃石、黒雲母などの鉱物片や岩石片が認められた。各試料の観察結果を表2に示す。

表2 薄片観察結果

試料番号	種類	砂粒		砂粒の種類構成											孔隙度	方向性	粘土残存量	合計量		
		全体量	淘汰度	最大径	石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	黒雲母	白雲母	チャート	泥岩	砂岩					凝灰岩	火山ガラス
JT-J001e	瓦破片	△	○	0.5	△ (+)	+	(+)		(+)	(+)	1	(1)	1	(+)	△	(+)	×	△	○	○
TUE-0101	黒灰色粘土	◎	○	0.5	◎	+	△		(+)	(+)	△	△	+		△	+	-	-	-	◎

量比 ○：多量、○：中量、△：少量、+：微量、(+): きわめて微量、砂粒の最大径はmm。

淘汰度・孔隙度・方向性 ○：良好・多い・強い、△：中程度、×：不良・少ない・弱い。

孔隙度・方向性・粘土残存量は粘土質地の特性を示す項目である。

表3 蛍光X線分析結果(化学組成)

試料番号	種類	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Igloss	合計
JT-J001e	瓦破片	67.41	0.70	18.16	2.87	0.03	1.15	0.54	0.67	2.33	0.04	6.10	100.00
TUE-0101	黒灰色粘土	66.95	0.73	15.05	3.45	0.03	1.74	0.41	1.58	1.80	0.04	8.22	100.00

*単位は重量%

(3) 蛍光 X線分析

各試料の化学組成を表3に示す。SiO₂の量比は両試料ともに67%程度である。一般に土壤中において比較的移動しやすいといわれているMgO、CaO、Na₂O、K₂Oの各成分に両試料間でやや値の差が認められるが、比較的移動しにくいといわれているTiO₂やP₂O₅では両試料ともに近似した値である。

(4) テフラ分析および屈折率測定

試料には、スコリア・軽石は認められず、火山ガラスが少量認められる。認められる火山ガラスは、薄手の平板状や、薄く緩い曲面にY字状の高まりを持つ形態であるバブル型火山ガラスであり、そのほかわずかに小気泡を多く有するスポンジ状の軽石型火山ガラスも認められる。火山ガラスはすべて無色透明である。

火山ガラスの屈折率を測定したところ、図2に示す結果が得られた。屈折率は1.4980-1.5016であり、狭い範囲にまとまっている。

この火山ガラスは、その形態と屈折率から、始良Tn火山灰(AT:町田・新井,1976)に由来する。ATは南九州の始良カルデラを給源とし、約2.2~2.5万年前に噴出した広域テフラである(町田・新井,1992)。

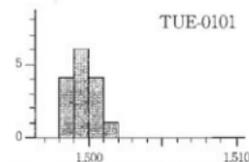


図2 火山ガラスの屈折率
横軸は屈折率、縦軸は測定個数

4. 考察

今回の分析により把握できた瓦試料および粘土試料の特性は、重鉱物組成、薄片下の砂粒の構成および化学組成のどれにおいても互いによく類似するといえる。結果の項でも述べたように詳細にみれば、重鉱物組成では角閃石の量比や微量の鉱物の有無、薄片下の砂粒構成では砂粒の全体量、そして化学組成では土壤中で比較的移動しやすい成分にそれぞれ若干の違いが認められるが、本質的な違いとはいえない。ここでいう「本質的な違い」とは、分析結果が示唆する試料採取地の地質学的背景のことを意味する。

粘土試料の採取された土佐山田町植付近の沖積低地は、その地形から物部川、国分川、土生川の3つの河川による作用により形成されたと考えられる。これらの河川は、いずれも四国山地東南部の山間において深い谷を形成しながら流下し、高知平野東部に至っている。したがって、土佐山田町周辺の段丘や低地を構成する碎屑物は、河川上流域の四国山地東南部を構成する地質に由来する岩石片や鉱物片となる。経済企画庁総合開発局(1974)などによるこの地域の地質概要では、山地を構成するのは秩父帯とよばれる中生代に形成された砂岩や泥岩を主とする地質である。また、この分布域の中には局所的にチャートの分布も認められている。粘土試料の薄片下で認められた砂粒のうち、石英の鉱物片や砂岩、泥岩、チャートの岩石片などの産状は、上記のような地質学的背景を反映している。また、重鉱物組成で認められた斜方輝石や角閃石および薄片下で認められた斜長石や火山ガラスは、上記の山地を構成する地質とは別の由来を持つ碎屑物である。前述のように粘土試料に含まれている火山ガラスは、約2.2~2.5万年前に土佐山田町周辺に降灰したATに由来する。斜方輝石や角閃石は、顕微鏡下では比較的新鮮であることから、おそらくATに含まれる珪晶(町田・新井,1976)に由来すると考えられ、火山ガラスとともに降下堆積したものであろう。これらのことから、粘土試料の採取された黒灰色粘土層は、約2~3万年前以降の更新世後期の堆積層である可能性がある。

一方、瓦試料の各分析結果から推定される原料粘土採取地の地質学的背景は、当然のことながら上記の粘土試料採取地の地質学的背景と全く同様に考えることができる。すなわち、瓦の原料となった粘土の採取地の後背には秩父帯の砂岩泥岩が分布する山地があり、また採取地には更新世後期の堆積物が分布しているという状況である。この時点で、今回の試料となった黒灰色粘土が秦泉寺庵寺出土土瓦の原料として使用されたと考えても、何ら矛盾する点は認められない。むしろ、原料粘土である可能性は、今回の分析によりさらに高まったといえる。

なお、秩父帯の分布は高知県を東西に横断し、ATは高知県全域に降灰しているから、上述のような地質学的背景を有する地域は県内各所に分布すると考えられる。より確かな原料粘土採取地の特定には、これらの地域における試料の採取と分析による検証も必要と考えられる。

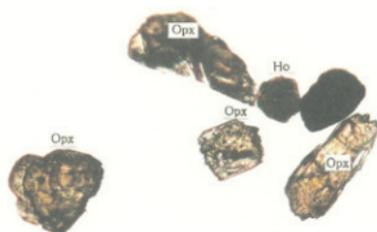
引用文献

- 古澤 明(1995)火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101,p.123-133. 経済企画庁総合開発局(1974)土地分類図39 高知県.

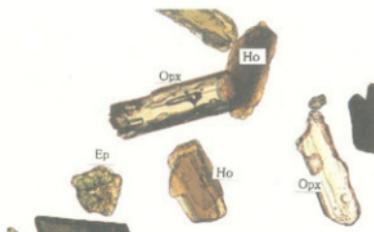
町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—始良 Tn火山灰の発見とその意義—, 科学
46,p.339-347.

町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス, 276p., 東京大学出版.

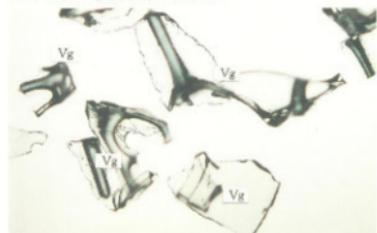
図版1 重鉱物・テフラ・薄片



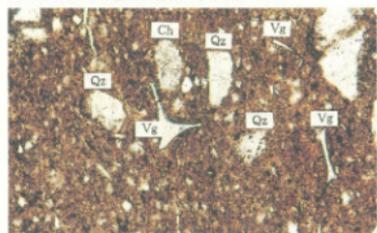
1. JT-J001 (瓦破片)中の鉱物



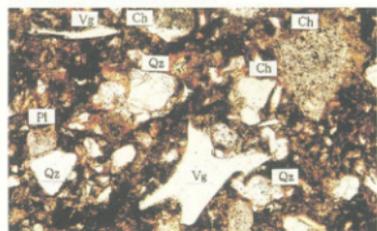
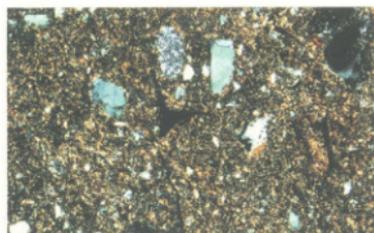
2. TUE-0101 (黒灰色粘土)中の重鉱物



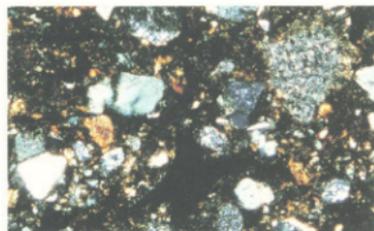
3. TUE-0101 (黒灰色粘土)中のテフラ



4. JT-J001 (瓦破片)中の薄片



5. TUE-0101 (黒灰色粘土)薄片



0.5mm

Opx: 斜方輝石, Ho: 角閃石, Ep: 緑レン石, Qz: 石英, Ch: チャート, Vg: 火山ガラス,

4,5については写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写 真 图 版



1. 調査区北壁(西半部)



2. 調査区北壁(東半部)



3. 調査区東壁



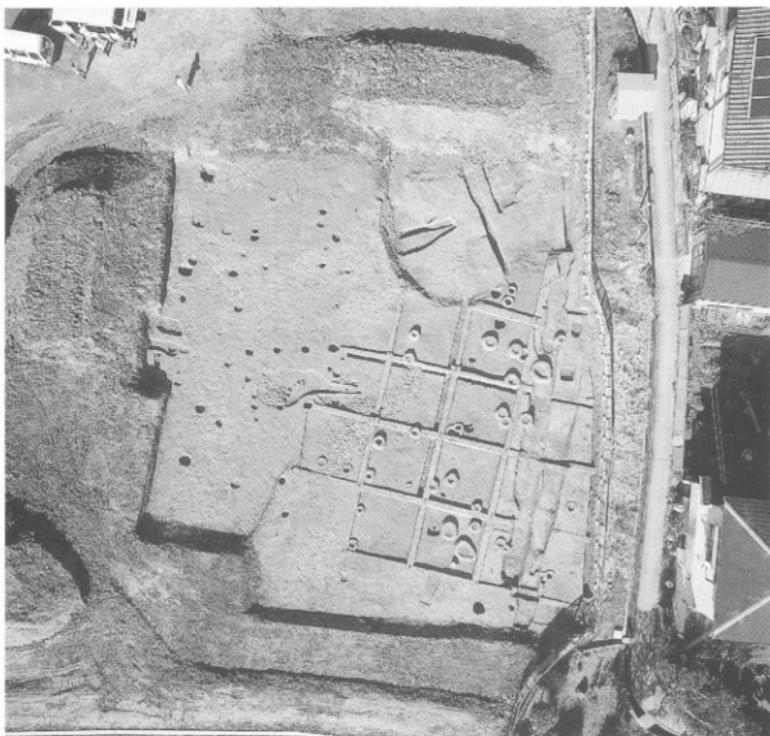
4. 調査区西半部完掘状況(上層)



5. 調査区西半部完掘状況(中層)



6. 調査区西半部完掘状況(下層)



7. 調査区東半部完掘状況



8. SD1遺物出土状況(東から)